
俺と俺の嫁（エヴァ）と召喚獣だと？

K

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と俺の嫁エヴァと召喚獣だと？

【Zマーク】

Z4598Z

【作者名】

K

【あらすじ】

第0話の事前説明を良くお読みください

第19話アップいたしました！（13日）

第20話は14日、15日にアップ予定です（13日）
アップ予定変更がある場合は、早めにお知らせいたします

第0話～事前説明～

以下説明を全て読み、読んでもいいと思つた方のみ本編を「」覗くください。

『魔法先生ネギま！』の世界に転生し、原作を終えて、築いたハーレムの嫁達と楽しく暮らしていた… のだが、神が勝手に『バカとテストと召喚獣』の世界に飛ばしやがった！？しかも嫁の1人であるエヴァンジエリンと共に！？

主人公の名前は、ルルーシュ・T・ランペルージ？『コードギアス』のルルーシュの容姿を持つ主人公であるが、ギアスはもっていないからね？

無駄な能力達… 死亡フラグのない世界じゃ、特になにも必要ないし！

そんな主人公と、エヴァンジエリンが織成す、まつたりとした、文月学園での生活はどうなる・・・！？

更新不定期

誤字脱字の指摘や感想、質問等なんでもお待ちしております

魔法先生ネギま！の原作をご存知の方で、こんなエヴァ見てられない！という事がありましたら、お引取りお願いします

魔法先生ネギま！の原作をしつているほうが読みやすい部分があるかもしれません

「コードギアスの原作等はしらなくても問題ありません、主人公の容姿、また、名前をお借りしているにすぎないので、知らない方は、【コードギアス ルルーシュ】などで検索して、容姿だけ確認していただければ、読んで行かれる上で想像しやすくなるかと思います

また、不適切な表現や、何か問題があるようなことがありましたら、ご報告ください。確認し次第対応させていただきます

また、個人的にこんな表現が嫌だとか、こんな話しお流れ嫌だというような嫌悪感、また見てられないと思うようなことがありましたら、速やかにお引取りください

作者は物語を書く者としてはまだまだ一般人レベルですので、表現力や、話の転開等しつくりこない部分も多々あると思います、どうぞ温かい目で見ていただければと思います。アドバイス等は随时お待ちしております

第〇話～プロローグ～（前書き）

K 「はい、どうりで、行つてきなさい」

? 「え？ 何？ 何？」

本編開始

第〇話～プロローグ～

はあ・・・

今度はバカテスか・・・・・

俺は現在、文月学園近くのマンションの一室にいる

そして俺の目の前にある手紙には、いつ記されている

『まじでじ』苦勞『』苦勞『』

ワシジヤ、ワシ・・・セウー・セウジヤ、生意氣な貴様を毎度毎度

転生せりにやつてこる、ワシジヤ』

「シネマ…ワシさんなんて知り合いいたか?

驚?

飼つてた記憶はないな

『いや、天界で会つた神じや

前回はフラグ乱立の世界、魔法先生ネギまじやつたの

今回はそういう余計なものは心配するでない
いたつて普通のバカとテストと召喚獣の世界じやから』

うん…神のおじさんね、あの電波オヤジね

そういうや、ネギまの世界について、無事原作も終わらせて数十年ほど
生活してたと思つんだけど・・・?

つて待て、俺の嫁達はどうなつた?

仮契約で、不老不死の効果がシンクロしてたはずだが

現在俺が、別の世界にいるつてことは…

『ああ、嫁達のほうは幸せに暮らしておるよ
まあこの世界で100歳ぐらいまで生きて死んでくれたら、向こう
に戻すから』

一応、こちらで長期の仕事という扱いで、当分帰れないことを伝
えてあるし
まあ時間系列が異なるから、いつまでの100年が向こうの一
年ぐらいにしてあるわい』

ほう、なんといつ『都合主義具合だ

「それは、便利だな」

「うえ？」

気づかなかつた、となりに座つて手紙と一緒に覗く存在が居たことに

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル

俺の嫁の1人だ

「エヴァア？』

「うん?なんだ?そんな驚いた顔をして
その手紙に書いてあるだり?..」

ん?エヴァが指した先には、読んでいた手紙

続きを読むのであるのか

『とは言つてものづ..死んだわけじゃないから、能力調整ができる
のじやよ

暴走などもしかねないし・・・といふことでじや、エヴァンジ
エリン殿をお主のストッパー役として一緒にその世界に送つてお
たからの

まあ半分休暇とでも思つて楽しむがよ!』

はあ.....

でもよ...この原作って高校だよな?

見た目小学生のエヴァを送つてくるぐらいなら、あすにちゃんととかさ
あると困つよ.....つてもう面つても遅いな

『「ということでじや、能力制限がついてないから」の、その世界での能力使用等は充分注意をはらってくれの…不老に関してじやが、認識阻害で将来的には、違和感をなくして生活してくれのちなみにやつても、らうことは、特にないのじやが

その世界の住人2人がたぶん他の神のミスで、魂情報」と消えてしまったようでの、その埋め合わせなんじや
ということで頑張れ

B ノ神のワシより

「へえ～」

「それで、よくわからないまま、変なオヤジに仕事の付き添いとして連れてこられたのだが、ここは別世界なのか？」

ああ、エヴァにも説明しなきゃいけないし

とこりかこの時点で俺の名前も俺の特徴もなにも出てきてない気がするし…

まあいいか

「とりあえず、この世界は、そうだな…簡単に言えば旧世界の表の世界のみしかないと考えてくればわかると思つ

「ほつ……魔法はないのか？」

「ないよ、麻帆良のように超人じみた中学生もいないし
裏社会といふなら、ヤクザ、マフィア、それから外国とかには暗
殺を請け負うような本当に裏に準じている人もいるんじゃないかな」

「ほつ……それではゆっくりルルと過ごせそうだな」

「おお、エヴァー！俺の名をやつと呼んでくれたか

俺の名は、ルルーシュ・ランペルージ

あのギアスを使い祖国を潰そうとするあのお方の偽名を、一部だけ
いじつただけです

何故そんな名前か…簡単です、容姿があれなんですもん

一応身体能力は、全体的に高いと思いますね、ネギまの世界で死線
をぐぐりぬけてきましたから

その他能力ですが、空間把握能力EX、金運EX、恋愛S～EX（
詳細数値化不可）、脳波伝達速度SS以上、魔力はチートバグキャラ
並、気はラカンほどではないがそこそこの程度、動体視力SS
SもしくはEX判定、ご都合主義値測定不能、主人公補正測定不能

がそなわっております

そうですね、こんな平和な世界で使うことがあるかわかりませんが、武力的な面でのご説明を入れましょうか

得意魔法属性：全属性 一番適正があるのは闇、次に何故か治癒や結界などの補助魔法の適正が高い

技・カンガ法取得済み、居合い拳も可能、京都神鳴流剣技使用可能

武器・特になし

特殊能力・ミリオンゴッド（金運値異常特性）、魔王様（眠い時、もしくは眠りを邪魔された時光臨）、ニコナデボ（微笑みながら撫でると発動）、ガッシュベルのティオの術が使用可能

とまあそんな感じですね、一応武器もありますが、銃刀法違反になるのは嫌なので、影の倉庫に封印します

「H'G'A、これからどうじょうか」

「さあな、神とやらのもう一枚の手紙に書いてないのか？」

もう一枚の手紙だと？

はつーもう一枚あつた

『P.S. お主等の戸籍は用意してあるし、特別に、元の世界の貯金から少し降りして、こちらの世界の銀行に移してある
それと、もちろん、わかつてあるじやうが、文用学園にかよつてもらうからの…でなければ話がすすまん
といふことで、転入試験は今日じやからの』

今日だと？

今何時だ…

「エヴァ、今何時だ？」

「神からの荷物に携帯が入っていたから、それで確認したらどうだ？」

神からの荷物だと？

ああ、田の前に普通にあったわ

手紙に氣をとられすぎて視界に入らなかつた

中身をあさる

銀行のカード+通帳（俺名義で一組）、健康保険証（エヴァと俺の）、スマートホン（2台）、現金30万（茶封筒に、『手持ちないと不便じゃ わづから、少しあるしておいたからの』と書いてある）

ほつ…

「『』の携帯2台あるが、1台私が持つといつ」とか？

「せうだらうな・・・魔法があるような世界じゃないから、自然魔力が多くないから、念波とかより携帯の方がいいだろ？

「そ、そつか…使い方覚えられるかな……」

そつ、エヴァは重度の機械音痴である

原作のエヴァはどうか知らんが

ここにいるエヴァンジョリン・A・K・ランペルージはそつので
ある

「まあ仕方ないわ、少しずつ覚えていけばいいだろう?」

「やつだな、それで、時間を確認したかったんじゃないのか……?」

「あ、ああ……」

ん・・・？流れのじか、もう時間やばい！遅刻！

Fクラス入り確定♪

とかかと思つたんだが……そんなことはないようだな

とこつことで時間があるので文翔学園のことを一通りエヴァに教えたのだが

「ふんっ、ならばAクラスといつ最高の環境で、過激なじやないか！」

「そうだねえ……ってエヴァ、勉強できるの？」

規模が違う、麻帆良での学生時代エヴァのテストの点数は100点満点中60～75点前後かと思う

一方、ひかりの文翔学園は、時間内なら問題数無制限だ

「あれは、やる気がなかつたし、何度も中学生をやらされていれば勉強なんぞしたくなくなるわ！だが今回は違つだらう？それなら、まつとうに学校にかよつてやろ！」

まあ確かに数百年も生きてきたからな、そこいらへんのよりは頭いいだろう

「エヴァ、総合教科で3000点以上あれば、Aに入れると思つよ」

「そういうルルは……つてお前、頭いいんだつたな」

そう見たいですね、大元のルルーシュさんの頭脳でもうけついだのでしようかねえ

「じゃあ3000点以上でがんばるつか

「そうだな、2人並んで授業を受けたいな／＼」

ええ、妻にしてから、エヴァはちょくちょくデレますね・かわいい・
・・・

第0話「プロローグ」（後書き）

K「さて、いかがでしょう、見切り発車過ぎる今回の作品！ノクターンにあげている小説も更新が滞ってる中…アップしちゃつた

ええ、前回バカ姫という一次作をあげたのですが、修正がつかなくなり、打ち切りとさせていただきまして、修正しようかと試みたのですが、なんか全然別物思いついちゃったから、アップしちやえ！ということで今回のバカテス一次作あげさせてもらつております」

ルル「それで、主人公の名前こんなんでいいのか？」

K「たぶん？それにミドルネームTだし～Tだし～」

ルル「そんなことより、魔法先生ネギまの時の話しさアップしないの？」

K「え？ああ、ね・・・・きつと・・・いつか・・・ね・・・・・」

ルル「いきなりですが、ご覧頂いた方に、お伺いしたいのです！」

K「したいのです！」

ルル「文用学園の点数の設定なのですが、何点～何点が何クラスで～とかいうのですね、あれってどんな感じのかいまいちわかつてなくてデスネ…教えてください～！それと、総合教科って、どの教科が含まれて計算されてるの？っていう疑問ですね…お答えいただ

ければと思います」

質問回答募集

- ? 何点～何点が何クラスで～という主な用意
- ? 総合教科に含まれている教科

第0～5話「マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてない」と…（前書き）

K 「おはよー」

ルル 「おはよー！」

K 「まさかの0～5話www原作開始までいけなかつた・・・」

ルル 「ちよつとびっくりしたわwww

K 「ではでは本編じいさー」

本編開始

第0~5話「マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてない」と…

ひとまず、生活に最低限必要なものと、朝食を求める

エヴァとコンビニへ行き、家に戻ってきた

TVもないし、PCもないし……

エヴァは無言で俺の膝の上にのり、パンを食べている

ん一テストが終わったら、電化製品を買いにいって、あとは衣類か?

この家、寝室にキングサイズのベッドが一つ

リビングにテーブルとソファーが一つ

それ以外のものがなにもないのだ

ん?制服なくないか?

普通用意してくればたりするよね? 神のワシをよ?

『ワシはワシで前じゃないわー。』

はつー電波が飛んできた、やはり電波ジジイだったか

『いや、ワシ田の前にこねじゃん?』

ん・・・俺とH'ガアのまつたつとした朝食の時間を邪魔しききた、
電波である

『まあよこ、もうどうぶん出てこんわい

制服はと数着の下着、衣類等を、今クローゼットの中に入れでき

からの

それだけじゃないー。もうコシないへー！頬まれても、電波呼ばわりする
よつなお主の元こはねおつてこそーー。やこじゅの『

言いたいことだけ言ひて、スッと消えてしまった神

言いたいことだ言い放つていいくとは……まあいい、まあいい、もう
電波を受け取ることも数十年はないだろうよ

エヴァと俺は制服に着替えた……エヴァのかわこかと雄叫びをあげ
たのは、悪くない！

とまあこまではいいんだけど、文月学園つてどじよ?

ああ、スマホのマップかなんかで見ればいいか

なんとかたどり着くことができ、職員室にお邪魔して転入試験の意を伝えると、ちゃんと話しがとおつていたようで、黒光りするとも大きい、カクカクした人型ロボットが対応してくれた

「今、クラス分け試験実施中で空き教室がなくてな、補習室で試験を受けてもらう
こっちだ、入れ」

なんか入るの嫌だね・・・補習室・・・

「そうだ、自己紹介が遅れたな、教育指導担当の西村だ」

「な、なんだと? ルル、人外かと思ったが、ちゃんとした人間のようだぞ!」

わよ、エヴァ、それ口に出してやダメだつて・・・・・

ええと、軽く説教を喰らいました俺も：：

といつことだ、転入試験を受けています

どのぐらいあれば転入試験合格かしらないけど

Aクラス並なら問題ないでしょ

3500～3800程度にしておけばいいかな

テストしていくと思ったのだが、確かに原作で姫路が回復試験を行つて
いた様子があつたはずだが

体弱い女の子っていう設定だよな？

なんであんな速度で回答できるんだ？

「そこまで、2人ともお疲れ様
まあはつきりとはいえないが、これだけの問題用紙を積んだよう
だからな…転入は可能だろう
後日、合否を連絡する」

といふことで無事試験終わりました

エヴァも結構解けてたみたいだし、まあ大丈夫でしょう

「どうした?」
「エヴァ〜」

「どうあえず、家電買いに行つて、後日強いてもいつか」「やうだな……うーんそつちは任せるから、私は調理器具とか買ひにいってくる」

エヴァちゃん料理得意なんですねえ

俺に美味しい料理を食べさせたいとか言って……いや、俺だけに食べてもらいたいと……懸命に料理の勉強してたなあ

「やうが、じゃあこれお金、終わり次第連絡つてことで」

「うん、冷凍庫は、ちゃんとマグロ一匹に入るぐらいのこしてくれ」

ちょっと待て、マグロ一匹入る冷凍庫なんて……一般家庭用が売つてゐるわけがなかろう。解体したあのマグロを保管するための冷凍庫ならともかく

絶対エヴァのことだから、丸々一匹入るものを感じ所望だ……

「エヴァ？ そんなサイズは、業務用ぐらいしかないと思つ……」

「ぬ、そうなのか？ んー……じゃあ出来るだけおおきなの……大きいと高いものがとれないじゃないか！」

「んー…まあ高いものは俺がとねばいいし、『仮にあります』といんじやない?」

「や、そりだよなー。ルルがいるなり何も問題はないつよし、じゃあ大きいのを買つてきてくれ」

とこ「ハレハレ」、おじこれとは、家電量販店へ

おばあちゃんは、『デパートへ…

ああ、ヤバイ、[冗談でもおばあちゃんとなんて言つたらエウガタにフルボツ「やれてしまつた

恋れよつ

氣を取り直して、家電量販店で買い物・・・

冷蔵庫、TV、HDD内臓BDレコーダー、炊飯器…これは、3,
4個買って行ってエヴァが気にいったの使わせるべきだな

えとーあとは、Hアコンはあるからいらないな、ああ、加湿器、空
気清浄機、それからPCを一台買つて〜

え、何?ijiでネット回線の契約もできるの?え?パソコン安くな
るの?おお、そうかそうか

「後日配送の手続きを済ませござ終」。

店から出て、エヴァに連絡を…ドン 「あ、すみません」

人にぶつかってしまいました

「ああん? めえ「キター!」めぐなせこじて許されぬとおもつて
んのか?」

はあ……やべえ、何この昔ながらのからみ方みたいな感じのことを
してくる人www

ちょーうけつ www

じゃなかつた、ちょーうけつ——せこはい、もつこいよね

「すみませんでした。では、急いでるのだとお邊で…」

めんどくさいから下手下手にね

「つたへよお～せつせつせれ、ボケニ…」

と、酷い返答を喰らつたが、まあ案外素直に帰してくれたな
よかつたよかつた

エヴァと会流し、一度荷物を家に置きに歩いて、夜ご飯は外で食べ
ることにした

「ルル、美味しいそつな匂いがする」

何を食べるかと、相談しながらエヴァと町を歩いていると、エヴァ

が突然そんなことをいいだした

「ん……

つーーー！

「のっ、匂いはっ！」

「なあルル、お前そんなわざといらしいアクション取るような奴だ
つたか？」

「コメデイー補正【弱】がかかっているせいだね。気にしないで
くれ」

「そ、そつか……とこひでこの匂いは……」

「俺には感じないという事は、血か？」

町を歩いて血の匂いがするってな・・・飲食店で使われている肉
類の血か？

「・・・・・ルル、たぶん厄介ごどじやないか？」

「ん？」

「あやあつ！」

「悲鳴かな？」

「そつみたいだが？ルル、助けにいくのか？」

「わうだねえ、そつしそうつか」

（美春 Sides）

現在私は、お父さ…じやなかつた豚野郎に追われてゐる最中です
いつものことなので、何故こうなつたかなんて記憶にありませんです

「ミハルミハル・・・・サア、パパトホウヨウラ・・・・

「気持ち悪い！くんな！豚野郎！！」

「ハーハーハルツ！…！」

「私の名前を大声で呼ぶなです豚…きやあつ…」

私としたことが、つまずいてしまいました

なんとか、体制を整え転ばないようにはしたのですが、バランスを取りうとした

時に、手を地面に擦りつてしまつたよつで、小さな擦り傷を作つてしまつました

（美春 SideEND）

悲鳴が聞こえた方へ向かうと、制服を着た少女がおっさんに追いかけられている

シーンだつたわけだ……

「えうつーー？」

その少女を抱きかかえ、裏道を使ひそじでスピードを出して走り抜ける

「ちよ、なんなんですか！豚野郎が美春に触れるなんて！」

なんか文句言われるんだけど……あれ？助けてあげた側だよね？俺…
・・・

いや、まさか追いかけられて襲われるみたいなプレイを楽しんでいたわけじゃないよね？

「あー助けなくてよかつたのか？」

「え？ああ、た、助けてくれたのですか…で、でも、降ろしてください！」

男に触れられているなんて嫌悪感しかありません…！」

「うう言えれば」のこみたこと…・・・ああ、暴走縦ロールの清水美春かつていうことは、やつるのがラ・ペディスの店長であるお父さんか？

「とつあえず、少し距離は離れたかな…」

美春を解放します

「二度と触れんな豚野郎！ともつと文句を言いたいところですが、一応助けてくれたことには感謝 s 「ミハルツー――――――――！」――「したいところですが、逃げなくてはいけないようなので失礼するです」

はあ……そいやつてどれだけの時間にげるのかねえ……その時間を勉強に費やせばまだ有意義な時間だと思うんだけど

「キ、キ、キサマガ、ミハルニテヲダス、オロカモノカ・・・・・口
ロ、口、口、コロス、コロスコロスコロスコロス・・・・・」

「俺敵だと認知された？」

数百メートル離れた位置から全力疾走してくるおっさんが、明らかに俺に対する敵対心を向けてきた

それにしても声でかいな・・・

「そうですね、逃げた方がいいかと思います」

「エヴァ～木刀か竹刀あるー？」

「？」

俺はエヴァに話しかけたのだが、横で美春は何言つてゐるこの人？
つという表情を浮かべている

「木刀でいいか？竹刀だと下手するとあれにはきかないかもしけな
いからな」

ふと俺の横に現れたエヴァに驚いたようで美春は、エヴァを数秒の
間見ていた

木刀をエヴァから受け取り、構える

「ちょっと、何する気ですか？
あんなの相手に出来る人間がいるわけないです！
さっさと逃げるべきです！！！」

美春からの忠告は無視して、美春のお父さんと思われるおっさんに向かつて走る

「京都神鳴流　　斬岩剣ツ！」

斬岩剣　氣を刀に纏わせ斬る技

「プロスプロスプロスッ－！」

木刀と拳がぶつかる

通常であれば、拳の骨が砕け散るところなのだろうが……

受け止められたってことだ…コメディー補正キャラ強すぎ
だろ

拳と木刀のぶつかり合いが生じる

うーん…まさか魔法を使うわけにもいかないし

「ルル！そいつは明らかに対武器戦の戦闘に慣れている！肉弾戦に
切り替えろ！」

ほつ、エヴァちゃんナイス助言

木刀をエヴァの方に投げ、一瞬で手をズボンのポケットに入れる

居合い拳である

居合い拳 手をズボンのポケットに入れて、そこから素早く居合いの要領で拳

を打ち出す技

距離を開きつつ、中距離でも扱える居合い拳を放ち続ける

何発かクリーンヒットしたよつて、暴走化したおっさんは氣を失い倒れた

「まったく、こんなめんどくさいのがいるとは…」

「ホントだな… こんなの普通の奴には倒せないぞ? 殺氣も一般人のそれを超えていたしな」

「さて、エヴァ、そろそろ飯食べに行こうか」

「そうだな」

何か忘れているような…

「あの豚野郎を、豚野郎が倒すなんて…
あなた一体何者ですか？」

あ、美春のことすっかりわすれてた

まさか一般人に木刀とはいえ、斬岩剣を拳で止められるなんて思つてなかつたから熱くなつてたわ…

「ルルーシュ・ランペルージ……まあ覚えなくていいよ
あれの処理は任せると、君の知り合いみたいだし」

「ちょっと、待ちなさい…」

何か言つてゐるが、あのオヤジとはできれば二度と会いたくないの
で、これ以上

関わる事をやめ、やつと逃げるよひその場をさる

第0・5話「マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと…」（後書き）

K 「清水美春との出会い編でもありました」

ルル「人外美春パパはヤバイね…」

K 「とまあ、ぶっちゃけかいてて、主人公の口調が元のルルーシュにあつてないのが気になるところですが…まあしかたないよね。・・？」

ルル「どうにか、読者の方には脳内変換していただいて……」

K 「さて、話は変わりますが、第0話プロローグしかアップしないにもかかわらず、お気に入り3件の登録をいただきまして、ユニークアクセスは既に200と…・・・想定外に伸びていたのでびっくりですね

ありがとうございます。

作者といたしましては…贅沢を言ってしまえばどんな些細なことでもいいので感想なんかいただけたりすると、嬉しかったりします」

ルル「では、この辺で失礼します

ご覧いただきありがとうございました！」

第1話～H・ヴァンジ・H・リン・A・K・ランペルージ（旧姓・マクダウエル）…娃

K 「ちやつちやー」

ルル「はい、こんばんわ」

K 「キリが悪いかったり、話しの転開仕方が悪かつたりするかもし
れませんが、どうぞご覧ください」

本編開始

第1話～HヴァンジHリン・A・K・ランペルージ（旧姓・マクタウェル）…妹

テストを受けて数日後、携帯に合格という連絡が入り

無事転入できることとなつた

通学初日・・・文月学園新年度の初登校日

もつすでにこの世界での生活に慣れ、生活する上で不便はなくなつたことであった

Hヴァンジと共に制服に着替え、文月学園に登校……

学校に近づくにつれ、文月学園の制服をきた生徒が目立つてくる

「なあ、ルル。私達への視線が多くないか？」

いやーそれは仕方ない…エヴァが制服着て歩いてたら、そりや見るわ
小学生と見間違うかも知れない容姿だし

それに美少女だし

金髪で外国人だと一目でわかるし

注目はエヴァに集中……し、してないだと！？

エヴァへの視線も多いが

何故俺への視線が・・・いや、少なからず、殺氣まがいのものや
妬みがまざつた視線を飛ばしてくる者もいるな

「エヴァがカワイイからだと思つよ」

「そ、そうなのか？／／／

いや、でも、私にはルルがいるからどうでもいいな

一瞬戸惑う表情を見せたが、すんなり普段の表情にもどったな…

むしろ、見てくる奴らを睨みつけているような・・・・・

数分後文月学園に無事到着

入口には、黒光りする大きなゴツゴツとした人型ロボットが…じゃなくて、西村先生がどんどん構えて立っていた

「お前達は確か、ランペルージ兄妹だったか?」

名前は覚えてたみたいだけど、勘違いしてるなあ

「違う!ルルと私は配偶者だ、つまり夫と妻だ!
ちゃんと書類に書いてあつただろう?」

「え？ そ、 そうなのか、 それはすまない……」

エヴァちゃん、 兄妹に見られるとな怒るのね……っていつか俺とエヴァ似てないってww

しかも俺なんて黒髪じやん？

「エヴァ、 まあ落ち着いて」

「うふ……」

「ほら、 クラスの振り分け結果だ、 転入試験の成績が振り分け試験代わりとして代用されている」

名前が書かれた、 二つの封筒が差し出された

そのうち一つが俺、 もう一つがエヴァのだ

それを受け取り、 開くと『Aクラス』と表記されていた

チラッとエヴァのほうを覗くといちらも『Aクラス』

無事Aクラスになれたようだ

「よかつたエヴァも俺もAだな」

「当たり前だ、このぐらい楽勝だ」

と堂々と胸を張るエヴァ

うん、カワイイねえ……

「ところで、ルルーシュの方だが、転入して初めから大変かも知れないが、頑張れよ」

「何がですか？」

何を言つてるんだ？

理解してない俺に気づいたのか、西村先生は俺の振り分け結果の書かれた紙を指差す

『Aクラス』

ん?何?これがどうか・・・・

『Aクラス』のちょっと下の方に、小さくこう書かれていた

『次席』

「はあ?ちょっと待てよ・・・・何故だ?」

「今回一年生で総合教科得点が4000点オーバーなのは、お前とAクラス代表だけだ」

4000点オーバーしたつもりないんだけど……まあいいか

「じゃあとりあえず、こんなとこりで長話もあれですから
そろそろ失礼しますね」

「そうだな、まずは職員室に行つて、高橋先生のところへ行つてくれ
お前達は転校生だからな、担任の先生が案内してくれる」

「そうですか」

西村先生の指示の元、職員室を訪ねて高橋先生と会流する

「あなた達が、ランペルージ君とランペルージさんね」

もう一度確認しようつ

俺の名はルルーシュ・T・ランペルージ

エヴァはエヴァンジエリン・A・K・ランペルージ（旧姓・マクダ
ウェル）

実際にややこしい

「自分の事はルルーシュで構いませんよ、呼びにくいでしょ」

「私も名前で構わない」

「そうですか、では、改めてルルーシュ君、エヴァンジエリンさん、
あなた達2年Aクラスを担当します高橋といいます
あとは学年主任も兼任しています

教室まで案内しますので付いてきて下さい」

高橋先生… キリッとした真面目そうなメガネをかけたスレンダーな女性
コンタクトにして、髪形を変えたら普通にモデルやグラドルなんか
できそうだなあって思つ
美人さんである

一つの教室の前まで案内されると、少々待つよつて云えられ、廊下
で待機する
暫くすると入室を許可された

たぶん先に先生自身の自己紹介を終わらせたのであらつ

教室に入ると、驚いた

勉強する場所とは思えない設備

わかつてはいたのだが、実際田にするとあまりにも無駄に設備費がかかっていることが見て取れるほど、環境が整えられており、驚愕してしまったのである

「自己紹介を……」

高橋女史に促がされる

「ルルーシュ・ト・ランペルージ、何故か一応次席らしいが、……この学校のこともよくわからない、皆フォローを頼む
それと、ルルーシュと呼んでくれると助かる」

「エヴァンジエリン・ア・ト・ランペルージ、先に言つておく、ルルとは兄妹ではないから間違えるなよ？私はルルの妻だからな！」

うん、西村先生に間違えられた時から、自己紹介辺りで言つかと思つたけど、やっぱり先に宣言しておくんだね

エヴァの言葉にザワ付くなか、1人のメガネをかけた男子生徒が拳手してから立ち上がる

「久保利光という、質問いいだろうか？」

「はい？」

「日本での入籍は、男性満18歳、女性満16歳以上と定められて
いる

僕達は高校一年生。エヴァンジェリンさんは、満16歳を超
えていりとしても、ルルーシュ君の方は、18になつていなければ
ずなのだが、どういうことだらうか？」

そういれど、だが、日本国内ならの話しだつたらだ

「まあ日本国内で入籍したわけじゃないからね
海外だよ、どこでという明確な場所は秘密にしておくが、例えば
アメリカは州によつて年齢制限が異なるし、スペインでは男女共満
14歳、それに年齢制限がない国もあるらしいし」

「なるほど、そつか説明ありがと」

納得したのかすんなり席に座る

他の生徒達もどうやら納得したようだ

「では、後ろの空いてる席に2人とも座つてください」

高橋先生の指示でエヴァと並んで、空いていた席に座る

「では、皆さん自己紹介を……」

自己紹介長いな……趣味とかさ、好きな物、嫌いな物とか聞いても、覚え切れないだろ普通・・・

改めて俺の番

つて、また自己紹介するの？

「えと、じゃあ改めて、ルルーシュ・T・ランペルージ

とりあえず、そうだな……エヴァに危害を加えたり、嫌悪するような発言をしたら、死ぬと思え……」「

いや、俺がやるわけじやなくて

それから少しして、またエヴァの自己紹介

「なんだ? またするのか?

エヴァンジエリン・A・K・ランペルージ
あーそうだ、一つ忠告しておく。ルルの眠りの邪魔だけはするな
頼むから

え? なんでそんな切実な思いを込めて言つてゐるの? エヴァちゃん...?

1人を除く全員の自己紹介が終わつた

最後の1人は、主席である彼女だ

容姿端麗成績優秀

運動神経もなかなか…といふか下手すると暗殺業とか、拷問による尋問官とかになれるほど

な、大和撫子ということばがぴったりな

黒色ロングストレートのキレイな髪をなびかせる

大人しい少女

霧島翔子である

「…霧島翔子、クラス代表…私だけではできない事もたくさんある、皆その時は協力してくれると助かる」

と一礼

自己紹介が終わり休憩時間

エヴァは、今夜のディナーを何にしようか考えているようだ

さて、俺は…ゲームだな！

N Sでポケンを…

そつと言えればジム戦前でセーブしたんだっけ

と本来持ち込み禁止であるゲーム機を取り出しがれはじめる

「…ルルーシュ・T・ランペルージ…ゲーム機は持つべきやいけ

ないモノ」

この間にかスッと俺の目の前に立つ、霧島さん

いやー凄いね…足音一つないなんて

「ゲームのBGMや効果音はOFFにしているし、ボタンのプッシュ音も立てないように押しているし、今は授業中ではない迷惑かけているならまだしも、特に問題はないと思うが……テストの成績が悪いわけでもないしな」

「…ルールはルール…守らなきゃダメ」

「そうか、なら君が隠し持つていて、スタンガンもよろしくないのではないか

確かに護身用と言えば、霧島グループの『令嬢だし、仕方ないと
言えば仕方ないし

今の世の中何が起こるかわからないからな
でも、出力が護身用にしては大きいものだと思つたのだが、違うかな？」

といふか、スタンガンだけじゃなくて、他にも色々持つてるだろ……

一瞬表情が揺らいだが、少し考えたあと、霧島さんはいつ頃つた

「…わかつた、私が言える立場じやないかも知れない
先生に注意されたら、大人しくやめて」

「わかつたよ」

大人しく引き下がつたねえ

「といひで、霧島さん」

「…なに?」

「眠いんだけど、寝ていいかな?」

「…それは困る、」の後授業ある

「そりゃあ保健室行つて寝てるね
先生には、体調が優れないので保健室に行きましたって伝えといてね」

「…………」

注意したいのだが、エヴァの『ルルの眠りだけは邪魔するな』という言葉で迷っているのか

それとも何か別のことを考えているのか

黙つてこちらを見ている

「ルルーシュ君、代表をあまり困らせちゃダメだよ～」

1人の少女が新たに近づいてきた

「工藤さんか、カワイイ子を見ると、ついからかいたくなっちゃうんだよね」

「あははっ、ボクもそれ少しあわかるかも」

彼女は工藤愛子……保健体育の点数が高い

ボクつ娘である

「ぐはっ…」

おいおい、なんだよ？

すぐそばで、男子生徒の声が聞こえた

いくつかのソファーやテーブルを巻き込んで、吹っ飛ばされた形跡
がある

エヴァちゃん、力加減し…したけどまだ強かったのね

「貴様如きが、ルルを『あんなの』呼ばわりとは…
私のこの程度のストレークをかわすこともできず、防ぐことも出来ないような奴が、ルルを下に見てるんじゃない
それと、貴様、ルルのことを『もやし男』と呼んだが、お前が1万人いようが、ルルの方が強いわ！！一度と私に話しかけるな、下衆が！」

エヴァちゃん…だから忠告しておいたのに

「！」、こんなもやしが俺の一万倍の強さだと?
ふざけるなよー！」

ああ、モブががんばるねえ

つて俺に向かってくるのね

よくわからんが

シユパン!

と顎に軽くアッパーを入れる

一般人にどれだけの力を入れて良いものか:

コメディー補正がかかつても、限界があるかなあ?

どうなんだろうか……

「メモリー補正って強ければ強いほど

ボロボロになつても、次のコマではピンパンしてたつするよね

うーん、どのぐらい力を込めよつか

よし、少しずつ出力をあげていけばいいか

ん?

気が付いたら、男の顔はボロボロ… 口と鼻から血を流していた

考えながら、軽くあしらつてゐつもりが、それでもダメージになつたのね……

「ひやんで・・・せよんひや、ひやひゅひ・・・」

「元とか頬とかはれて、何言つてるかわからないとか・・・ギャグ漫画で見た以来だなあ

「君から向かってきたから、正当防衛だよ？
まあエヴァは先に手を出しちゃったかも知れないけどね

それは許してあげてよ、俺が忠告したのに聞いてなかつた自業自得としてさ」

男子生徒は、数十秒硬直すると、突然教室の外へと走つていった

「エヴァ、つていうか、あれ誰？」

「さあな、このクラスの奴ではないと思つづい、自己紹介の時にいかつたようだしな」

「ありや、いなかつたの。それなり忠告もなにもしらぬいわな

横転したテーブルやソファーベンチにしていく

まったく……いきなりめんどくさいこと……ヒガマがカワイイのはわかるけど

ヒガマの沸点コトによつてはかなり低いんだから、やめてくれよな

……

その後、何事もなく一日終了……

といったかったのだが、FクラスがDクラスに宣戦布告

つまり試験召喚獣クラス間戦争を仕掛けたのである……！

第1話～HヴァンジHリン・A・K・ランペルージ（旧姓・マクタウホール）…娃

K「いやー、やつと原作キャラ出始めたね」

K「といつても、翔子と愛子と高橋女史が少しずつだけだね」

ルル「優子はまだでなかつたね」

K「次回辺り」

ルル「モブキャラを出した意味は？」

K「エヴァちゃんが、ルルを愛している」とをわかつていただくためだ？」

ルル「はあ……俺がゲームをやりだしたのは？」

K「裏設定によるものですね、今回プロフィールのアップは今のところ予定しておりませんが、エヴァがゲーム好きだから、それについて、ルルもゲームにはまっているという設定でして……」

ルル「なるほどね」

K「とこりとで、今回も」覧いただきましてありがとうございます

又、お気に入り件数、PVアクセス、ユニークアクセス共に順調に伸びていること大変嬉しく思います

今後ともよろしくお願ひします

第1・5話／第1話のひよことした裏側～（前書き）

K「「んばんばんわ」

Hヴァ「ん? なんだ?」の空間は?」

K「前書き枠と後書き枠の世界へよひい」

Hヴァ「『むつい』なんでもしなすぐりこなひ、お茶ぐりこだせ」

K「お茶じほして、データ消失すると困るので無理です」

Hヴァ「……まあいい、それで何故私が「んなど」呼ばれたのだ?」

K「作者の気分です」

Hヴァ「ルル……誘拐されかけた……助けて……」

K「いやいやいやいや……そんな」とつてしませんてーとにかくカンペ通り本編にふつてくだせこ……」

Hヴァ「ふんつー仕方ない……本編ビーフン」

第1・5話／第1話のちよつとした裏側

～エヴァ Side～

文月学園の転入初日、ルルと共に登校したのだが

テストを受けたとき対応した、一見人外と思える男が学校の入口に立っていた

その男は、腹立たしいことにルルと私のことを兄妹だと間違えた

見た目が違うだろう？見た目が！

バカか、この男は…

教師がこれほどなら、生徒も間違える奴もいるかもしねないな

ルルの後について職員室に行き、担任だといつ高橋女史に連れられ
教室へ向かった

教室の設備の感想は……なんだこの無駄な設備投資は！

とこつ一言に限るな

だがしかし、これほどの設備だからこそ、勉学に励みAクラスに入
りうとする奴もいるのだろう

自己紹介で、ルルとは結婚していることをしつかりと伝えたし、問題はないだらう

何故か無駄に一回田の自己紹介では、ルルに関する忠告をしたし

これで静かに暮らせそうだ

休憩時間、夜ご飯のメニューを考えていたら何人かの男子が、声をかけてきた

適当に会話しつつ、メニューに悩む

適当にあしらわれて いるのにわかつたのか、少し会話して満足したのか

1人を除いて立ち去つていつた

「つていうか、あんなのどこがいいわけ？」

もやし男じやんｗｗ

君みたいな、か弱い子あんなのじゃ守れないでしょ？
あれとは別れてさ、他の人と付き合へば？俺とかさ？」

最後までしつこく残つていた男は、そう軽く言つたのだ

だがそれは、ルルへの侮辱だ…それに私が、か弱いだと？貴様のような男より遙かに強いわ！！

咄嗟に拳を突き出した

もちろん、ルルから充分力の加減については聞いていたし抑えたの
だが

抑え方が足りなかつたらしい、反応もできず男に拳が当たり

軽くふうとんでしまつた

まあいい、こじれどきつて言つておけば、バカなことは言わなくなる
だろう

「貴様如きが、ルルを『あんなの』呼ばわりとは……

私のこの程度のストレートをかわすことができず、防ぐことも出来ないような奴が、ルルを下に見てるんじゃない

それと、貴様、ルルのことを『もやし男』と呼んだが、お前が1万人いようが、ルルの方が強いわ！――一度と私に話しかけるな、下衆が！」

そう言い放つと、男は明らかにルルに敵意を向けた

そして、そのままルルに殴りかかっていく

案の定、男はボコボコにされた

ルルは軽くあしらつていたつもりだろうが…

結構ダメージになってるからな……かわいそうに

数日ダメージが体内に蓄積されているだらう

でかいの一発で済めば、意外と表面上のダメージだけだったかもしないのになあ

♪エヴァ Side END♪

第1・5話／第1話のひょっとした裏側～（後書き）

エヴァ「短かつたな」

K「ええ、それに第1話のちよつとしたエヴァ視点だったのとで1・5話にしたんです」

エヴァ「まあいい、それで私はもう帰つていいのだな？」

K「最後にそのカンペを読んでいただけでから、帰つてくださいね
エヴァ「えーと…」ご覧頂いた方ありがとうございました。第2話は
本日月曜日にアップ致します！」

第2話～夜の飯のメニューに悩む少女～（前書き）

K「1・5話のアップから以外に早く2話の区切りつけたわ」

ルル「いや、その前に挨拶しろよ」

K「あ、こんばんは」

ルル「こんばんは」

K「8割型2話がかけてた状態で1・5話あげたから、早く2話用
あげれたよ」

ルル「よかつたねえ」

K「うん、いいところで区切りつけられたからね」

ルル「では、本編どうぞ」

第2話～夜の飯のメニューに悩む少女～

新年度初日から、試験戦争の戦線布告が、FクラスからDクラスになされた

下位クラスからの戦線布告は、拒否できない決まりがあるらしい

学園側もこれを許可

他のクラスは自習となつた

試験召喚戦争か……

Dクラスが今日落とされ

明日明後日でBクラスがFクラスの手によつて落とされる

明後日には、Fクラスの余計な策のせいで、Cクラスとの試合戦争があるんだつたか？

「…ルルーシュ・T・ランペルージ、ちょっとといい？」

霧島さんが話しかけてくるのだが…

フルネームを一々呼ばれている気がする…ファーストネームで呼ぶのは失礼だと思っていて、尚且つファミリーネームで呼ぶとエヴァともかぶるから、フルネームなのだろうか…？

「フルネームじゃなくて、ルルーシュでいいよ」

「…そう、じゃあルルーシュ」

「はい、なんでしょうか、霧島さん？」

「…Fクラスとロクラスの試召戦争について…私達Aクラスはどうしたらいい？」

「…どうしたらいいって…？」

「んー、確かに原作でもFクラスとの対談の時、対応してたのは木下優子だったな

戦略立てたり、駆け引きしたりとか苦手なのか？」

「何故、俺にそんなことを聞くの？」

「…次席だから、相談しやすいかなって……」

なるほどね……

「…一応、優子とも相談したんだけど、男子の意見も聞きたい」

「優子？」

「私よ、ルルーシュ君」

木下優子…Fクラスにそつくりな弟を持つ、美少女である

成績はいわずもがな優秀

だが、B～L趣味を持ち、家ではかなりズボラで、学校ではネコかぶりな少女

「木下さんか…まあどう考へても、Dクラスを攻めた以上、上まで狙つてくると思つよ」

「なんでそういうきれるのよ？それよりもまず、FクラスがDクラスに勝てるわけないじゃない」

「単に設備向上のみを狙うなら、Eクラスでしょ

今の召喚獣に適応される点数は振り分け試験のもの、順当に考えて、初日に二つ上のDクラスに仕掛けるなんて、点数差でどうがんばっても負ける

聞いた話しによると、単教科高得点者で450～500点代：点差で考へるなら5人で囲めば充分倒せると思つし、そんな逸材Fクラスにそこまで転がつてるとも思えない

操作性が高い人がいても、点数低ければ、こちらもうまく対処すれば問題なし

ほら、Dクラスに攻め入る手札が足りないでしょ…」

「そうね、普通に考えて成績もあがるようなこともない、初日からFクラスがDクラスに攻めるなんてありえないわね。何故Dクラスに攻めて、何故ルルーシュ君は今まで狙つてくるなんていいきれるの？」

その説明で、FクラスがDクラスに勝てると思えないんだけど……」

「Dクラスに攻めた理由、単純明快だよ……圧倒的な点数を持つダーキホースがいるか、Fクラスの代表は、それなりに頭がきれる策士か、Dクラスの代表が策士として底レベルすぎると判断できる為かそこら辺かな？俺は、去年からいるわけじゃないから、他の生徒の事は詳しくないけど、去年上位にいたのに今年は見ない子とかいなかな？」

普通に考えて、一年の時次席クラスの成績を持つ姫路の存在がいいなことぐらい、Aクラスの連中ならわかるだろ

「……姫路瑞希」

「ああー…そりいえば、見てないわね……」

「心当たりがあるのかな？」

「ええ、学年次席もしくわ三位程度の成績を持つ、姫路さんっていう子がいるのだけど、彼女なんていうのかしら、か弱いといふか病弱といふか、すぐ体調を崩してしまつらじいの」

「本当に、Fにいるかは別として、難なく倒していくんじゃないか

な？それと何故Fクラスが上、つまりAクラスまで来るか…

調子に乗つて、Aクラスまで倒せるんじゃないかと言つ考えにいたる人間、いるんじゃないかな？Dクラスを倒した時点で、二つも上のクラスを倒せたという自信に繋がり、士気のアップにも繋がるそして、この文月学園のシステム上、単教科高得点者が何名かいる可能性はあるし、ダークホースの存在の可能性もある

それに観察処分者という者もいると聞く、そこへ策士がいるのであれば、Aまで来るよ…戦争は純粋な力（点数）だけじゃないからね

「観察処分者という言葉がでたのがびっくりだけど、それは何故？」

Aクラスって、勉強できても全然頭はきれない連中なのかな…？

「観察処分者、ファイードバック…つまり、召喚獣との感覚リンク率が高い仕様がついている

召喚獣がダメージを受ければ、本体つまり肉体がダメージを受ける

それなら、ダメージを受けないようこ、操作性をあげるしかないだろう？

教師の雑用もされていると聞く、練習は充分施されてるんじゃないかな？」

「「「なるほど…」」」「…なるほど」

『気づいたら、久保君と藤さんも一緒に話を聞いていたよつだ

「それじゃあ、Dクラス戦終了後、Eクラスが攻めてくるところの
かい？」

「いや、Eクラスじゃあどうがんばっても、Aクラスには勝てない
よ……」

久保君…君はいきなり参加してきて、いきなり質問を飛ばすのかい？
まあいいか……

「「「え？」」「「…？」」

「霧島さん」

「…なに？」

「君にとつての弱点や、それにならうこととかあるんじゃない
かな？」

それをEクラスの代表か、親しい者が知っている…それなら落と
せる可能性があると踏むんじゃないかな？」

「……。」

何かを考えているのか、霧島さんは無言である

助け舟を出すかのよつて、上藤さんが声をあげる

「でもでも、弱点を知っているからなんなの？」

「一騎打ちに持ち込んだらどうする？」

「それで、代表の弱点をつぶしていくの？」

「やうだね」

「そんなの飲まなければいいじゃない？」

確かに、口のままなら飲まなくてもいいんだが

「そのために飲ませるよつて布石を打つ……」

「「「布石？」」」

「例えばだ……戦争でもしFクラスに負けて、設備入れ替えとなつた……だが『設備は入れ替えなくていい、そのかわりにちょっととしたお願いを聞いてくれないか？』そう言われたら、どうする？』

「お願いにもよるけど……たぶん受けるわね」

「それで『Aクラスに試合戦争の意思があると思わせてほしい』も

しくは、『合図を出したらAクラスに宣戦布告し、試召戦争を仕掛け欲しい』そういうわれたら?」

「負けても、設備はワンランクダウンになるのね…それなら受けるとこだけど、Fクラスに負けているのなら、3ヶ月は宣戦布告できないはずよ?」

「表向きには、和平交渉による終戦ならば、問題ないんじやないかな?設備入れ替えはしないわけだし」

「それで?」

「例えば、Dクラスと…そうだなCクラスかBクラスかなその2クラスと、そう言った取引を行う…そして、Aクラスとの交渉対談にて、それをちらつかせ、一騎打ちに持ち込もうとする

それならどうする?Aクラス、決して文武両道のような人選が揃っているわけでもない、体力的問題もある…

他のクラスとの連戦後、Fクラスに攻め込まれたら?確実に勝てる保証は?」

「なるほどね…理解できたわ

「…説明ありがとつ、ルルーシュ」

まったく、長々と無駄な話しそう……。いつもの事適当に流しておけばよかつたか？

数時間後、Fクラス対Dクラスの試召戦争は、Fクラスに姫路さんが居て、Fクラスが勝利したものの、和平交渉にて終戦という話しが流れ始めた

「……ルルーシュの言つたとおりになつた」

ツ・・・・！

ホント、気配もなく、足音もなく急に出てくるのやめてほしいわ……。

俺でもびっくりするわ

「セリだね」

「…それで、エクラスせじうしたひこと黙り?」

「んー、H♪ア せじうしたらいこと黙り?」

隣の席に座るエヴァに話しかける

先ほどはまつたく話にしつこひになかったので、声をかけてみた

「そんなことはせじうでもいいんだ

「今夜のメニューが決まらないんだが、ルルはハンバーグとトンカツどっちがいい?」

「どひどもいいのねww

「まだ夜!」飯のメニューに悩んでたんかい!」

「セリだなー、トンカツかなあートンカツ、キャベツ、味噌汁、ご飯!—これでいいでしょー」

「ん…そうか、わかつた

「……」

ジーッと無言で俺とエヴァの方を見ながら会話を聞いている霧島さんである

「ああ、ごめんごめん
そうだね、別に何かしたいなら案はあるけど、別に何もしなくて
もFクラスに負ける事はないよ? 現状ではFクラスに出来る事は限
界があるからね

それにFクラスに負けた後の、少なからず弱体化したクラスに攻
め入られるとしても、大した問題はないよ…まあフォローできると
きはあるから、ドンと構えてればいいよ」

「…わかった」

その日は、その後何事もなく終える事ができただ

じいて言つながら、エヴァの作ったトンカツが最高だったことぐらい
だろうか

サクサクうま〜ですね

翌日

午前中は穏やかに過いゝことができたのだが

午後からFクラスがBクラスに試召戦争をしかけるといつ…

「ルル、また今日も自習なのか？」

「FクラスがBクラスに試召戦争しかけたんだって」

「そうなのか、夜ご飯のメニューだが…今日は、蕎麦とうどんで迷つていいんだけど、どっちがいい？」

また夜ご飯のメニューかわ

「やうだなあ……天ざる蕎麦が俺は一番好きだよ」

「せうかーじゃ あそれにしょいっ」

うちのエヴァ、朝から夜ご飯のメニューばかり考へていろんだけど
何故? わわ

一番時間に余裕あつて、凝つたものが作れるからか?

さて、Fクラス対Bクラス戦は翌日に持ち越しとなつた

Bクラス代表の小物君じやなかつた、根元君は卑怯やイカサマは手段のひとつという小悪党の鏡!

何かやらかしてくるようだが…

干渉はやめておひつか

その日はエヴァが張り切って、蕎麦を打つとこからはじめたせいで、夜ご飯の食べる時間が遅くなつた程度しか特筆するようなことはないな

そうだな・・・他にあげるとするならば

俺はキスの天ぷらが好きだ！

キスつていう白身のお魚ね

天ぷらになると美味しいんだなあ～これが

ああ、こんな会話をエヴァとしたが

「それで、ルル…試合戦争だつたか?どうするんだ?何かやるのか?
?」

「そうだねえ…Aクラス…Bクラス…Cクラス…Fクラス…どうし
たものかね」

「まあ私もあの設備から低くなるのは嫌だからな……」

「もうか……まあなるよ!になるや」

「そりだな……」

朝日が昇れば、騒がしい一日間が始まるであろう・・・

Cクラス戦…Fクラス戦…

第2話～夜11：飯のメニューに悩む少女～（後書き）

PVアクセス約3500 ニークアクセス約750 お気に入り
10件突破！

K「ありがとうございます！どんどん、お気に入り登録してやつて
ください！」

評価や感想もお待ちしております」

ルル「ありがとうございます」

K「ホントホント…欲を言つなら…・・・ランギングに乗りたいつ
て思つたり」

ルル「ランギングね、一気に見てくれる人増えそうだもんね」

K「うんうん…ということで、どんどん見て、どんどん評価して、
どんどん感想ください！お待ちしております！」

末筆で申し訳在りませんが、ご覧いただきありがとうございました
次回も早めにアップしたいと思います

第3話「一はーなんですよ、わづ紅茶……」（前書き）

K 「いんばんばん」

Hヴァ「いんばん……って何故また私がここに呼ばれた？」

K 「今回出番はないから」

Hヴァ「なんだと？」

K 「こらまれても…ふえないのー今回はルル、優子、友香回なのー」

Hヴァ「や、そつか…まあルルが活躍していぬなり…いいか…
・・・」

K 「とこいつは本論だつた」

第3話～「一はーなんですよ、わづ紅茶……」～

Fクラス対Bクラスの試合戦争一日目

教室につくと真っ先に、霧島さんの元へ向かつ

「おはよう」

「…おはよう」

霧島さん今日も綺麗だねえ

ってそんなことを思つてる時、じゃないな…

「ちょっと木下さん借りて、irkurasuに行つても良いかな?」

「……エーハート私に聞くの？」

「試合戦争の火種になる可能性があるから、一応ね」

「…………気をつけて」

いつもより長い沈黙の後霧島さんは承諾してくれた

「ルル、私もついていくか？」

「いや、まつたり座つていいよ」

「やうが」

エヴァは俺の言葉に頷き、自分の席に座る

俺はそのまま木下さんの元へ

「おはよう木下さん」

「おはよー、ルルーシュ君
どうしたの？ わざわざ挨拶して近づいてくるなんて？」

少し驚いた表情をしている

「ちょっと俺につきあつてくれないかな？」

「え？ Hヴァンジエリンさんも教室にいるのよー？ 向うでいるのよ
？ / / /」

いや、お前が何を考えてるんだ ウウ

「Fクラスとの試合戦争に関わることだよ」

「え？ ああ、そう。わかったわ」

木下さんを連れて、Cクラスに向かう

確か朝だつたよな、Fクラスの秀吉女装作戦は……

Cクラス前まで来たが、今のところ気配は近くにないな

「ンン」と軽くドアをノックして扉を開ける

「すみません」

「はい？」

1人の女生徒が反応し、こちらを向く

「Aクラスのルルーシュ・T・ランペルージといいます。Cクラスの代表さんに話しがあって来たのですが……」

「代表は私よ？」

対応してくれた人が代表だそ�だ

「Cクラス代表の小山よ、それでAクラスの人がなんの用？」

「ただの『』挨拶です、Aクラスの次席になつたのですが、今年転入してきまして…一応顔ぐらい知つておいた方がよいかと思いまして、こちらのクラスメイトである木下優子さんに案内していただいたのです」

「ああ、そう。」

「Aクラスの木下優子よ、よろしく。」

「ええ、小山友香よ、よろしく。」

ふむ、とりあえず何事もなく挨拶ができたね

「いやあ、うちの代表はキレイですが、小山さんはカワイイですね
…」

「そりゃお世辞ならいらないわよ」

「ああ、普通に可愛いと思いますよ、嫌いな人には嫌いって言つち

やうタイプなんで、お世辞とか言えないですね……例えば、Bクラス代表のド3流策士の小物とか……」

「あら、そのド3流策士の小物が、一応私の彼なのだけれど？」

小玉ちゃんがそう言った瞬間横にいる木下ちゃんの表情が、こわばる…

「そうでしたか…知らずとはいえ、彼女さんに彼氏さんを蔑む言い方をしてしまいましたね…すみません。まあ本人が居ても直接言つてしまふでしょうから、大して意味はなさない謝罪ですけど、自分も大切な人を悪く言う奴がいたら怒つていいんじゅうからね……喧嘩をしにきたわけじゃないので、怒つていらっしゃるなら、どうかそれを収めて欲しいのですが…」

「ま、まあ、別にいいわよ……あなた次席つていったわよね？」

よかつた…案外彼氏の事に関しては、カツと怒るよつな人じやないのかな？

「ええ。たまたま、『間違えているだろ? けー』と思つた問題達が当たつてたようで…本来ならAクラス上位程度で收まるはずだつたんですけどね。それに姫路さんが、実力通りAクラスに居れば、次席なんて場所に納まつてしませんよ・・・ふふつ」

「たまたまでも凄いわね…」

「やつだ、小山さん…演技って興味ありますか?」

「演技?ええ、そうね…んー自分がやるのは得意ではないわよ…見てるほうが好きね

映画でもドラマでも舞台でも」

「見るのはお好きですか、ビリですか?今度是非、彼氏さんに内緒で舞台か映画でも…」

「嫌よ…なんで初対面のあなたとそんな約束しなきゃいけないのよ…」

「あはははは、ですよねー…ああ、そういえば、木下さんの弟さんって演劇部で優秀だとか?」

「え?ええ、そつみたいよ。なんか声真似?ができるみたいだし」

「へえ…声真似でもす」こ人は声帯模写といってカンペキに声を似せることができるらしいですね…」

「それは凄いわね…そんな弟君は、何クラスなの?」

「あ…演劇バカだからTクラスだったと思つわよ…」

「やつ…」

「弟君つて木下さんにそつくりなんでしたつけ?」

「ええ、そうね…」

「それなら、女性用の制服着て声真似なんかしたら、喋っていても気づかないかな……木下さん、ホントにお姉さんの方ですか！？」

「え？ 当たり前でしょー…？」

若干、木下さんの怒りのボルテージがあがつたようだ

「や、そんなこと言ひて、出会ひて間もない自分なら、からかえると思つて入れ替わつているんじや！？」

「違うわよー！」

「じゃあ… うですね… 小山さん、木下さんがホントに弟さんの女装姿でないか、確認してもらえません？ からかわれるのとか嫌なんですよ… まさかホントにお姉さんのほうだったら自分が確認するわけにいかないですし…」

「え？ はあ… 私はいいけど」

「ルルーシュ君、一体さつきからなんなのよ… まつたく… まあい
いわ

小山さんちゅうと…」

木下さんは小山さんを隅へ連れて行き、制服の胸元を少し開いて、

胸がある」とを確認させたようだ

「ちやんと女性だったわよ…まつたく」

「私はちやんとしたAクラスの木下優子よ…まつたく」

女子2人から『まつたく』と呆れ顔で見られてしまった

「あはははっ・・・・いやーだつて木下さんとは今日で会ひの三回目ですし、弟君の方は会つたことないですし……そんなに似てるなら、見分けつけられないですよ……
やうだー合言葉決めましょう!やしたら、わかるでしょう?~」

「はあ…やうね…もうなんでもいいわ」

「ねえ、木下さん、」のルルーシュ君ってこんな自由な子なの?」

「え?んー結構自由かもしれないわね」

え? そう思われてたの??

「じゃあ、そうですね、小山さんにも特別に自分の//デルネームのTがどうこの言葉のTか教えますねそれを知っているのせ、ほんの一握りの人間しかいませんから、合言葉になりますから」

「ええ、それでいいわよ」

「やうね…確かにTの意味が気になつていたけど…」

木トやさむ//デルネームのTの意味を気になつてくれていたようだ
「紅茶の英語表記のTeaのTですよ～飲み物の中で紅茶が好きで
して～」

「え？そんな理由でやの//デルネームなの…？」

「ところが、//デルネームもフル表記しても、発音はティーのま
まなんだ…クスクスシ」

上が木トやさ、下が小山さんのコアクションである

「はい～あ、結構長こひやこましたね、そろそろ失礼しましょ～。
木トやん」

「やつね。」

「では、小山ちゃんとお話ししましょ。」

「ええ。くだらない話しあつたばぢ、たまにはいいわよ。」

俺は、立ち去る前に、小山ちゃんにさりげない声をかける

「もし、木下さんと思われる人が今日中にきたら、相手の話に乗つたふりをしてください。そして、Aクラスの自分のところへ報告にきてください…できれば構いません
お願いします。」

それだけ言い残して、その場をたる

俺と木下さんは、小山さんと接触することができたし

弟の話もした

そして、念のための確認するための合言葉も伝えた

もし最後の言葉どおりに動いてくれなくとも、女装した秀吉がきて確認をとれば、Aにはせめてこないだろ？

Aクラスに戻り、霧島さんに、あとはFとの出方次第とだけ伝え
席に戻る

「ルル、大丈夫だったか？」

「転ぶ方向は一択、Cクラス代表が、Fクラスに怒りを覚えるか…
Cクラス代表がこちらに敵意がない状態でここにくるか…まあこち

「うに敵意を持ってきた場合は、ああ残念つていうだけだらう」

暫くすると、Cクラス代表の小山さんが数名をつれて、Aクラスに乗り込んできた

「Cクラス代表の小山よー木下優子を今すぐ呼びなさい……」

怒鳴ってるねえ……

Aクラス内が騒然となるなか、木下さんとそれに続くよひ霧島さんが向かう

「何かしら？」

「さつまはよくも散々な事を言つてくれたわね！……と聞こたいといひだけど、ルルーシュ君も呼んでくれるかしら？」

「ほつ……乗せられているふりをして、ここまで来たか

「さつまがふりですね、小山さん」

「ええ、あなたが最後に残していくた言葉の意味、それからやけに意図的に何かを伝えようとしていた会話から、あのクズクラスの奴が来ても気づくことができたわ

まあ、一応言われた通り、乗せられたふりはしたけど……？」

「え？ なんなの？」

「一応確認なのだけどあなた、木下優子さんでいいのよね？」

「え？ ええ。」

「セリ、あなた紅茶はお好き?」

小山さんの質問に朝のやつ取りが一瞬あたまをよざつたのか、ほんの少し間が空いてから木下さんは答えた

「わづね、Teaはよく飲むわよ」

数秒小山さんと木下さんの顔が会つ

「本物ね…さつきEクラスのあなたの弟が、あなたのふりをしてEクラスに乗り込んできて、散々罵倒して行つてくれたわよ」

「なつー…せうだつたの? 懲弟がひどい事を言つてごめんなさい…」

「いいえ、別にいいのよ

ルルーシュ君の働きがなければ、Aクラスの木下さんに言われたと勘違いして、何も考えずにAクラスに試召戦争をしかけることになりそうだったから…」

「え? もしかして、今朝ルルーシュ君とEクラスに行つたのってまさか……?」

小山さんと木下さんの視線がこちらに移り、それと同時に周囲の視線も移る

す」一く注目浴びてゐるんですけど…

「初めから小山さんがCクラス代表なのは知っていたし、わざわざ木下さんを連れて行って、脈絡もない自由な話をしたのは、これの為だよ…まあ小山さんがうまく俺の言つたとおりにしてくれたからこそ、穩便に話しへ進められるんだけどね」

「それで、この通り乗せられたフリして、ここまで来たけど、どうしたらいいのかしら?」

「霧島さん、試合戦争に関わるコトです
代表としてあなたも挨拶してください」

「…Aクラス代表霧島翔子」

「あなたが…私はCクラス代表の小山友香よ」

ひとまず、対談の場を儲け席につく

「さて、先に俺の目的から話しましょっか…

簡単ですよ、Fクラス代表の思い通りに学年全体が引っ搔き回されるのが気に喰わないだけです。だからこちちらに飛んでくる火種を、意図的に潰したかったにすぎません。

本来であれば、たぶん今頃Aクラス対Cクラスの試召戦争で互いのクラスが準備を行つている頃でしょうから

「それで、Cクラスに何を求めるの？」

「単純明快、Fクラスの迷惑に乗つたと見せかけて、Aクラスに戦線布告していただきます」

「え？」「…？」

話を聞いていたAクラス連中がザワつく

「そして、Aクラスの召喚獣の操作スキルをあげる為の練習台になつていただきたい」

「練習台？」

「ええ、そして、最終的にはCクラスの負けという形で終わっていただきます」

「ちょっと待ちなさいよ、それじゃあCクラスの設備が下がつてしまっただけじゃない？」

「和平交渉で終わらせるんですよ、Cクラスの設備を下げたところ
でメリットはない

だが、しかし、勝敗が決まりそうにないから和平交渉にしたんだ
ろう？と思われて、Aクラスに攻めるバカ連中が増えても困ります
なので、一度最終的に小山さんには討ち取られただき、和平
交渉でその他リスクは失くすと……」

「口約束で、そんなこと受け入れられないわ」

「そうですね、では仕方ない、帰つていただいても構いませんよ

「な……どうゆうひ」とよー？

「いえ、だから、何事もなく教室へおかれりいただいて結構です
あくまで今回Cクラスとの接触は、戦争回避か友好関係を築いた
上での召喚獣の練習相手、どちらかになれば問題はないのですから…
小山さん自身、冷静に考えれば、今的新学年始まつたばかりでの
試召戦争でAクラスに勝てる手段がないことぐらい、理解できる
はずです

友好関係が築けなくとも、無駄に宣戦布告するなんて愚の骨頂な
まねしないでじょーから

「確かにそうね……わかったわ、あなたを信じましょー

実際事前に種をまいて置いてくれたおかげで、無駄に戦争を起こ
して設備を下げる結果に至つてないのだから

「はい、ではそれでいきましょう…ただCクラスにメリットがないですね」

「いえ、事前に情報を『えてくれたおかげで、』『ちらが散々な目にあつてない』ことでも充分だわ…それにFクラスの手のひらで踊らされるような真似には、なつてないわけだし
Cクラスの皆にはつたえておくわ、それに私達としても召喚獣の操作性をあげるために実戦は必要だもの」

「そう、じゃあそれでいいかな? 霧島さん?」

「…私は構わない」

「じゃあ交渉成立ね、ではCクラスはAクラスに試合戦争の宣戦布告をするわ」

交渉成立かに思えたとき、Aクラスの生徒から声があがる

「ちょっと待てよ、何故わざわざ試合戦争をする必要があるんだ?」

明らかに不満を意する、口調であった

「あーそうだな、Aクラスの人の中には、こう思っている人もいるのではないか?』『点数高いから大丈夫』『俺達はAクラスだぜ?』『どのクラスに攻められても点数高いから負けるわけがない』
『甘いよ、布石を積み、策があり、操作性が高ければ、点数が低く

ても

Aクラスは討ち取れる

いいか、テストの問題の正解は一択とは限らない……それと同じで、試験戦争も点数一択で勝ち取れるとは限らないんだよ頭がいいと自負するなら、そのぐらいわかつてくれ
その点数の自信だけでは、足元をすくわれるぞ」

そう俺は言い放ち、Aクラス連中を見渡す

「何かいいたいことがある奴はいなさそうだな……
では、改めて、小山さん……」

「ええ、CクラスはAクラスに宣戦布告します

「…わかった」

こうして、Aクラス対Cクラスの試験戦争の舞台が整つたのである

第3話「トトロはトトロなんですよ、そう紅茶……」（後書き）

K「はい、とにかくがでしたでしょうか、第3話
『都合主義全開の交渉回となりました』

H「うー何故私を、交渉の席に呼ばないんだ！」

K「いや、Hヴァって、交渉」と下帯に出るよつたキャラじやな
いじやん」

E「いや…そのぐらご設定を変えろー変えるんだ…」

K「そのメタ発言はヤバイと想ひよ…」

E「まあ仕方ない、もつと私の出番を増やせ！いいか、ルルと
私の絡みをもつとだ…！」

K「機会があればね…とまあHヴァの相手はこのへんで終わらにして…」

PVアクセス5600突破 ユニークアクセス1000突破 お気
に入り件数13件 文章・ストーリー評価0件 感想等0件

ありがとうございます！

評価と感想がないのは痛いのですが…

まあ評価は始まつたばかりでつけられないとか、…わかるのですが

感想が一切こないのは何故なんだああああああああああああああ！？！？！？！？

といつ疑問を抱いております

よかつたら、感想等お待ちしております！

ご覧頂きありがとうございます！

第3・5話へとある少年は観察処分者へ（前書き）

K「こんばんわん」

ルル「こんば…って今回俺出てないのに呼んだの？」

K「はい…他に呼ぶ人いなかつた」

ルル「ぼっちなんですね作者さん〜〜」

K「ええ、ぼっちですとも〜〜」

ルル「胸をはつて言ひついとじやないから〜〜」

本編ひづれ

第3・5話へとある少年は観察処分者へ

とある少年は、振り分け試験の時に

熱で倒れてしまつた、姫路瑞希とこうパンク髪のきょあくさくさく
巨乳少女を、保健室に連れて行くために

途中退室してしまつ

じこ文円学園は、いかなる理由があつとも

試験での途中退室は、〇点扱いになる

そつ彼は〇点になつてしまつたのである

勿論、熱を出して保健室に行つた少女も同じく

少女は学年で次席クラスの高点数を叩きだせるほど頭がいい

だが、文月学園は、本番で出せない力は認められない

とても残念であるが、これもまた仕方がないこと

少年はそんなルールに激しく対抗した

だが、一生徒にそのルールを覆すことが出来る

策も、力も、閃きも

なかつたのである

少年は、試験を受けようが受けまいが、最下位クラスへ入るのは必然だったであろう

ランダムで回答し、たまたま当たりが多ければ

最下位よりワソシラシク上のクラスに行けるであらう程度

彼が試験を放り出し、倒れた少女を、保健室に連れて行くこと

彼の性格的に必然で起きたコトである

新年度、少年は

見慣れた顔が並ぶ教室へと踏み込んだ

- 一部腐っていると思われる畳
- ヒビが入った壁
- 一部が割れた窓ガラス
- 簡単に壊れてしまうような卓袱台
- 綿が消失しただけの布同然になつた座布団
- 最下位クラスとはとてもひどい環境であつた
- だが、文翔学園でのルールでは仕方がないこと
- その最下位クラス、つまりFクラス代表はゴリラではなく
長身でそこそこ体格も大きい

そして赤髪のツンツンヘアー

過去に神童と呼ばれ、中学時代は不良達の間で有名であつたらしい

坂本雄二

一年生の時からの知り合いだった

他には、カメラを片手に持つムツツリーーと呼ばれる

土屋康太

彼は保健体育の点数が、教師レベルであると評価されているが、他の教科は・・・

Fクラスにいるのだから、壊滅的だと判断するのは簡単である

ポニー・テールが特徴で、スレンダーな美少女

島田美波

ドイツからの帰国子女で日本にきてまだ一年ほど…

そのため漢字の読み書きが苦手である

上記の理由から、問題文を読み取ることができます

試験での点数は伸びていない

計算するだけの問題がある、数学はBクラス程度の成績を収めている

一見クラスを見渡すと、もう一人美少女がいるように見えるが

生物学上しつかりと男性とされている

木下秀吉

Aクラスに木下優子という女生徒がいるが、彼女の双子の弟がこの秀吉である

演劇一筋の演劇バカで、勉強の方は壊滅的

そしてそんな中現れたのは、姫路瑞希

文月学園のルールに乗っ取り、本来Aクラスにいるであろう彼女は

Fクラス入りを果たしてしまった

さて、この少年…彼女の姿を見て思つ

『姫路さんみたいな、体の弱い女の子が勉強するよつたな環境じゃない』

その少年は、坂本雄一に相談する

「雄一、試合戦争をやつてみない？」

相談を受けた坂本雄一は答える

「俺もそう思つていたところだ」

坂本雄一にまく乗せられた、Fクラスの生徒達は

まずDクラスに宣戦布告し、勝利を収める

そして、次のターゲットはBクラスに

Bクラス代表、根元恭司

彼は目的のために手段を選ばない男であり

Fクラス戦でもやつであった

Fクラスとの交渉の席を設ける間に、Fクラスの教室を荒らした

Fクラスは、根元の策にひつかかり、教室荒らしを許してしまった

その後、CクラスがFクラスを狙っていると思われる情報により

根元の策にひつかかってしまう

翌日：Cクラスの存在を危険視した、坂本雄一はAクラスの木下優子にそつくりな、木下秀吉を使い

Cクラスの矛先を、Aクラスに向ける打開策を打つ

既に、Aクラスの手が回った後とも知らずに

秀吉に優子の演技をさせ、Cクラスに乗り込ませる

「豚臭いわ！話しかけないでちょうどいい」

あまりに酷い罵倒である

ただ一つ、Cクラス代表が発した意味不明な一言が、少しばかり気になつた坂本雄一…

「木下優子！紅茶の美味しいとも知らないような味覚馬鹿には、一度とそんなこと言わせないよ！にしてあげるわーー！」

ただ単に相手を怒らせたから言つた言葉だらうが・・・

まあ気にするようなことでもないかと、坂本は作戦が成功したと捉え、対Bクラス戦へ思考を向ける

Bクラス戦一日目がついに始まった

Fクラスのやある少年は、姫路の動きがおかしいことに気づく

その視線の先には、ニヤニヤと笑みを浮かべながら、ラブレターを手に持つ根元であった

そのラブレターに少年は、見覚えがあった

『姫路さんが書いてたものだ…』

たまたま書いているところに出くわしてしまっていたので、少年はそれが姫路が書いていたラブレターだと気が付いた

『ひつやう姫路さんを脅して、動きづらへしてこんなひつだ

少年は姫路さんに体調が優れないようだから、さがるようになんて

Fクラスの策士である、坂本雄一の下へ走る

「雄一、お願ひがあるんだ
根元君の制服がほしい

それと姫路さんを前線から外して欲しい」

馬鹿発言を交えつつ、坂本に頼む

「姫路がやる予定だつた仕事をやれ」

「どうやつて?..」

「自分で考へる、お前にしか出来ないやり方もあるだらう?..」

坂本の言葉に少年はひらめいた

少年は、吉井明久

肩書きがある

観察処分者

バカの代名詞である

観察処分者の召喚獣は、物に触れることができる

普通は出来ないのだが、教師の雑用などもやらされるためだ…

そして、召喚獣は普通の人間よりも力がある

吉井はそのバカとしか言いようがない頭で考へある事を思いつく

やるべき事は、根元の周りにいる近衛部隊をひきつける」と

吉井は覚悟を決め、何故かBクラスの隣の空き教室で偽りの模擬戦を開始する

目標は、壁をブチ破り、Bクラスに突入し近衛部隊をひきつけること

召喚獣の拳が壁に突き刺さるたびに、吉井の拳に痛みが走る

観察処分者の「デメリット」：フィードバック

召喚獣が受けたダメージが、吉井本人にも伝わるというモノ

手から血が流れよつとも止める事はしない

何よりも、根元だけには負けられない

何よりも、根元だけには負けられない

その信念の元……壁を殴つて殴つて殴り続けた

坂本の合図と共に、渾身の一撃が壁に・・・・・

吉井の作戦は成功、壁をブチ破り、近衛部隊を一いつ斉に引き寄せる

空いて居た窓から、土屋と担当の先生が舞い降り

根元を討ち取る

FクラスがBクラスに勝利した瞬間であつた

第3・5話とある少年は観察処分者（後書き）

PVアクセス7900突破 ユニークアクセス1300突破 お気に入り登録17件 感想1件

大変ありがとうございます！

初の感想いただきました！！！

更新頑張つてくださいと応援いただきました（＊、＊、＊）

ゼロ様または是非、感想等いただければと思います

K「といづ」とで、今回の3・5話なのですが、軽くFクラス側にも触れておこうと書いたのですが、後半眠い中書いてかなり雑になっている可能性が・・・すみません」

ルル「」での発言が少なくてびっくりしたかも

K「ええ、一応原作を知つていらっしゃる方が、頭の中でBクラス戦終了までの回想を頭に流した後に、第4話に入つていただこうと思いましてね」

ルル「なるほどね…ホント原作知らない人には優しくないよねwww」

K「まあ、それは偉大なる原作を買つていただいて、お読みください」という宣伝効果を！」

ルル「いや、絶対深く考えないで書いてただろ? WWW」

「」 覧いただきありがとうございました！

第4話（前編）～一騎打ち？いいよ？でも、それじゃあつまらないから前哨戦を

K 「ばんばんばんばん」んばんばん

ルル「やけにテンション高いな」

K「P.V9400突破!」「—ク1400突破!お気に入り登録2
1件!だよ?

ルル「そうだね…それより今回の話しさ?」

K「ああ、そうでした。ちょっとWAWA感が否めないのでですが、温かい田で」覗くださー！」

138

第4話（前編）～一騎打ち？いいよ？でも、それじゃあつまらないから前哨戦を

Fクラス対Bクラス戦「日目」が行われた裏で、Fクラスの策略により

Aクラス対Cクラス戦が行われた

Fクラス代表の坂本雄一はそう思っていた

だが、ルルーシュの働きと、Cクラス代表小山がした選択により
一見Aクラス対Cクラス戦が行われているに見えるその戦場は、と
ても落ち着いた状態であった

FクラスやBクラスは自分達の争い事で、こちらを気にしている暇
はない

そつこ)の俺ルルーシュ・ト・ランペルージにとって必要だったのは、
AクラスがCクラスと試合戦争を行ったという事実だけだ

中身に熱がなくても問題はない

1対1の戦いがいたるところで行われている

中には、1対3や

逆に3対1での戦闘を想定して、練習が行われている

一応試合戦争であることから、想像以上のダメージでの点になつて
しまつ生徒も数名居たものの

AクラスとCクラスの空気間は至つて良好そのもの

暫くの戦闘で、少しほは操作性を覺られたのではないかと思つ

開始から2・3時間がたつたころ、Cクラス代表が近づいてくる

「アリス君、いかが？」

「アリス君、木下さん小山さんの召喚獣を…」

「ええ、では！」めんなさい。小山さん

木下さんの召喚獣の手により、小山さんは敗北

代表が討ち取られたことにより、Aクラスの勝利がきまつた

その後、手筈どおりに和平交渉にて終戦となつた

ちゃんと回復試験を受けつつ行つたので、最後に討ち取られた小山さん以外は、実質的な点数ダメージは低い

その日の放課後まで話は飛ぶ

俺はエヴァと共に、家路についていた

「ルル」

「どうした？ ハガタ」

「RQ魔獣といつのは凄いな…確かに私達をイメージして作られていた」

「やうだね」

召喚者の趣向や素顔を映し出すらしいが… ハガタは特にハガタ…って感じがしたな

「腕輪の効果は確認していないがよかつたのか？」

「俺は確認したよ？」

「え？ なんだ？ そんなこと聞いてないぞ？」

「だって、言ひてないもの… ウウ

「一部教科だけね」

「総合教科は？」

「試してないね… といつより、当初の予定では4000点以上にするつもりなかつたし
いらないよ」

「やうだな

四月

遅刻した

ちよつとだけね？ちよつとだけ

教室に着くと、何やら騒がしい

「FクラスはAクラスに代表者による一騎打ちを申し込む」

どうやらFクラスが対談をしに来ているようだ

俺とエヴァは無視して席につく

「ちょっと待ちなさい、私だけじゃ判断できないわ」

この声は木下さんか、霧島さんじゃなくて木下さんが対応してるのね

「ルルーシュ君ー遅かつたじゃない！－」つち来て

登校してきた俺を発見した木下さんが、大声で名前を呼ぶ

ふむ… Fクラス交渉か

「はいはい、お呼びでしょうかお姫様」

とおふざけで、方膝を付いて、手を胸にあて木下さんに言つてみる

「お、お姫…じゃない、Fクラスが試合戦争の交渉にきてるのよ

「ほー、そして俺にどうじるといへ..」

「いや、じつまつ得意やうじゃない?」

やれやれと言つた表情を、全面的に俺は木下さんごぶつけて、対談の場へ足を踏み入れる

偉そうにFクラス代表の坂本雄一が座っているのが田に入る

その対面にある席に俺はドカッと座る

「それで、このAクラスじゃない見ない奴らがFクラスなの？」

「Fクラス代表坂本雄一だ」

あー野生風味溢れる感じだね

「ルルーシュ・T・ランペルージ…代表じゃないけど、一応Aクラス所属だよ

それで、何の用かな？」

「Fクラスは試合戦争の宣戦布告をAクラスにしたいのだが、勉強などで忙しいだろう？Fクラスのバカ連中のように体力ありあまるような人たちでもないだろうしなAクラスの連中は…だから代表の一騎打ちを申し込みたい」

「一騎打ちね、条件次第で受けてもいいよ」

「ツー」

いや、あんたが驚くなよ…自分で持ちかけたんじゃん

「ちよ、ちよつとールルーシュ君? 一騎打ちなんてそんな…」

「そんなことを提案していくるぐらいだから、何か策があるのではな
いか? とでも思つていいのか木下さん」

「え、ええそうね…実際DクラスBクラスと倒してきたのは事実だ
し」

確かに、圧倒的な点差を埋められるほどの策を練れる男

何か対Aクラス用のコトを用意していてもおかしくない

「と一騎打ちでもいいのだけど、それじゃあ盛り上がりがないじゃな
いか

といつことで、試召戦争の結果は代表同士の勝負に委ねるとして
その前哨戦といふことで、数名代表をだして手合わせしないかい?
昨日Cクラスの人たちと戦つたのだけど、操作のコツがイマイチ
つかめなくてね…経験つめるならしたいのだよ」

「ん? その前哨戦とやらの勝敗は、クラス間の勝敗には関係ないつ
ていうことか?」

「そろそろ、クラス間の試召戦争の勝敗は、完全に代表同士の戦い
一戦にのみ適応だな」

「まあ、全く関係がないのなら、俺は構わないが…」

「そうか、でもただ、前哨戦でなんにもなく戦うんじゃつまらないな
負けた方が勝った方の言う事をひとつ聞いてもらいつつていうのを
つけたら、代表戦前も盛り上がるんじゃないかな?」

「いいだろう、何人出せばいい?」

「そうだな…代表戦とは別に5人でどうだい?代表戦のカードは霧
島さん対坂本君で」

「それでいい…対戦科目の決定権はもうつていいか?」

「前哨戦のうつけ三つはもうつよ?」

「ああ。」

「では確認だ、前哨戦…つまりクラス同士の勝敗に関係する戦いで
はなく、互いの代表を応援するという意味での戦いを5戦した後、
霧島さん対坂本君の代表戦を行う

そして、負けた方は勝つた方のいう事を一つ聞く…もちろん出来
る範囲のことだけに限る

科目選択の決定権は、Aクラスに前哨戦3試合分、Fクラスに前
哨戦2試合分と代表戦の1試合分

これでいいかな?」

「大丈夫だ」

Fクラスとの交渉が終わり、一時Fクラスは撤退
クラス全員を連れて、後ほど来るといつ

「ルルーシュ、どうして私と雄一の代表戦のみ、クラス間の勝敗
に左右するなんてしたの？」

「霧島さんと坂本君は、幼馴染だね？」

「…（コクツ）」

霧島さんは頷く

「そうだな、彼は君の弱点…もしくは確実に間違える問題を知つて
いるのではないか

科目選択の決定権の代表戦の分を彼にあげたのは、あえてその策
を行わせるため

「…それだと、私が負けるんじゃ？」

「いや、君は勝つよ

そんなんで負けるなら…君を信じた俺がバカであつたというだけだ
俺達は君が勝つことを信じ、前哨戦で勝利というエールを君に送る
ただそれだけの話し、君は全力で坂本雄一を倒せばいい

「…わかった

後半へ続く…

第4話（前編）～一騎打ち？こじよ？でも、それじゃあつまらないから前哨戦を

K 「『』覧頂きありがとうございます。」

ルル「なんか無駄に前哨戦なんてつけたのね」

K 「そうそう、それで今だから言えるのだけど
バカテスの原作1巻と2巻友達に貸したままだ、つい覚えつて
いうね…」

ルル「あひとおおおおおおおおお…すぐに返してもいいのだー。」

K 「いや、それが…一年以上返つてないんだよ…借りパクされ
たぽ…」

ルル「それは残念ですね…」

K 「とまあ『』で次回予告ー。」

描写が省かれすぎて、存在する意味がわからなくなつた前哨戦
ルルとエヴァの召喚獣は一体どんなものに…？

次回、俺と俺の嫁^{エヴァ}と召喚獣だと？（仮タイトル）

第4話（後編）～霧島さんの発言が原作と違つ…まさかの霧島フラ
グ建設！？

本日22:00にアップ予定

第4話（後編）～霧島やんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラグ建設…～

K「ちー、とこい」と始めての予約投稿?」

ルル「うまく投稿できてるといいね」

K「では、ついに始まりますAクラス対Fクラス戦!」

本編ビデオ

第4話（後編）～霧島やんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラグ建設！～

Fクラス対Aクラスの舞台が整えられた

「ではこれよりAクラス対Fクラスの試召戦争代表戦を行います
まず前哨戦ということで、一騎打ちの5連戦を行います
これはクラス間の勝敗には影響が出ません

では、まず一戦目、両クラス出場者は前に」

司会進行判定は、学年主任の高橋文史である

「Fクラスからは、木下秀吉をだす！」

坂本君の言葉によつ、秀吉が前に出でくる

「Aクラスからは、木下優子」

何故、俺が代表みたいな役割をしなければならぬんだ！！

前哨戦 一回戦

木下優子 対 木下秀吉

「教科は好きなモノを選んでいいわよ、秀吉」

「日本史でいいかの？」

「ああ、その前に、秀吉ちよつといいかしら？」

木下さんは秀吉を腕を掴み廊下に引きずり出す

「クラスへの罵倒の件の制裁を行つたらしい

前哨戦 一回戦 日本史

WIN 木下優子 対 木下秀吉 南無阿弥陀仏

画面の表記がおかしいことになつてゐるが、気にしてられない

「では、前哨戦一回戦、両クラス出場者前へ」

Fクラスからは島田美波が出るようだ

「エヴァ、行って来い」

「私がいくのか!?」

「エヴァちゃんの活躍するカワイイ姿みたいんだけど?」

「む…ルルがそう言つなら……／＼／＼」

エヴァちゃんがちょっと嫌々ながらも人前に出て行く

「教科はくれてやる!」

「そう、なら数学を」

前哨戦 一回戦 数学

エヴァンジエリン・A・K・ランペルージ 対 島田美波

「では、初めてくださいー。」

「「サモンー」」

島田美波を小さくし、何やら西洋の軍人のお偉いさんが着ているような正装に身を包み

サーベルを片手にもつ召喚獣が現れた

頭の上には202という数字が浮かんでいた

髪型は召喚者と同じくボーテールにしつかりなつており

ぬこぐるみのようである

一方エヴァの召喚獣だが、召喚魔法陣の上に黒い霧といつか煙りの
よつなものが、数秒現れた後……一向に姿が見えない

「え？ どうしたの？ よ？ あなたの召喚獣出てないじゃない？」

島田さんは完全に油断をしていた

エヴァが一ヤツと口元を緩めると

島田さんの召喚獣の影から、ぬつと腕が出てきた

その腕の先には、ゲームサーベルのような武器

背後から島田さんの召喚獣は、首を狩られて戦死した

「え？ な、何が起きたの！？」

「すまないな、召喚してすぐに腕輪の能力を発動させてもらつたまあ想定外な能力に驚いたが、楽に狩らせてもらつたよ」

「腕輪持ちー？」

前哨戦 一回戦

エヴァンジーリン・A・K・ランペルージ 対 島田美波

数学 530点 対 0点

島田さんの召喚獣が消えると、エヴァの召喚獣がやつと姿を現した

エヴァを小さくした姿ではあるのだが、召喚者事態が小さかつたらか

他の召喚獣よりも一回り小さい気がする

服装は、文月学園の制服と至って普通なのだが……片手にビームサー
ベルのように手から剣の形をした微発光物質が出ている

ネギまの原作がわかる方は、断罪の剣を想像していただければたや
すいであろう

「腕輪の能力で、発動と同時に前の召喚獣の影の中に潜伏させて
もらつたよ」

エヴァの数学の腕輪の能力、影の中に入れる……といつのは能力で出
来る一部にすぎない

正確には影操作能力である

エヴァは召喚と同時に腕輪を発動した、すると黒い霧のようないも
のが発生

影をどう操るか、エヴァ自信の中で決めて居なかつたため、周囲の
影がエヴァの召喚獣を包んだだけとなつた

それを一目見て能力を判断したエヴァはすぐさま、影から影に移る

影転移を使用し島田さんの召喚獣の影に潜んだ

そして油断しているところを断罪の剣でしとめたのである

前哨戦 三回戦

Fクラスは吉井明久を投入

彼は観察処分者である

観察処分者の詳しい説明は、勝手ながら省かせてもいい

「Aクラスからは、久保利光！」

Fクラスの生徒は、去年の成績的に姫路さんがFクラスにいる今、学年次席は久保君だと思っている

そのためか、辺りが少々ザワつく

前哨戦 三回戦 総合教科

久保利光 対 吉井明久

3998点 768点

観察処分者の吉井明久は、数倍の点差などものともせずにひっくり返すほどの

召喚獣の操作スキルが高い

がしかし、負けてしまうものは仕方がない

前哨戦 三回戦 総合教科

久保利光 対 吉井明久

2698点 0点

充分善戦をしたと思われるが、久保君の攻撃を懸命に回避するもの

の、度々被弾し

吉井君のダメージが低い攻撃の連打では、点数をひっくり返すのに
限界があり

泥仕合化した為、描写には触れないでおく

前哨戦 四回戦

「……俺が出る」

ムツツリーニと呼ばれる少年

本名土屋康太

保健体育の点数だけ異常に高い

「じゃあ、ボクが」

前哨戦 四回戦 保健体育

工藤愛子 対 土屋康太

445点 589点

工藤さんが腕輪の能力である、加速を発動し勝つたかに見えたが

土屋君も腕輪持ちで、工藤さんと同じ加速の能力であった

工藤さんの腕輪持ちであるという自信から、油断が生まれ

土屋君に一刀両断されてしまつ

前哨戦 五回戦

「私が行きます」

そう言つて出てきたのは、姫路瑞希

「ならば、俺が出よつ

前哨戦 五回戦

ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希

「仕方ない、特別に俺が決めるはずの教科選択を、君に選ばせてあげよつ

「いいんですか？」

「ああ。」

「では、総合教科でお願いします」

「それでは、はじめてください。」

「「サモンー。」」

姫路さんを小さくした見た目の召喚獣が現れる

がつしりと鎧に包まれ、手にはランスだらうか？リーチが長めの武器が見える

そして召喚獣の左手には腕輪が

頭の上には4418の数字が浮かぶ

4418点か……

そして俺の召喚獣は、同じく自分を小さくした見た目で

服装は文月学園の制服である

武器は刀が2本腰に手に木刀一本である

「昨日のクラス戦の時に回復試験を受けてね…」

前哨戦 五回戦 総合教科

ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希

5720点 4418点

「結構がんばっちゃったよ」

その言葉と同時に、俺は切り込む

姫路さんはそれをランスで受け止める

かなりランスが硬いと見受けられる

それに身を包む甲冑

装備の差が酷い気がするな

木刀を姫路さんに向けて投げる

その後を追う様に、姫路さんへ突撃する

刀の一本を掴む

姫路さんは投げられた木刀を、ランスで切り払つように防ぐ

居合い斬岩剣

【居合い】の要領で斬岩剣を姫路さんに浴びせる

俺の召喚獣は、何故か氣と良く似た効果を発生できるらしい

追撃するかの「」とく、姫路さんへ斬空閃を連発する

斬空閃 気を斬撃に乗せて放つ技

斬空閃を出しそぎたせいで、爆煙が上がり

姫路さんを見失ってしまった

突然ランスを向けて煙りの中から飛び出してきた姫路さんの攻撃により、抜いていた刀が吹っ飛ばされてしまつ

さて、無双のお時間だぜ？

姫路さんの周囲を飛び回りながら、居合い拳を放ち続ける

高い威力で吹っ飛ばされることもなく、倒れそうにならうとも四方八方からの居合い拳によりそれは許されない

ランスを振り回すものの、居合い拳の方が射程距離は長い

とどめに居合い拳を喉へあて、姫路さんは吹っ飛び

前哨戦 五回戦 総合教科

ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希
5673点 0点

前哨戦

WIN

木下優子 対 木下秀吉

WIN

エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ 対

島田美波

WIN

久保利光 対 吉井明久

工藤愛子 対 土屋康太 WIN

前哨戦は4勝とAクラス圧倒的に勝った

Fクラスからは負のオーラが漂う

前哨戦とはいって、4敗してしまったのだ

何か策があったとしても、それが本当に通じるのかと心配になってしまつであろう

「では、前哨戦終了ということで、代表同士による、一騎打ちを始めたいと思います」

「教科選択は事前の交渉どおり、俺がもうひづれ日本史小学生レベルの問題で上限100点満点の筆記試験を頼みたい」

坂本君の言葉により、問題が用意され代表2人は別室に

残された、生徒達には、どんな問題が出題されているか、モニターでみれるようになっていた

それをFクラス連中は注目しており、突然歓喜の声をあげた

大化の改新は何年に起きたかという問題か

原作を見て居る方はわかると思う

それは、間違えた答えを小さい時に、坂本君が霧島さんに教えたことだ

それを霧島さんは大事にして、本当の答えがわかつっていても間違え

を書く

そう坂本君は踏んでいた

「やつたー！」これで俺達がシステムテスクだ！』

だが、現実はきびしかつた…

霧島翔子 100点 坂本雄一 53点

霧島さんがノーミスといつににもちよつと、驚いたが

坂本君53点つて……使われていない知識が数年たつても頭に残つているなんて、甘いよ。復習も何もしなかつたのだろう

戻ってきた坂本君は、Fクラスのメンバーに縛りあげられて文句を言っていた

「ルルーシュ」

「はい？」

またか……またその隠密性を駆使して、俺に話しかけて

俺を驚かせるなんて真似を・・・・・

「…信じてくれて、ありがとう」

「いえいえ、万が一坂本君が、復讐をしていたら、危険な可能性があつたからね

霧島さんが大切な思い出に縛られないで居てくれたことに感謝するよ

と俺は、微笑みながら頭を撫でる

この子普通にしてれば細かい仕草とかも、カワイイよなあ・・・・・

「コナデボ 発動中（ルル本人は無自覚です）

「さて、それでは、戦後交渉といきましょうか」

何故かその言葉とともに、土屋君がカメラを構え始めたのだが……

「まあは、クラス間試合戦争の勝敗についてだが、Fクラスは二ヶ月間の試合戦争の禁止を条件に、設備のダウンはなしつまり今回は和平交渉により引き分けとする」と提案する

「設備を下げなくていいのか?」

「いいよ別に、むしろ一段回あげてあげたいくらいだよ、俺個人としてはね

女の子もいるんだし、あの環境は酷すぎる

さて、どうする気けるかい?」

「仕方ない……受けるしかないが、他のクラスから宣戦布告された場合はどうしたらいい?」

「それは既に西村先生を通じて、学園長に話は通してある

「そうか、それなら受けるしかないな

だが、そんなんでいいのか？むしろ普通に負けたときより、設備が下がらなくなつたとなるだけで俺達にメリットしかないじゃないか

「お前達のデメリットは、そうだな…三ヶ月後から更に三ヶ月、Aクラスに宣戦布告することを禁ずる
これでどうだ？」

「それでかまわない」

やつたね！…これで半年間静かに過いせやうだ！…

「さて後は、一騎打ちに負けた者には勝つた方のいつ事を一つ聞いてもらつといふのだが」

スッと久保君が前に出た

「僕からいいかな、吉井君」

あれ…久保君に対して吉井君をあてたのは失敗だったか！？

B「奥がす」こする！

「僕にでもある」となり直つてよ、久保君」

「今度の休み、賈い物に付を合つてもいいえるか？」

「ん？ そんなことないの？」

吉井類……アーティオス……君が純潔でなくなることに、黙祷……

「さて、次は、木下さん……は弟だから勝手にやつてくれ

「ええ。」

「土屋君から土藤さんへのお願いは？」

「…………[身体になつても]ひひひ」

「ムツツコーー君、ボクのナニを撮りたいのかな？」

工藤さんはそりこいつへ、挑発するようにスカートをスススッとあげていく

土屋君が何かを想像して、鼻血を噴いたのは言つまでもない

まつたぐ……FクラスだけじゃなくてAクラス連中も充分騒がしいよ

……

「さて、次にエヴァ？」

「ん？ ああ、私は頼むよ！ な事はないな……私の権利はルルにやる」

あら、そうなの……

「ひひこひ」とど、島田さんこも俺のこひの事聞いてもおひつかね

島田さんと姫路さん……

「あ、姫路さんは、上クラスの男子全員に、御菓子でいいから作つてきてあげること」

「そんなのでいいんですか？」

姫路さんと島田さんはキラントンとしてこの

姫路さんの料理の危険さを知る者は、恐怖に顔をゆがめ

そんなことを知らない男達は、嬉しそうに舞い上がり騒がしくなる

「島田さんはそうだな……」

「何よ……？」

「君の事は詳しくないからなあ……とつあんず思つてつたり言つかり、連絡先教えてもらつていいかな？」

「…今も好きそれは変わらない、だけど別に気になる人もいる

もつ聞きたくないといつもうな態度をとる坂本君に、真剣な目で霧島さんが言った

「…話しば最後まで聞いて」

「それからもう諦めろ」

スッと坂本君の前に歩いていく

「…雄一、小学生の時からずっと好きだった」

「…（コクツ）」

「最後に霧島さんだね」

島田さんの件は保留として最後…

「ツ……！」

想定外の発言に坂本君は目を見開く

「…雄一が好きな自分に縛られたかもしれない
…友達もいなかつた私に、話しかけてくれた雄一の優しさに甘え
ていただけなのかも知れない」
…雄一のことは気になる、それが幼馴染としての気持ちなのか、
好きだからなのか、わからなくなつた：
…それでもやっぱり雄一の事が好きなんだつて思えたら、またそ
れを伝えるから
…今は昔みたいに、友人として仲良くしてほしい」

なんか、凄い原作と変わってるんだけど、何がおきた？

「…」
…「…」
…「…」

どうなつてんだ?????

お前が二コナデポ発動したせいだボケエ！BY作者

第4話（後編）～霧島やんの発言が原作と違い、…おむかの霧島フラグ建設～

K「やめて、なんか凄くやらかした気がする」

翔子「…？」

K「つてあれ！？なんでルルルじゃなくて霧島やんに変化していついやるの？」

翔子「…ルルーシュならエヴァンジオンだと帰った」

K「あいや……じゃあ自分も失礼して……」

翔子「…？」

作者逃走のためナレーションがお送りします

「覧頂きありがとうございます」

感想等につてもお待ちしております

また評価やお気に入り登録していくと作者が、シャチホコの真似をするように体をのけぞらせて喜びますので、是非ともお願ひいたします

第5話～彼は一体何者なのか？B Y 霧島翔子…霧島をとつて鍛えれば暗殺業が

K 「おはようございます」

ルル 「おはよう」

K 「今回はなんと、（たぶん）1・5話分の（たぶん）大増量版！
初の翔子視点から、Fクラス戦後の翔子の行動まで！」

ルル 「ほほほ」

K 「翔子の心情といつか、葛藤といつか、そういうものが、イマイチ表現できていな氣もしますが…温かい田で」覗くだせ」

本編ビューティ

第5話～彼は一体何者なのか？B Y 霧島翔子…霧島をひつて鍛えれば暗殺業が

翔子 S ides

私は霧島翔子

今は文月学園2年Aクラス代表になった一学生

まだ小さい時の話し…私は、お父さんの仕事の関係で、とある小学校に転校した

人と接するのが得意ではない私

最初はクラスの子も話しかけてくれたけど、暫くすると私は一人ぼつちになつた

それでも彼だけは、私とおしゃべりしてくれた

坂本雄一だけは

私は雄一を好きになった
それはこの先も変わらない

その好きが、友人としての好きなのか、異性としての好きなのかは
わからない

時は進み、文月学園2年生での初日

ルルーシュという男とその妻だといつエヴァンジエリンさんが、転
校してきた

ルルーシュという人は、人をからかうのが好きみたい

ルルーシュという人は、何を考えているかわからぬいけど、言動の
裏には何か理由があるみたい

2学年開始早々、FクラスがDクラスに試召戦争を仕掛けた

Fクラスの代表は雄一…

侮れない…仲良くなれた優子に一応相談してみたけど

次席だというルルーシュにも相談してみたけど

彼はFクラスの存在をしっかりと視野に入れていた

『Fクラスだから何も考えずに挑んだだけでしょう?』なんていう発言も他人からはあつたけど、ルルーシュはちょっと違った

FクラスはそのままDクラス、Bクラスをおしてしまった

そして、私達Aクラスに雄一達が乗り込んできた

優子が対応していくくれたけど

ルルーシュ君が来た途端、彼を交渉の席に呼んだ

ルルーシュの発言は意味のわからないことばかりだった

代表同士の一騎打ちを認める

だけど前哨戦をしたい

一体何が目的なんだろう?

交渉が終わったあと尋ねた

なんでクラスの勝敗を私と雄一の勝負にかけたのか

優子が言つてたように、雄一が何か策を練つてきてる可能性が高い

彼は私の質問は気にかけず、確認をとつてきた

私と雄一が幼馴染か?と

私は頷く

彼は、雄一が練っている策を、あえて使わせると言った

意味がわからない、私が負けたらFクラスと設備は入れ替えになる
頑張つてAクラスに入つた人たちもいるのに、酷い環境で過ごす事
になつてしまふかも知れない

彼はサラリと云つた

「いや、君は勝つよ

そんなんで負けるなら…君を信じた俺がバカであつたというだけだ
俺達は君が勝つことを信じ、前哨戦で勝利というエールを君に送る
ただそれだけの話し、君は全力で坂本雄一を倒せばいい

私を信じてくれる

雄一に何か策があつても、私が勝つと信じてくれる

雄一の策にも負けず、私が勝つと信じてくれる

ううん…信じてくれる云々といつよりも、何かを見透かしていくよ
うな目が

勝てると断言してくれるような力強さを感じさせてくれた

何を考え、私にその言葉をいったのか

何を私に求めているのか

Fクラスとの試召戦争が始まる

Aクラスの皆は、全力で戦っている

彼、ルルーシュは観察処分者で雄一の友達の、吉井明久にも手を抜かなかつた

学年3位の久保君に相手をさせていた

そして、ルルーシュも、前哨戦最後

召喚された召喚獣の点数は私を遥かに上回っていた

それでも彼は、私と雄二との一騎打ちを認めてくれた

私を信じてくれた

Aクラスの皆が応援してくれている

雄二、私にとつて大切な思い出なのは変わらない

だけど、皆が応援してくれている

私はそれに全力で向かわないといけない

ルルーシュが言った、雄二に策があつても私が勝つと

ルルーシュが言った、私が勝つと信じていると

ルルーシュが言った、信じている：だから全力で雄二を倒せばいいと

ルルーシュが言った、エールとして前哨戦で勝利を届けると

皆が送つてくれた、勝利を、応援の言葉を

雄一を侮れない…

私は全力で雄一を倒す

霧島翔子 対 坂本雄一

100点 53点

「ルルーシュ」

「はい？」

…？いつも話しかけると、ほんの少しだけビクッと体が動くルルーシュは、ポーカーフェイスで対応してくれる

…面白い

でも今は何より…

「…信じてくれて、ありがとう」

そう伝えたかった

「いえいえ、万が一坂本君が、復習をしていたら、危険な可能性があつたからね

霧島さんが大切な思い出に縛られないで居てくれたことに感謝するよ」

ルルーシュは、どれだけのコトを知っているのだろう?

雄一とのことは何も話していない

大切な思い出、それも知っているわけがない

それなら何故、そんな言葉が?

突然ルルーシュに頭を撫でられた

頑張ったねーと動物を撫でる感覚なのかな?

微笑む顔は、温かく感じる

彼は一体何者なんだろ？

彼の言葉が何故、こんなにも心に響いてくるのだろう？

ルルーシュが気になる？

気になる

じゃあルルーシュが好き？

違う、私は雄一が好き

本当にそれは異性としての愛？

うん

雄一に甘えているだけ？

甘えて…？

雄一が好きな恋する自分に縛られているだけ?

それは違う。私は縛られてなんかいない

それじゃあ何故雄一にこだわるの?

雄一は優しい。雄一は…

それじゃあルルーシュの事が気になるのは何故?

ルルーシュは、不思議な人だから気になる

その気になるは恋愛感情に至らないと言い切れるの?

それは…だって、私は雄一が好きだから

雄一が好きっていう好きは、友人や幼馴染としての好きだからじゃないの?

違
づ

なんでそう言い切れるの？

…

私は雄一が好き

でもルルーシュが気になる

じゃあ雄一への好きは、本当に異性としての好きなの？

何故か、断言できない

今までなら雄一が好き、夫にしたいほど好きって断言できたのに

雄一…

ルルーシュのことによく知れば、ルルーシュが気になるのが好きで気になるからなのか、不思議な感じがするから気になるのか、わかるかな？

翔子 Side END

Fクラス戦終了後…帰ろうとしているど、Hヴァが霧島さんに呼び出されていた…

Hヴァ Side

Aクラス対Fクラス戦の後

何故か霧島という女に呼び出されたのだが…

「それで、私になんのようだ？」

「…やつとき雄一に話してた事聞いてた?」

ん?ああ、あのなんか他に気になるやつがいるだとか

本当にあの『リラ』の事が好きだと思えたなら、それを伝えていくね
とか一方的に言いたいこと言つてたあれか

「それがどうした?」

「…私もどうしたらいいのかわからない」

は?何を言つているんだコイツは?

「…好きかどうかわからない、けビルルーシュが気になる」

それを私に言つのか…変な奴だな

「それで私にどうしようと?」

「…ルルーシュの事を知りたい

…雄一が好きなのか、ルルーシュが好きなのか…もつとよく知れ
ばわかるかも知れない」

はあ……なるほどな

「それで、もしルルのことが好きだったらどうするんだ？
私の夫だぞ？」

「……奪う」

「……この女、サラッと私の前で悪いこと言つたぞ？」

「はあ……まあいい、教えられる範囲で教えてやるが、ルルはお前1人
人が独占できるような、小さい人間じゃないぞ？」

「……？」

「表向きには言つなよ？ルルには何人かの嫁がいる
私はたまたま、ルルに着いてきてこうやって一緒に学生なんかや
つてはいるが
元の家に戻れば、数人の嫁の中の1人にすぎん
独占は無理だ、それに嫁同士の仲も悪くないしな」

「……それでも、好きならそばに居たいと思つ……少しでも多く私を見
てもらうそれだけ」

「ほう……まあそうか……」

「それじゃあ、他言無用を条件に、教えられる事は教えてやる
ルルに近づきたければ好きにしたらい

「…（コクツ）」

れど、私は帰つて夜ご飯を作らなくてはいけないのだ！

～エヴァ Side END～

エヴァと霧島さんが戻ってきたと思つと、エヴァは先に帰つてると
いい残し教室を出て行つた

先に帰つてゐつて…俺ももう帰るんですけど？

「…ルルーシュ」

「はい？」

また、隠密性が…

この子一歩間違えたら絶対暗殺業できる気がするよ

「…お嫁さん何人いるの？」

・・・・・なんやて！？

「（めん、もう一回いいかな、聞き間違えたかもしねない）

「…お嫁さん何人いるの？」

聞き間違いやしない！！

「（ひつひつ意味かな？）

「…ヒヴァンジヨリンさんが何人もお嫁さん居るって言つてた

エヴァから的情報だと…?

それじゃあ誤魔化せないじゃないか…

「何人でしょうねえ…まあそこそこありますよ…ええ…」

「…浮氣じゃないの？」

「うーん…浮氣は氣の迷いだから違うかな？」

「何人もいる嫁は、全員それを愛しているし、嫁は嫁同士で助け合つていろし

なんだろう、それぞれの個性を尊重しているというか

つまくまとまっているつもりだよ？

俺としては、もし俺が好きになつた子がいても、その形態を理解できる人じゃない限り新たに嫁をとる氣はないし
つまく言えてないなあ……」

「…他のお嫁さんは、一緒にいなって聞いた
…放つておいていいの？」

「いや、よくない！むしろ俺も帰りたい！だけじねえ、色々あるの
よ」

神による突然無茶ぶり的な仕事とかとかとか

「…お嫁さん達は怒りなごの？」

「いや、たぶん怒つてひしゃると細つけど、ある程度怒りが覚めれば理解してくれるよ」

事情の面でね…」

「…やう」

「あー、やるやうに帰るとかなん

「…また、色々聞かせて」

「ん？うふ、ここよ
じやあね霧島わざ

「…（ハクシ）」

第5話～彼は一体何者なのか？B Y 霧島翔子…霧島をさつて鍛えれば暗殺業が

K 「『』覧いただきありがとうございます！」

「今回はいかがでしたでしょうか？」

ルル「うん、翔子ちゃんはきっと暗殺業が出来るね
あとは拷問を行う尋問官とかね」

K 「まあルルの感想はいいでしょ」

読者様からの感想の件です

前にゼロ様からいただいたことを後書きで書かせていただいた
のですが、それから3件新たにいただきました

七夜和様から2件、霜柱三寸様から1件・まことにありがとうございます！」

ルル「ありがとうございます！」

K 「『ルルの腕輪が楽しみ』『翔子が正式ヒロインになることを期
待してます』とこうお言葉を頂戴いたしてあります」

ルル「俺の腕輪ですか…出る機会が近いうちにあればいいのですけ
どね」

K 「ええ、そうですね

では、様々な感想等お待ちしております

また同時にアンケートということで、この作品の正式タイトル
の候補を募集しております。よろしくお願いします

PVアクセス12600突破 ユニークアクセス1750突破
お気に入り登録25件 という感じで、こちらに関してもあり難く思つております！」

ルル「そして、最後に評価について…」

K「はい、お2人の方から評価をいただけたようです

文章評価 平均：4 pt	合計：8 pt
ストーリー評価 平均：5 pt	合計：5 pt

ということは、ストーリーの流れに関しては、高評価をいただいているのかな？文章は…ドンマイ…みたいな感じなのでしょうかね…

文字で背景やものの動きを表現し、読者の方に伝えると…まだまだそれが甘いんでしょうね…経験を積んで少しずつ頑張っていきたいと思います！

評価いただけたことだけも、今はとにかく嬉しいです…ありがとうございます！」

今後もよろしくお願ひします（＊－－）△

第6話～暴走少女に一度目の遭遇～（前書き）

PV16600突破 ユニーコ2100突破 お気に入り登録32件

ありがとうございます！

K「どうい」と、やつて参りました、美春回

ルル「あの暴走少女か…」

K「逝つて来いルル」

ルル「はいはい」

本編どうぞ

第6話～暴走少女に一度目の遭遇～

Fクラス戦終了後、霧島と少しお話しした俺は、やっと家路につくことができた

家に着く少し手前の公園に、何故か体を大きく揺らしながら息切れを起こしている暴走少女が居た

そう清水美春である

これはスルーしかないな！

「ちよっと、そこの豚野郎、待ちなさい！」

見つかって…っていうかそっちから話しかけてきておいて、豚野郎呼ばわりか…

想像以上に凄いなこの子

「はい？」

「やつぱり、この間の豚野郎でしたか」

いや、だからその偉^伟に豚野郎呼ばわつするのせ、ビックリ御つ
んだ？

「それで、何かようでも？」

「美春が話しかけてあげているのに、その態度はなんなのですか！
まったくこれだから豚野郎は……」

と呆れ顔を交えて、再度豚野郎と俺を罵る暴走少女

いや、『その態度はなんなのですか！』って俺が言いたいセリフな
のだけど？

心の中で苦笑してしまった

「これはこれは、お嬢様失礼致しました。

そんな豚野郎に何か御用でございましたようか？」

執事風対応のおふざけで返してみる

「ええ、豚野郎、まず名前を名乗りなさい」

先ほどより偉そうにいつ言い放つ暴走少女…

やべーーー余計調子にのりやがった！？

「ルルーシュ・ト・ランペルージと申します」

「ああ…その制服、豚野郎も文月学園の生徒なのですか？」

「ええ、お嬢様も文月学園の生徒とお見受けられますが？」

暴走少女は、制服を着用していた

「2年Dクラス、清水美春ですわ

そんな豚野郎は、何年のどこのクラスですか？」

「2年Aクラスですね」

「なつ… Aクラスにこんな豚野郎が！？」

ちょっと待て、その驚き方はおかしいだろ？

男全員を豚野郎扱いしているなら、そりゃーいるに決まっているだろ…

「で、帰つてもよろしいですか？」

「ちょ、ちょっと待ちなさい…この間のあの美春を追つてぐる豚野郎を、もう一度倒しなさい！」

「また追われてるの？」

「ええ、そうですわ！あの豚野郎…帰宅そいつそいつ美春に襲い掛かつてから、逃げていた途中なの…」

「パパさんもしつこいですね、娘が大事なのはわかるけど…高校生にもなつて抱きつかれたら普通嫌だろ？」

ファザコンでもない限り…

「俺、疲れたから帰る

いつもの事なんだろ？自分でどうにかしら」

「美春が頼んでいるにも関わらず、この豚野郎は・・・」

ブルブルと全身を震わせている

いや、ワナワナと…の方が正しいか？

表情がとても恐ろしいね

「人に頼みごとをするならそれなりの頼み方があるだろ？」

俺と清水さんは友達でもなければ、ある程度顔をあわせた知り合いでない

たまたま、遭遇して、また今回たまたま遭遇しただけの話し

緊急に助けが必要なら別だが、今は一旦逃げ切った後とかだらう

？」

「豚野郎は頭が固いですね…」

「まずその豚野郎を止めてくれ…そんな呼び方をされるような酷い事を清水さんにした覚えはないんだが？」

「豚…ふ…豚…ランペ、ルージ…」

苦痛の表情を浮かべて、名前を呼んだ清水さん

つて、名前呼ぶだけでそこまで嫌悪する！？

いや、この子重症だわ

「ルルーシュでいいよ」

「ル、ルル、ルルルルルーシュ…」

いや、ルはそんなに多くないよ?

「それで?」

「…美春を追つてぐる豚野郎を、倒しなさいー。」

「倒してくださいでしょ?」

「クツ・・・・倒してくださいー。」

いつの間にか清水さんの顔真っ赤だね。:

「頼まれたから、軽く相手にしてもいいけど、その対象がいないから今回は無理だね

諦めなさい」

「や、約束が違うですー。」

「約束はないのだけども…」

「『』の豚野郎、やつぱり豚野郎ですわー。」

臨戦態勢に入る清水わん

といひで、どこにフォーカやナイスを隠しちまつてゐるわけ?

暗器術ですかね?

まあとにかく、『』での一手は逃げに限る……。

逃走をはかる俺に罵倒と凶器が飛んでくるが、後ろを振り返ることなく一気に家路を走り抜ける……。

これが、清水美春との一度目の遭遇であった

第6話→暴走少女に一度目の遭遇→（後書き）

「『見』ただきありがとう』やむこもす」

ルル一 よがつた、暴走少女との絡みが短くて」

ノルマの基礎知識

ルルー怖いこと言わんといつづけ！？

K「ほいほい、とまあこの辺でルルにもう一度美春を絡ませて起きたかつたつていうだけなのですがね」

ルル はあ

K H I J んなくだらない後書きなんかいいんだよ…

たじりとん

ルル「どんな?」

K
T
90・80・50・30・30・20・40...みたいな感じ」

ルル「今まで？」

K.F. 50 • 30 • 20.....」

ルル「ああ、おかしいね WWWバグなのか..まさかランギングに?」

K「いや、評価が少ないから、ランキングはないと思つナビ…」

ルル「なんでだろうね…」

K「ホントびっくりしますー！ありがたいの一言に限るんですけどね」

ルル「まあ確かに」

K「皆様今後もよろしくお願ひしますー！」

アンケート募集中

この作品の正式タイトルの候補を募集しております
よしければお願ひいたします

第7話～クッキーは好物だけど、これはクッキーじゃない…兵器だ…（前書き）

K「ああ、アシアラシシユ中ですよー」

ルル「こつまでひきあまかねえ、いの熱い」

K「俺の頭に話し流れが浮かんじゃねえ」

ルル「せうですか…」

K「さて、今回せ…ねむとしたお話しの回となつておつまみ」

ルル「せせ…」

K「では本編ドウゾー」

第7話～クッキーは好物だけど、これはクッキーじゃない…兵器だ…

うん、対Fクラス戦が終わってやっと静かに学園生活を送れると思った
つていたルルーシュだよ

げんじつ

は甘かつた

「ルルーシュ、好きな物は？」
「ルルーシュ、嫌いな物は？」
「ルルーシュ、休みの日はどう過ごしているの？」
「ルルーシュ、趣味を教えて欲しい」

霧島さんからの質問ラッシュに遭遇し

「見つけましたわ！」

「豚野郎！昨日は美春を放置して帰ってくれやがりましたねー。」

「待ちなさい！どこにへびますー！」

暴走少女…清水さんとの遭遇

よじつ早退しようー

と思つたのだが、エヴァが今日は家庭科の料理実習があると田を輝かせていて、帰るに帰れなかつた

「料理実習なんて最悪…」

とポソリとつぶやいていた木下さんに遭遇

「料理苦手なのか?」

「ツールルーシュ君か…びっくりさせないでよ」

「それは、『めんね…木下さん料理と歌はダメだからなあ』

「なつ…なんでそれを知ってるのよ…?」

「いや、だつてそんな雰囲気が?」

慌てる木下さんをからかってみた

「どんな雰囲気よ…」

「そんな?」

「そんなんつてどんなよ?…ホント、他の人には余計なコトいわない
でよね?」

「はい、畏りました。

ではお嬢様、お次のカップリングはいかが致しましょう?
明久受けのルル×明に致しますか?
ルル受けの久保×ルルに致しますか?」

「そうねえ…久保君に攻められるルルーシュ君があ…結構いいわね

……

いや、木下さん?自爆しておしゃこますよ~

「はっ!な、なんでそれをー?」

今リアクション取るんかい!

この子も結構バカな部分あると感づんだ、わざと……

「気にしないでいいんじゃないかな?

もつと自分らしくいきなよ、木下さんカワイイんだからさ

「あ、あ?...?」

「うんうん...「見つけましたわ!」とこいつとで失礼するねー。」

清水さんに見つかってしまった

廊下でおいかつっこいである

廊下を走るのは危ないから、良い子はまねしないでね

逃走劇の末、『天井にへばつつく』といつ技を覚えた

ちょっと指を天井にめりこませなきゃいけないけど……修理する業者さんホントすみませんね

なんとか、料理実習を行う教室まで逃げてこれた

何や、パスタを作るらしい

つてちよつと待て、パスタを作るって料理じゃなくて麺の精製なの！？

とにかく精製機があるついでひむひむよ？

料理じやねえじやん

結論、Fクラスだけではなく文理学園事態がちょっとおかしかった

翌日 作ったパスタは、おうちに持ち帰りそれぞれ美味しいいただきました

何事もなく、まったりとした学園生活を送っていた

そう、昼休みに入る前までは……

お昼休み開始のチャイムがなる

すると、1人の少女がAクラスに訪ねてきた

「あの、ランペルージ君を呼んでいただけますか?」

その少女を対応した少女が、俺を呼ぶ

そこへ行くと立っていたのは姫路さんであった

「えっと、何かな？」

「あのこれ、先日の前哨戦で負けた時に、Fクラスの人たちに御菓子を作れと言われたので、作って持ってきたんですけど…皆、お腹いっぱいになつて寝ちゃつたみたいで、余っちゃったので食べてくれませんか？」

「う…うなるとね。

いいかい姫路さん、それはお腹いっぱいになつて寝たんじゃなくて生死をとまよつてこいるだけなのだよ？

寝ているところよつ、倒れたという表現の方が正しいと俺は思う

つて言いたいけど、Aクラスの人達の田もある中で言つのはかわい
そうだな

「あ、ありがと、おもてなし。」

「あ、ありがとうござます。」

袋を一つ俺の手に乗せて、わいつく姫路さん

なんだろう、何故か悪魔に見えるよ……

手に乗つた袋の中身は、俺の好物のクッキー

く、く、クッキーを愚弄するなんて！…あのデカ乳女ア！…

と怒鳴つてやりたいが、俺が蒔いた種だ

今日は許してやるつ

「ルルの好物のクッキーかよかつたな」

姫路の料理の危険度を知らないエヴァは、笑顔でそう言つ

「エヴァ、これはね…兵器なんだよ」

「兵器？」

「そつ…コメディー補正が強い人間を除く、普通の人間が食べたら死んでしまうモノなんだよ」

「う、嘘だろ？？」

「エヴァ… そんな疑うなんて… ひどいよ… ホントなんだよー！」のく
い k・・・・・

「エヴァ Sire」

ルルが、変な巨乳女に御菓子を貰っていた

中身を覗くとクッキーであった

「ルルの好物のクッキーかよかつたな」

「ここでは至つて普通の会話だったのだが、ルルの表情がどうみても
おかしい

「エヴァ、これはね… 兵器なんだよ」
何を言つてゐるんだ？

「兵器？」

「そう…コメディー補正が強い人間を除く、普通の人間が食べたら死んでしまうモノなんだよ」

表情は、本気だ…

だが、食べ物だらう？腐っている様子は見受けられないし

どんなにマズイといつても、クッキーなら焼き加減をミスったとか、塩の分量間違えたとか

その程度であるうつ、兵器なんて大げさな

「う、嘘だろう？」

ジーとルルと共にそのクッキーを見つめる

試しに一枚手に取り…ルルの口へ放り込む

た

た

倒れたあ！？

ルルがクッキー一枚で倒れるだと！？ホントに兵器だつたのか・・・

「ルル？ る、ルル？ おーい、起きるー。」

声をかけても返事がなく、小刻みに震えているだけである

かなりヤバいんじゃないのか？

数十秒後、激しく体が震えたと思つたらルルが目を覚ました

「一体何が、どうなつて……」「

「ルル、ごめん、私が間違つていた！」

「もしかして、クッキー口に放り込んだの？」

「う、うん……」

「まあ知らなかつたんだから仕方がない……次はこんなことしちゃダメだよ？」「

やつ言つて優しく頭を撫でてくれるルル

「ところで、ルル……何が入つているんだ？」

「化学薬品だね」

「は・・・・・・・？」

あの女、そんなものをルルに食べさせようとへ

いや、その前に料理を愚弄しているな？

よし、次そんなモノをルルに食べさせようとしたら死刑だ！死刑に
処す！

そつ心に決めたエヴァ であった

エヴァ Side END

第7話～クッキーは好物だけど、これはクッキーじゃない…兵器だ…（後書き）

K「『』覧いただきありがとうございます…」

ルル「胃が痛い…」

K「よくあることですね！」

では、例の「ナーーー」とましゃー！」

ルル「流されたのはむかつくけど…例の「ナーーーなんだ？」

K「PVアクセス19800突破 ユニークアクセス2300突破
お気に入り登録41件！

ありがとうございます！」というか、今日は昨日の倍ほどの方に
見ていただいている感じ…何がおきているんだろうと、ガクブル
しております！」

ルル「ガクブルしております…ってテンション高く書つのはどうか
と思つぞ」

K「それからですね、評価のほうもいただきました！

現在、文章・ストーリーともに平均が5pt

合計値ですと、文章が23pt ストーリーが25pt

と、意外と好評価をいただいております！」

ルル「いや、まあ文章はイマイチなんだつよ、現実見ろwww

K「ルル酷い！酷いよ！嬉しくて舞い上がつて何が悪い！」

ルル「はいはい」

K「それで、この小説あげはじめてそろそろ一週間かな？総合評価で130ptもいただいておつます！やつたね」

ルル「嬉しいのはわかつたから落ち着け」

K「うれしくてさー寝る前ぐらじにあげようと思つていた第7話、いますぐアップしようとなつたわけですよ」

ルル「そつなのですか」

K「ハイテンションいえええええええええ！」

ルル「はあ・・・（この作者ホント、危ないって…）これでホントにシラフかよ？」

K「シラフだよ…酒なんて飲んでないよ！」

ルル「感情文にツッコミられてんじゃねええええ！」

また次回お楽しみに

アンケート募集中

この作品の正式タイトルの候補を募集しております
感想などもお待ちしております！

「やひせこやひせこやひせこ… やひせやひせやひせ… ヤバ
ズボクヤズボクバサバサああああああ」

ルル「ちょ、落ち着け！」

K 「落ち着いてられない……」

「何があつたか説明してくれ、夜中にたたき起こされて機嫌は底辺なんだ」

なんと
・
・
・

2011年12月23日午前0時すぎ頃に、ふと田中ランニング(にじファン)をみたのです

!

そしたらどうよ？

追記：同日午前5時じり確認したら50位になつてたあああああ
!!!!

ルル「だからテンション高いのね
っていうか、お前、「」使って発言しろよ…」

K「あ、ごめんごめん
びっくりしちゃつてさ……」

ルル「これで、アクセス数とかお気に入り件数とか伸びてくれると
嬉しいね」

K「おうよーって伸びてくれたから、ランキングにのつているんだ
けども…」

ルル「ああ、そうか…」

K「一週間でここまでたくさんの方に、見てもらえて
評価してもらえて、お気に入り登録していただけて

最高のクリスマスプレゼントだよー
ぼっちの俺は誰からももらえないからねー」

ルル「最後に悲しい発言入れんなや~~~」

K「それで、話は変わらぬのですが…特別編といふことで…」

ルル「ことで?」

K「ルルーシュ in Magister Negi Magi編の一部をですね…」

ルル「え?恥ずかしいから止めない?」

K「ふーふー

ルル「ブーイングされてもねえ…」

K「だつて感想送ってくれた人の中にも、ネギまの世界にいる嫁はどうしているかとか、誰が嫁なのか気になるつて発言もあつたんだよー!」

ルル「ああ、そう…」

K「ところどで嫁達のお話ではないのですが…よければ『覗くださー!』」

俺は……何度も転生をしたのだろうか……

電波神のワシとこわジジイに、半ば無理やつ……

『いや、ワシ、ワシってこいつ前じやないからの一…』

ほり、また…

『本当にこの小童は人のいう事を聞かんの？…』

それで、次はどうなんだ？こつまどこの空間に縛りつけられる？

『わかつておるわい！次は魔法先生ネギマーとこわ世界じや』

あーネギを栽培し、ネギ料理を駆使して生活しつつ
その裏では魔法を使い女の子達を辱めるエロゲーだけ？

『う、違ひー小童！お主なんとを言つておつたら、命狙われてしまつぞーー？』

あー確かに…ファンの方に叩かれ、捻られ、引寄せられ、焼かれて、食べられそうな気がする

『はあ…ね井とお話していくとソシは身がもたる』

じゃあねーと話して進めるよ

『能力は…前回一部引継ぎと、これでええの仕事内容は、修学旅行の時、近衛木乃香に魔法がバレるのを阻止する』
あのタイミングは、ワシ的にあまり好まんのじゃ…じゃなかつた、よくなーのじー。』

思いつきつい個別の感情が表に出す気てるよ…

このクソ電波神のワジジをよおへ

そんなんだから、妻に恋想つかさー・・・・・

俺の意識はブラックアウトした

さて、ここは番外編：細かい話はすつ飛びやつ。

現在の俺、紅き翼所属：ゼクトに魔法の師をしてもらっていたら、
いつの間にかメンバー扱いされていた

現在の俺、紅き翼と共に、青山詠春の家に… アリカさんの死刑で
起きた事のあとですね

現在の俺、京都で数年のんびり… 木乃香がやけになついてきた

現在の俺、麻帆良を無断で散策… エヴァーと遭遇

「お、家発見!」

これは、もう突入するしかないよな~お腹すいたし…

「ン」

「誰だ?」

「突撃!」飯を出してくれないと、餓死して死んでしまうので、早
急に「ご飯をめぐんでください!」という個人的企画であつた!家を回
つております!」

「帰れ!」

ドアを開けることなく、拒否ですか…

「ついでに泊まるといふもお願いしますね」

「ちょっと、待て、お前なんで勝手に家に入ってきたの?」

「ああ、お邪魔しますー。お世話をになりますー。」

すみませんね、勝手にお邪魔して
礼儀が大切ですよね…

「いや、勝手に話しが進めるなー」とこりつけて行け!」

「まあ待て、エヴァンジョン・A・K・マクダウル

「私の事を知つて、家に侵入してくるとは、いい度胸だな?」

「いい度胸だと?」

俺はエヴァを睨む

「…なんだ?」

「いや、聞き取れなかつたんだ」

ズテツと派手」にかかるH'ワア

いや、H'ワア ちやんよし とのコンサート参加でやねと申すが、うん

「紅茶をくだれこ」

「嫌だ」

「クッキーをくだれこ」

「嫌だ」

「」飯をくだれこ」

「嫌だ」

「血を飲みますか?」

「嫌だ…つて待て、血を飲みますか?だと?ああ、飲ませてもいいおつ
お前が干からぎるまで飲んでやる!」

「じゃあ変わりに紅茶ちょうどいい」

「くつ・・・・一杯だけだぞ」

最近飲んでなかつたのかな?血・・・

血と呑き換えたに紅茶をもらえた！

「それでさ、こつまで血を飲んでこらつもつへ。」

「知らんー。」

「うーうーと首筋に噛み付いたまま離れないエヴァである

「それより、何故これだけ吸っているのに、平氣な顔をしてこるんだ！？」

「あ、そう言えば？不死だからかなあ？」

「不老不死だからじゃないかな？」

「まつ…お前もか」

「エヴァちゃん、とりあえず」飯ひつじだい

「ちやん付けで呼ぶなーまつたく…まあお腹いっぱい血を飲ませてもうらえたからな、まあいい…カツラーメンでいいな？」

それ、コンビニで普通に買えるじやん

「手料理がいいかな？」

「は？ 私がそんなことできるわけないだろ？」「…」

いや、できるわけないだろ？ て自信持つて言われててもね

「えーエヴァの手料理じゃなきゃ意味ないじゃん」

「と、いうより、お前親しそうにエヴァなんて人を呼ぶな！ 第一お前の名前すら知らないんだぞ？」「…」

「ルルーシュ・ト・ランペルージ」

俺は、この生より、この名前にした
見た目があのルルーシュさんに変わったからね

「……ッ！ お前があのサウザンドマスターと一緒に戦っていた紅き
翼の一人なのか！？」

「そうだね」

「こんな奴が… おい、お前、あのナギがかけた呪いを、変わりに解
け！」

3年の約束だったのに、もう5年だぞ？
ずっとこの麻帆良の地に縛りつけられている…」

「報酬は？ だつて、ナギとは確かに戦友ではあるけど、あいつがや
つたことの尻拭いなんてやだよ…」

「せう…ならば、何を対価に求める?」

対価・・・対価・・・

うーん…

「じやあ俺に魔法の師をしてくれよ

「は? 私は悪の魔法使いだぞ? 英雄がそれに歸をひつとこうのか?」

「どひでもこいよ、そひゆひの…俺は、やるべきことがある、それ以外は俺のやりたいひみち

それが、あのジジイの都合に合わせて転生なんてさせられてる、俺への報酬だ

「わうか…まあこいだらう、教えられる事は教えてやる

「そんなことよつ、じい飯…

ドテックとまたこなたエヴァであった

モウHガアとの出会いは、散歩中に俺のお腹の機嫌で起きたことであつた…

【END】

K「あい、いかがでしたでしょうか?」

ルル「Hガアとの出会い編りて感じだよな?」

K「やうやく」

ルル「よかつたと思つよ…うん」

K「また機会があればね、他のことも書けたらいいなって思つてます」

ルル「そうだね」

K 「では、今後もこの小説をよろしくお願ひします！

よければ、お気に入り登録していただいて

よければ、評価などしていただいて

よければ、感想等をしていただければと思ひます！

見ていただけるだけでも、充分嬉しいし、あり難い話しながら
すけどね

どうぞ、よろしくお願ひいたします！

ルル「では、また次回をお楽しみに！」

K「『といいたい』ところですが…」

ルル「どうした？」

K「『』の作品はあくまで、バカテスのお話しですから、記念回が、ネギまとこうのは……と思いまして！バカテスの番外編です、どうぞ！」

【超特別番外編～美春が大好きなんだよB Yルルーシュ？】

君と出会えたことに、本当は凄く感謝してる

本当は凄く嬉しかった、本当は凄く君を見ていた

美春・・・

初めての出会い、それは突然で君のことは無関心だったけど・・・

二度目の出会い、夕田でカラフルな遊具たちもオレンジに染まった
公園に

君を見つけた

わざわざまで走っていたのか、荒い息を深呼吸して抑える君

そんな君に見つかった俺は…照れ隠しで、冷たくしちゃうかもしけ
ないけど…

でも実は君を優しく抱きしめたいんだよ

学校で、俺を追いかける君

君が俺を追いかけて、走る姿はとても活き活きとしている僕がして

その姿が美しく見えるんだよ

君が向ける笑顔は、俺じゃなく

『お姉さま』だけビ…

その笑顔は、俺に自然な笑みを浮かべさせてくれる

その笑顔が・・・君が笑顔でいることが、俺の幸せなんだよ？

そう

笑つて

はしゃいでる

美春が…

「大好きなんだよ

「つてこれはなんですか！？氣持ち悪いです！やめなさい！
いきますぐ破棄しなさい！！そんな目で美春を見ていたですか？豚
野郎！」

「おい、土屋…誰だこんな俺の声を合成した奴は？」

AクラスやFクラスの面々、それから何故かDクラスの清水美春が
集結している

「……工藤」

「どうか、愛子が犯人か

「ええ？ ちょっとムツツリーーー君？ ボクは声の素材を録音しただけで、合成したのはムツツリーーー君でしょ！？」

ん？ 共同作か？

「……わかった、認めよう俺が合成したが、台本を書いたのは、雄二だ」

よし、ゴジラゴロス

「ちよ、ちよっと待て！ 僕はこんなに細かく書いてはいない！ それに誰の声でやるとは聞いてなかつたんだ… ただ面白やうだから、台本を書いただけで……」

まあいい、とりあえずゴロス

「ボクだけじゃなくて、優子も録音協力してくれたよね？」

「ちよ、愛子！？それは言わない約束じや…」

「それにエヴァちゃんも」

エヴァもだと……終わった

俺に味方はいないのか

「ねえ、僕ここんとこしてるなんて知らなかつたのに、なんでここに呼ばれたの？」

「明久、それは全ての罪をお前にかぶせるつもりだったからだ」

坂本、ホントに吉井には鬼だな

「どうせ作るなら、お姉さまの声で作ってください…」

「嫌よー!？」

「そんなこと言はずにい～お姉さまあ～」

相変わらずだな、この2人は

「ルル、とりあえず帰るか…」これ以上ここに居たら余計なことに巻き込まれかねない

「やうだな…」

俺とエヴァは、そそくせとその場から逃走し無事家路につくのであつた

【END】

K 「いかかでしたか?..」

ルル「凄く嫌ないたずらしてくれるねえ…」

K 「俺、美春大好きなの」

ルル「あ、そつ……まあ確かにカワイイよね」

K 「さて、これにて本当に特別編終了です!
『』覧いただいた方ありがとうございました!」

今後もよろしくお願ひします（ノ、＊）

特別番外編「日刊ランキング58位記念」（後書き）

PVアクセス：22652

ユニークアクセス：2590

お気に入り登録件数：46

文章評価 平均：5 pt 合計：23 pt

ストーリー評価 平均：5 pt 合計：25 pt

12月23日午前2時～20時点でのデータです

大変多くの皆様に、「愛読いただき
お気に入り登録などしていただき…

ありがとうございます

今後も自分が書いた作品を、読んでいただけるよう頑張っていきたい
と思います
よろしくお願ひいたします

ルル「うっさい！一寝てるんだから静かにしろ！」「

「無理つす無理つす

ルル「今度は何があつた？」

K-58位から50位にあがつた

ルル
一
（
、
、
）・*
；
、
ブツ
一

K 「昨日一 田だけでPVアクセス1万越えてた」

ルルー(。。)・☆;:;:;
フツ

K-「本田の0時台だけで、100のユニークアクセスだつた…」

ルルヽ(。。)・*;ヽ、ブツヽ

K「トータルのPVアクセス2万5千　ユニークアクセス3千　目前まできてるし…お気に入り件数も47件になってるし…感想いただけたし…」

ルル「なんか、想定外の事だらけだね」

K「テンションあがりすぎて寝れない」

ルル「子供かつ！」

K「えいじょうか…」

ルル「どうしようつて…」の皆さんに対する感謝をまたぶつければいいんじゅないの？」「

K「ありがとうございます…！…ありがとうございます…ホント…なんか嬉しうぎて眠れんやろが…！…」の野郎…」

ルル「いや…！…テンションあがりすぎで、ひざキャラになるのやめてくれ」

K「ゴメンヨ…」

ルル「それで今回はびっくりあるんだい？」

K「そうですね…バカテス番外編を」

ルル「おうー」

「ヒーリング、ヒーリング覗くださー」

「愛子……」

「なに? ルルーシュ君?」

ルルーシュと愛子は、学校の屋上で2人並んで座っていた
ルルーシュは方膝を立てて空を見上げている
愛子は、そんなルルーシュを見つめている

「俺を……」の学校に来て、ずっとと思つたことがあるんだ」「

「なになに?」

「愛子のことなんださぞ……」

「ん? ボク?」

ルルーシュが愛子とこうな面前とともに、愛子を見つめる

その表情は、どこか柔らかく温かいモノである

愛子はそんなルルーシュに、少しばかりドキッとした、平然を装い聞いた

「やうへ、愛子だ…」

「ボクの事で何か気になる」とドモアツた?」

「俺の気分が落ちてることもわ、支えがほしい時も、遠く愛子には助けられた…」

それを今ひしひしと実感して…思ひ返すと、愛子の一言一言、愛子の笑顔…

愛子のひとばかり浮かんでくる

そして、いつの間にか、愛子を気にかけている自分がいてや
愛子の支えになりたい自分が居てさ
愛子をぎゅっと抱きしめたい自分が居るんだ」

「く…うん? ん?」

ルルーシュの想定外の言葉に、つまづき対応できない愛子の頬は、少しづかり紅く染まっている

「愛子…お前の事が好きなんだ、お前を抱きしめたい、抱きしめて
いたい!」

愛子とずつと笑つて過ごしたい…わざと近い距離で…わざと愛子
を感じていた

俺と付き合つてくれないかな?」

普段のルルーシュとは思えない真剣な本気の告白……愛子は動搖しまくり、言葉を失っていた

驚いた、それもあつただろ？が、それよりも、嬉しさの方が勝つていた

愛子は惚れていた……ルルーシュが見せる様々な一面に、興味を抱き、
気になり……

思えば、何かとルルーシュを考えていた

ルルーシュが見せる笑顔を、もつと私に向けて欲しい
いつからかそう思つようになつていた

「ルルーシュ君……あ、あのね……ボクでよかつたら、付き合つてほし
い……// / / / /」

ルルーシュは不思議に思つ、こちらから付き合つてくれと言つたのに

付き合つて欲しいと返されるなんて……

でも、そんな愛子が可愛く、いとおしゃく思えた

気づけばルルーシュは愛子を抱きしめていた

「愛子、大好きだ」

「ボクも、大好きだよ…／／」

抱きしめあつた、ただ抱きしめあつた…夕日によつて辺りが暖かい、
オレンジ色に染まるまで…

「つていつ、台本でどうかしら?」

優子がそつ脱に趣図を伝える
ここはFクラスの一角である

「……映像合成は時間がかかるが、頑張る」

康太はやる気マンマンのようだ

「ちょっと待つて！ルルーシュ君をからかう為だけに、こんな映像作品を作る気なの？」

愛子が半分呆れつつ聞く

「大丈夫だ、今度はヒロイン役として、工藤本人が協力してくれたら、もっと上手く行く」

雄一は、かなり真剣な表情で愛子に大丈夫だと言った

「…ルルーシュ役は？」

翔子が問う

「秀吉なんかいいんじゃないかな？声を別に用意するんじゃなくて、秀吉に演技してもらえば」

明久が、珍しくまともなことを言つた

「そりじゃの…それでワシの位置にルルーシュの映像を合成させれば、カンペキだと思うの」

秀吉は頭で何か想像しつつ、頷きながら納得した

「あのー、機材とかはどうするんですか？」

瑞希がそう言つと一人が反応した

「……俺に用意できるものは用意する」

「…必要な物があれば言つて」

康太と翔子である

この2人がいるなら、そういう機材を用意できるであろう

「それじゃあ決定だ、今度こそアイツを、とにかくからかう為のモノを作るんだ！」
木下姉、台本はまかせたぞ」

雄一はそう力強く宣言する

「おい、お前達、大声で会議してるのはいいが
その本人が居ることにいい加減気づけ」

言葉が発信された方を一斉に皆が振り向く

呆れた表情のルルーシュが立っていた

「い、いや、これはだな…そ…すみませんでしたっ…」

最初言い訳をしようとした雄二であったが

ルルーシュの表情が呆れ顔から、完全な満面の作り笑顔に変わったため、咄嗟に謝るという判断がくだされたのである

続けて全員謝つたが…

その日、ルルーシュの奇妙なまでの、作られた満面の笑みは消えることがなかつた

特別番外編「日刊ランキンング50位&その他諸々感謝記念」（後書き）

K 「いかがでしたでしょうか！？」

ルル「短編！」

K 「感想がそれかい……」

ルル「つていうか、朝だよ？もつ寝よいつよ……」

K 「そう言えば、徐々に眠くなつてきた」

ルル「夜型人間なのね」

K 「そうかもね」

ルル「では、この辺でいいかな？」

K 「うん。ではでは、改めて…この作品を読んでくださっている方、評価していくべきの方、諸々の感謝の意を捧げます！ありがとうございます。」

第8話～清涼祭編スタート～活躍するのせっぷルル～（笑）～（前書き）

K「いんばんわん」

ルル「こんばんは」

K「さて、ランディングに入り、より多くの方に見ていただけてあります」

ルル「そうだね」

K「毎時30人以上のニーークアクセスだよ？」

ルル「すごいなあ」

K「びっくりだよねえ…ってあまり前書きを長くしちゃうと読んでくれる人減りそうだから本編いきましょう

では、清涼祭編スタートです！」

本編どうぞ

第8話～清涼祭編スタート～活躍するのかわくわく～（笑）～

Aクラス対Fクラスの試合戦争終了から、四季が流れた

そしてまた、新学年が始まる…

ちよつと、行きあがけ行きあがけー。
巻き戻しお願いしまーす！

改めて、学園生活になれ初め、クラスメイト達とも徐々に仲良くな
りつつある

互いが名前を呼び捨てる程度には、一部のメンバーとは俺もエヴァも仲良くなっている

そんな時である、高橋女史が朝のホームルームで、爆弾を落としてくれた

「…………では、清涼祭の実行委員を決め、クラスでの出し物を決めてください」

清涼祭…の存在わすれつえつあああああああああああああ…！…！

よし、今すぐ入院しよう

祭り事は、参加することなく

遠くから傍観している

それが俺の祭りの楽しみ方だ！

準備もしたくない！参加もしたくない！

見てるだけがいい！

「…実行委員をやつてくれる人居る？」

最初は翔子が仕切ってくれるようだ

俺は、抜け出さうとしたところを、翔子に見つかり捕獲された
とても残念だ…

「誰もいなか…じゃあ俺がやるよ」

モブが頑張ってくれるらしい

ああ、モブ扱いは可愛そつだな、彼の名前は吉都瀧

凄く珍しい名前だなあ

吉都といつ苗字の方が実際居るかはしりません… B Y 作者

なんか不確定要素たっぷりのお名前だよね

やつとやつー

漢字表記だと結構力ツコいいよね吉都瀧

彼はAクラスでも下から成績を見たほうが早い部類ではあるが

至って真面目で、飛びぬけた才能があるとするなら

飲食業の才だらつ

彼がバイトしているレストランで、エヴァとたまたま寄ったことが
あるのだが

ホスピタリティを持つて仕事をこなしている彼は、とても素晴らしい

ホールが基本だが時にはキッチン業務もこなすそだ

そんな吉都瀧君が清涼祭の実行委員をやつてくれるこになつた

「じゃあ、クラスでやる出し物は何がいいか、候補をいくつか挙げてくれ」

吉都君の言葉に、次々と候補が挙がる

メイド喫茶

執事喫茶

普通の喫茶店

つて待て、何故喫茶店しかあがらない？

確かに、食事をしたい人は食事ができるし

少し休憩したい人は、ティータイムを取れるし

手堅く稼げるような気もするんだが

「じゃあ、三つの中でも、どれがいいか多数決を取ろう」

結果：普通の喫茶店、執事喫茶、0票
メイド喫茶全票

それはそうだと思つ

Aクラスって学年的にみて、カワイイ子多いし

そうなりますよね

とこいつことで、メイド喫茶に決まつたAクラス

メイド服は霧島さん経由で、借りてこられるから問題はないそ�だ

内装は、Aクラスの教室なら特に問題はないな

必然的に女子は基本的にホールとなる

男子はキッチンか…

「ちょっと待て！何故私までホールなんだ！キッチンに入るぞ！」

「エヴァーか・・・言つと思ったよ、人前でメイド服着て働くなら、料理のほうがいいわな…」

「えー、エヴァーちゃんカワイイんだからさ、ボクと一緒にホールで
ようよ」

「嫌だ」

愛子が声をかけるも、即否定

「エヴァー…うちのキッチンじゃないんだから、高さ的問題もあるし

…あれだぞ？

「…」

「それに俺はエヴァのメイド服姿、みたいなーって」

「そ、それなら仕方がない…って騙されないぞルル！お前家でも私に色々着せてこるだろ？…わざわざここで着る必要があるか！」

後一押しつてとにかくされたか…

「ルルーシュの説得でもダメなのね…それじゃあ仕方ないわ、エヴァちゃんはキッチンに入つてもらいましょう。料理も得意みたいだし」

優子がそうエヴァに助け舟を出したことで、エヴァはホールに出ないで済んだ

これにより女子も数名キッチンに入ることになった

やはりどうしても着るのが嫌だという子は何人かいるものだな

「料理が全く出来ない男子は、どうしたらいいこと思つ？」

ちょっとまで、優子

何故、吉都君じゃなく俺に聞く？

「んーフォロースタッフでいいんじゃないかな？」

「フォロースタッフ？」

「メイド喫茶だから、出来ればホールスタッフに男は居ないほうがいいけど…

テーブルバッシング、セッティングぐらいなら構わないだろ？…それとキッチンフォローとの行き来で、キッチンへの食材搬入とかも出てくるだろ？から

それと、全統括責任者として男子を一人、ホール統括は女子に一人、キッチンの責任者も一人…入れ替えの時間ごとに居たほうがいいな」

「なるほどね」

吉都君が俺の話を聞いて、うんうんと頷いていた

「どうだろうか？バッシング＆セッティングを男性スタッフがやつっていても、メインである女性スタッフの接客がその分多くなされいると思えば、そのぐらいなら大丈夫だと思うのだが？」

「そうね…ただ、メイドに対し並んでいておかしくない格好じゃな

「… いと大変かもね」

「執事服とかつて」とか? 「…

「そうそう」

「… それも必要なら用意する」

翔子さんや… なんでも用意するって好き勝手言つて、親に怒られないのか?

「まあ、 そうね… あとはシフトの調整次第でつてことね」

確かに

「吉都君、 責任者関連はどうじよづか?」

俺が吉都君に問う

「そうだね… 2人ぐらいがいいよね? 午前、 午後分けるとかで

「そうだな」

「それじゃあ、 吉都君とルルーシュがやてくれればいいじゃない? 全統括責任者は」

「はあ… キッチンの方は、エヴァと利光でいいか？」

「僕は構わないよ」

「私も別にいいが…」

「ホールは翔子と優子でいいなそれと一応各代理責任者として、佐藤さんと愛子で」

これを元にシフトが組まれていく

当口になれば多少の誤差は生まれるだろうが

密足の問題とかもあるしな

メニュー内容やその他細かい部分も、着々と決まり準備が着々と進んでいく

誰が決めたか知らないが

メイド喫茶 ご主人様とお呼びつ！

に店名が決まっていた

ホント、これ名づけたの誰だよ？

第8話～清涼祭編スタート～活躍するのは彼らだ～（笑）～（後書き）

K「『』覧いただきありがとうございます！」

ルル「二つ質問いいか？」

K「なんでしょう？」

ルル「いつもと比べて短い理由とちょっと荒々しい理由」

K「短いのは…長くなりすぎた話を、分割しちゃったせいです
荒々しいのは…ホントすみません…前にも話したとおり原作1、
2巻を借りパクされた状態でして、記憶が曖昧で…」

ルル「なるほどね…」

K「許してクダサイ……ホントに……清涼祭編が荒い出来上がりになってしまっては、ご了承ください…・・・・」

ルル「さてと、そして報告することは？」

K「そうですね…先ほど見たらランキンぐ57位だったかな?…とりあえず維持できるみたいですよ!…それとお気に入り登録件数が65件に伸びているということですかね」

ルル「65人もこの作品に注目してるのは確かなんだね」

K「ええ、読み続けてもいいと思ってくれた方は是非、お気に入り登録していくださればいいなあって思っています!…よろしくです(。・ω・)

。) ノ

アンケート募集中

この作品は現在仮タイトルですが、年内に正式タイトルを定めたい
と思っております

そこで、正式タイトルの候補を募集しております
よろしくお願いします！

その他感想等もお待ちしております

注意・茶番成分が少々含まれます

妹？「お兄様！これを今すぐ買うのです！…！」

ルル「何を？」

妹？「『バカとテストと召喚獣に』のDVDですわ！」

ルル「この間も買わなかつたか？」

妹？「甘いですわ！一ヶ月に一本程度のペースで新作が販売なんて当たり前なのです！」

ルル「そんなにこれ、面白いのか？」

妹？「ええ、吉井明久という豚野郎が、お姉様をたぶらかそうとするシーンは許せませんけど、基本的に面白いのです！」

ルル「えっと、妹の美春の口から、豚野郎なんて単語が出てくるなんて、何かの聞き間違えだと思つけど…そんなに面白いのか！帰つたら俺にも見せてくれよ」

妹？（美春）「嫌です！見たかつたら自分で買いなさい、一本でも多く売り上げに貢献するのです！」

ルル「はあ……？」

妹？（美春）「いいですか？」とにかく、原作小説、コミック、DVD、グッズなんでもかんでも買うのです！買わないような豚野郎は、美春が直々に制裁を加えて差し上げますわ！！」

ルル「俺と俺の嫁エヴァと召喚獣だと？」（仮タイトル）クリスマス特別版
！～俺と文字とゲストだと？～
始まります！」

ルル「はい、ということでクリスマスとことどですね…Kは『ぼつちな俺は拗ねて不貞寝してやる！』と言つて消えたので、今はルルーシュ・T・ランペルージが進行を務めさせていただきます。ご覧いただいて居る方、いらっしゃいませー

まず一人目のゲストは、最初の茶番に挑んでくれた、清水美春さんです

美春「別に、この豚野郎に呼ばれたから、といつわけでもなく…低クオリティの文章でしか作品をかけない豚野郎に呼ばれた、といつわけでもなく…

今、画面の前にいる、全世界のお姉様達に、美春を愛してもらうために来ただけです。

茶番は……ムツツリー二商会から、お姉様の写真がもらえるからやつただけに過ぎませんわ

ルル「ええ…何よりも、何故この企画の事をこの人に話したか、作者の気が知れませんけどね

むしろ早く家に帰つて、人外パパさんとクリスマスの街中を追いかけっこでもしててください、って感じですね。」

美春「そ、それはもう既に、済ませてありますわ…」

ルル「ああ、やつたあとなのね　ｗｗ
ところで清水さん…」いつしてこの作品が始まつて一週間となりますが、何か思うことなどはありますか?」

美春「そりですわ…言いたかつた事がありますの」

ルル「ほひっ..」

美春「美春とお姉様の絡みが出てきた記憶がないのですが?」

ルル「えーっと… そうでしたかね?」

美春「ええ、もし仮にあつたとしても…足りませんわ…1%もお姉様に対する愛を表現できていませんわね」

ルル「ああ、そりですか…えつと他には?」

美春「美春の出番が思つていたよりも少ないですわー原作キャラとして初登場だったのに…こっぱこ出させてもうれしいと思つていたのですが……」

ルル「そういえば、確かに清水さんは、『第0・5話』の時点で出てますよね……でも一度目の登場の際には、俺との単独回でしたしかなり優遇されていると思うのですが。」

美春「そつこえればそういうのですわね……」

ルル「ええ、こいつして何の意図があつてか、作者に番外編でも真っ先に呼ばれていますし……今後登場回数増えるんじゃないかな?って俺は思いますよ?」

美春「そ、それなら美春としては嬉しいかもしませんわね……お姉様とイチャイチャできることがあるかもしれませんし……」

ルル「まあ、そういう事で、今後活躍できる可能性は充分ある……といつことで、コーナーの方にこきましうがまずは最初のコーナーは、皆様からいただいた、お手紙、ハガキ、メールのコーナーです」

『美春、ルルーシュ、こんばんは』

ルル「はい、こんばんわー」

美春「こんばんは」

『やむい日が続きますね』

ルル「そうですね、とても寒いです。女の子がスカート穿いているのを見て、こっちが余計に寒く感じてしまします」

美春「ホント、寒いですわね…こんな時は、お姉様とベットの中で暖めあえたら、とても温かいのですが…」

『ルルーシュがスベるという意味でのやむいです』

ルル「ちょっと待て、なんだその俺がスベるから寒いみたいな…その前に俺はスベる以前に普段からボケをかましているつもりもなければ、笑いを誘うように意図的な喋り方をしているつもりもないのだが…？」

美春「豚野郎の存在そのものがボケで、いつでもスベっていますわね…といつことは年中辺りを凍えさせているといつこと…迷惑な男ですわね」

ルル「存在そのものがボケは言はずぎだ…結構まともなキャラだらうづが！？」

美春「はーはー、やつと続きを読むやい豚野郎」

『ウチは今日、妹へのプレゼントを買いに行つてきました
ちなみに買ったのは、抱き枕変わりにできそつな、ぬいぐるみで
す』

ルル「ぬいぐるみですか、一人で寝るには寒いですもんね～ぬいぐ
るみがあつたら暖かそうだ」

美春「そうですね…あなたのような豚野郎が、ぬいぐるみを抱き
しめながら寝ていたら気持ち悪いの一言に死きますけど」

ルル「そ、そうかもね・・・」

『2人は、誰かにクリスマスプレゼントを買いましたか?』

ルル「俺はエヴァに、ゴスロリ系の洋服を何着か買いましたけど…
清水さんは?」

美春「私は特に何も…お姉様には美春自信を、美春の全てをプレゼ
ントとして捧げますわ!」

ルル「いや、言つたけど……それは聞いてねえよwww」

『PN・趣味は吉井明久を殴る』

ルル「…せんから頂きました」

美春「そ、それは、お姉様ですわよね? もうどうですわー。」

ルル「うん、それしかいないだろ? それより次のコーナー行くよ

続いてのコーナーは……」

【超特別番外編～ルルーシュと美春ヒートークリスマスver～】

12月24日…クリスマスイブ

カッブル達が町中を埋め尽くし

ホテルは満室で埋め尽くされ

オシャレなバーやレストランは、予約でほぼ席が埋まる日

家では家族団欒

子供達がツリーに飾り付けをし、ケーキを食べて笑みをこぼす

そんな楽しそうな子供達の表情を見て、父は…母は…笑みをこぼす

家族が居る人は、家族つていいもんだなって再確認して、なんだか心が温かくなる日

友人と飲みに行つて、バカ騒ぎ

友人と遊びはしゃいで、バカ騒ぎ

友人と来年は彼氏、彼女作ろうなんて言つて、互いに励ましあう日

人それぞれ、どんな日になつているかわからないが…

クリスマスデートを約束した、2人の少年少女が居た

少年は、待ち合わせ場所に向かつて歩いていた

その少年は、ジーンズにブーツ、上にはYシャツとネクタイ、ジャケット…そして伊達メガネをかけていた
どんなデザインのものを身に着けているか…それそれで想像してい
ただきたい

彼には、似合っているのでは?と思われるが、どこかズレている…
足の下から上まで真っ黒なのだ…

シャツまで黒とは…・・・

に、似合っていると言えば…まあそうだろうが、クリスマスデート
で横に居るのが全身真っ黒の男性って女性的にはどうなのだろうか?

彼は髪も黒だからな、本当に真っ黒である

せめてもの救いは、彼が整った顔立ちであることだらうが

少女が待つコト20分程度…少年が現れる

そしてこれまた、伊達メガネ…

ニーソックスに、足元はフワフワとしたファーの付いたブーツ

といづか絶対寒い！

少女はショートパンツを穿き、上には至つて普通のTシャツにジーンズ生地のジャケット…結構薄着だと思われる

少女は、待ち合わせ時間より、數十分早く来てしまつていた
長々と仕度に時間をかけたが、仕度を始めたのが早かった…おかげで、余裕すぎるほど時間が余ってしまった

「ん？ もう来てたのか？ まだ10分前だぞ？」

「ルル… 来るのが遅いです！」

理不尽な怒りであることは確かだ、待ち合わせ時間より少し早く来る
その程度なら常識の範囲内といつものだろう

だから彼も10分前ぐらいにつけるように来たのである
まさか自分が到着する20分も前に来ているとは思わない

「え？ そんな早く来てたの？ ならもうと早く来たらよかつたな… 寒
かつただろ？」

ルルと呼ばれた少年、つまりルルーシュ・ランペルージは、少
女の怒りをなだめるように一声添えて、頭を撫でた

「や、そんなことじやあ、美春は許しませんわ…！」

勝手に待ち合わせ時刻の30分前に来た少女、美春よ… それは理不
尽である

ルルは待ち合わせ時刻の10分前には着たのだから、非はないだろう
「そつか… ならとりあえず、どこか温かい場所へ行こうか、美春が
風邪いたら… あ、困らないな」

ルルは寒い中自分を待つていてくれた美春に、温かい場所への移動を促がすも何故か変なことを言いつ

「なつ、美春が風邪ひいて寝込んでもいいって言いつですかー？」

もちろん、美春はその発言に、驚きと怒りをあらわにするものルルは至つて眞面目な表情で言い返す

「だつて、それなら看病するのに、学校なんか休んでずっとそばに居れるじゃん？」

美春はこのバカ発言に、呆れつつもあり、ルルなりの愛情表現に口元を緩めていた

「ほり、でも、さつあと行くよ……本当に風邪ひかれたら嫌だからね

ルルがこいつ言ったのには理由がある…

何より熱で苦しむ彼女をわざわざ見たくはないのだ、じつせ看病でそばにいれるとするなら、俺が風邪をひく方がいいと…

そんなことはどうでもいい、ルルは冷えた美春の手を取り歩きはじめる

その2人は寒さから非難するように、近場の喫茶店に入る

無論、美春のパパさんが経営している「ラ・ペデイス」なんていう
喫茶店ではない

そんなところへ、ルルが美春の手を繋いで入店したら
喫茶店のマスターから、人外な美春のパパさんに早変わりし、ルル
へ襲い掛かってくることは間違いないだろう

2人は温かい紅茶を口にしつつ、ぐだらないことや、なんでもない
よつのコトを

長々と話し始める

2人も学生…しかも同じ学校に通う、クラスは違うが試合戦争シ
ステムなどの影響で、他クラスとの交流も時折ある
話しさは必然、学校の事や友人の話しなどが多くなるのではないだろ
うか？

ある程度、見せの暖房と、温かい紅茶のお陰で温まると2人は別の

場所へ向かつた

ルルがオススメだと言つレストラン

オシャレと言つわけでもなく、至つて普通のレストラン
予約しちゃつたんだよねえと、ルルが言つので美春もそれに応じて
付いていく

入店すると、1人の少年のウェイターが対応してくれた

「いらっしゃいませ…つてルルーシュ君か
そう言えば予約にランペルージつてあつたね、君だつたのか」

「ああ。今日はゆつくつさせてもらひつよ」

ルルは何か彼にアイコンタクトを送つている

それに美春は気づかない…

美春はそんなことよりも、目の前に立つウェイターの少年を見ていた

デートの最中に、その相手ではない別の異性を見るなんて、デート相手に失礼極まりないが…どこかで見たことあるよ'つな気がする…ビリだつたかな?と思考してしまっていた

そんなまじまじと彼を見る美春に気づいたルルは、ちょっとしたイタズラをする

耳元まで顔を近づけて、やわやくよつよつと言つたのである

「美春が俺以外の男を意識するなんてあるんだね」

「ふえっ!…え、いや、ち、違つです!…そんなこと絶対ありえませんわ!美春にはルルが居ればいいんですつ」

まじまじと見ていたコトを自覚している美春は、慌てながらも店内で自爆する

「あ・・・・う・・・・・・」

美春にとつて男は、豚扱いである

ただ一人、ルルを除いて…最初はルルも豚野郎なビビ罵られていたが、今では特別な存在になつているのである

「美春、冗談だよ」

彼は同じクラスの吉都君

「吉都君ですか…珍しい名前ですわね」

彼のことをルルが紹介すると、純粧に思つたことを口に出してしま

う美春

吉都はそれに対し、苦笑いをしながら答える

「あーそりだね、よく言われるよ…」

入口で長々と雑談なんかしていたら、吉都君が店長らしき人物に軽い注意を受けていたのは余談である

その後食事を済ませた2人であつたが

「ああ、ルルーシュ君に是非食べてもらいたいデザートがあつてね、そちらの彼女にも持つてくるから待つててよ」

と吉都君はキッチンの方へ入つて行つた

「ルルは！」によく来るですか？」

「たまにかなー？」

「わうなんですか」

たいしたことない、普通の会話がいくつかされた後、吉都君がキッチンから出てきた

ケーキが乗った皿がひとつルルの前に置かれる

そして小さな細長い包みが美春の前に置かれる

「これはなんですか？」

美春は不思議そうにキョロキョロしている

ルルの前にだけ、ケーキ
美春の前には、包み

どう見てもおかしい

その包みを手に取ると、明らかにプレゼント用に包装されたものだとわかる

「ハッピーメリークリスマス…ルルーシュ君からあなたへのデザートのプレゼントです」

吉都君がそう云ふると、美春はきょとーんとルルを見つめる

「びっくりした？」

笑顔でそんなことを問うルルが、美春の目の前にいた

ルルは数日前に予約するついでに、これを頼んでいたのである

普通なういうこうサプライズ的なことをするなら、誕生日のとじあとか何かの記念日だらうなど…

ちよつとズレているコトがあるのがルルの良さなのかな?と美春は
ふつと軽く嘆ぐ

「び、びっくりしたですよ…」

派手なサプライズは、個室でもない限り、注目をあびてしまうのが、恥ずかしいが

この程度の軽いものであれば、全く気にする事はない

楽しく店員も混ぜてお話している程度に、一定の離れた席の人からは見えるだらう

ルルは、支払いを済ませ、吉都君にお礼を言い店を後にする

数十分後、ある日たまたま遭遇した公園の、ベンチに座る一人の姿
があつた

「あ、ありがと…一応、受け取っておきますわ…//」

始めてルルからもらったプレゼントであった
包みを開けることなく、両手に持つている

「ああ、あんまり遅くなると、美春のパパが探す為に町中を暴走し
兼ねないから…そろそろ帰るか」

「その前に、美春が特別に♪、プレゼントをあげます♪」

「うわー」とは慣れていないのか、何故か少し声を裏返しつつ言った

そして、持っていた鞄の中から一つの包みを取り出した

その包みはそこそこ大きい四角い箱のようであった

「お、用意してたんだ」

ルルはちょっと以外だったのか、そんなことをこいつつ
その包みを受け取る

「空けていいよね？返事は聞いてない」

と行つてルルは丁寧に包装紙をはがし始める

そんな美春はただ、無駄に包装紙を綺麗に剥がしていくなーと思いつつ、その様子を見ていた

中から出でたのは、四角い結構重みがある箱である

それを開けると出でたのは、懐中時計といつもの

「懐中時計？」

「あ、その……気に入らなかつたですか？」

少々不安そうな表情を浮かべ、美春はルルに問う

「ううん、懐中時計ね欲しかつたんだよね
携帯で時間確認するのがめんどくさくてさ、時計欲しかつたんだ
けど

腕時計するのがなんか嫌でさ……だからひょいと懐中時計ほしいな

つて思つてんだよね

誰にも懐中時計がほしいなんて言つてないのによくわかつたね？」

と笑顔でルルが言った

「ただ、その…持つても似合にさうだなつて思つただけですわ」

「そうか、スゴク嬉しいよ
たぶん貰つてなかつたら、次の空いてる田に自分で買いに行つて
たと思ひしね！」

ルルがそう笑顔で言いつつ、美春の頭を撫でる

美春は喜んでくれているルルに、自分も喜びを感じていた

「美春もあけていいですか？」

「うそ、いいよ」

美春ももうつた時から中身が気になつていた

ルルほど綺麗に包装紙を開けることが出来なかつたが…まあルルが無駄なまでに変なところで、几帳面だったといふことだ

箱を開けると、ネックレスが入っていた

そのネックレスには、リングが三つ通してあった
たぶん高校生、いや…並みの収入では買えないような価格がつくと
思われる

細工と宝石が施されており、美春は純粋に驚いていた

「うーこんなの…本当にもらつていいんです？」

「いいのいいの…ただのネックレスじゃないから」

ルルが言つたただのネックレスじゃないという言葉

どうゆう意味だらうか？

美春がその疑問をぶつけようとすると前に、ルルが説明してくれた

「その三つのリングのうち一つは、エンゲージリング…つまり婚約
指輪である

まあ今の美春には、今だ判断できるかわからないけども…一応
もひつておいて」

「は、う、け、つこん？み、美春にはそ、そんな早すぎますわ！？」

美春、心の中で叫ぶ

「やして、あとの二つは、一応マリッジ…結婚指輪ね

と言つても、結婚指輪としても扱えるよつペアリングってだけなのだけど

それに俺持つてると指輪とか、壊すか失くしそうだし勝手に二つともそれにつけられるだけだけだ

ね

けこ、け、けつ、結婚指輪…！？

美春、またも心の中で叫ぶ

当然嬉しい

だが、今まで何かあってもプレゼントなんてしてこなかつたのにも
関わらず・・・

いきなりこんなプレゼントなんて、驚きのまゝが大きい

普段決して見ることのできない、処理落ちする美春である

「まあ気楽に持つとこでよ、俺からの気持ちだけだからや」

「は、はい……あの、ルル……」

「どうした?」

「ありがとうございます……

すっごく嬉しいですっ、そしてルルを愛していますわ!」

満面の笑みで、今までになくへりこ素直に、美春は気持ちを伝えた
のであった

そして美春からルルを襲いつゝキスをしたのであった

数年後

あの公園を、手を繋いで歩く二人がいた

美春のネックレスには、エンゲージリングだけが通され首に付けられており

結婚指輪は……もちろんそれぞれの指に……

【END】

ルル「超特別編いかがでしたでしょうか？」

美春「…、こんなのを書いた男に、田の光りを拝めなによつにして
きますっ」

ルル「やめい！」

美春「…お姉様、美春は、汚されてしましましたわ…」

ルル「はあ・・・・そうですねっ！」

「…ということで、一部ガツタガツタな部分がある荒々しいもの
でしたが、作者のコメントを代弁させていただきます

『ホント、特別編とかいいつつ、荒い内容で、美春が上手く
安定せず…本当にすみません…』

「…とのことです…そりゃー急に凹凸書き始めたらそつなります
よねえ」

美春「年内に見直しを要求します…！」

ルル「はあ…では、この辺で…俺と文字とゲストだと?終了です!
ありがとうございました

ゲストは清水美春さんでした。また次回もお楽しみに！」

特別番外編／クリスマスSP 僕と文子ヒゲストだよ～ & 超特別番外編／ルリ

本日は、非常に空気が冷えてありますね
こんな日は「タジでぬくぬくしていたいです

そういうえば今のところランキングの50位台を上がり下がりしております

評価してくださった方も居たようで、わざわざありがとうございます

またお気に入り登録も81件に増えしております…嬉しい限りです

それからPVアクセス4万 ユニークアクセス4100を突破いたしました

凄いですね…ランキングに乗つてから一気に増えました
びっくりです…

評価のほうですが、ストーリー評価は合計30ptなので、評価していただいた6名の方全員が5ptをつけてくださったようですが 文章評価は合計26ptと…見る人により、うまく伝わっていない部分があるということでしょうかね…

こうして、反省しつつも、評価してくださる方がいる
感想を送ってくださる方がいる
お気に入りに登録してくれた方がいる
読んでくださっている方がいる

それだけで、こう…書いてよかつたと思えます

ではこの呪いでしめられたいただきましたね

はっぴーめりーくっすます 頂様の今日明日が、楽しい一時でありますよ!!..

第9話～清涼祭～田畠…無駄にドラキュラに力を入れてお化け屋敷～

K「いんばんは～」

ルル「いらっしゃいます」

K「監様、昨日クリスマスイブ、本田クリスマス、いかがお過いして
でしょうかね」

ルル「どうだらうねえ」

K「昨日はクリスマス特別版といつことで、ルルと美春にラジオ +
ドラマみたいな感じでお届けしましたけど… 美春の喋り方を長々
と書いてると

とあるの白井黒子の口調になってる時があるんだよねー」

ルル「www」

K「ええと、まあそんな感じでガタガタな感じがあつたと思します
が、いかがでしたでしょうか？ 特別番外編の内容に関する感想はい
ただいたことがないので、不安です… よかつたら本編の感想や質問
等と一緒に感想いただければと思います」

ルル「お気に入り登録、又、評価も随时お待ちしております」

K「ところで、本編どうぞ…」

第9話～清涼祭～一日目…無駄にドラキュラに力を入れてお化け屋敷 in

ついにはじまつた清涼祭

翔子からの提供で、全統括責任者はスーツを身に着けている

俺と吉都君だな

吉都君の出番は今日は午前中…俺午後から

眠かった俺は、保健室に侵入し仮眠を取ることにした

ルルがない…

一緒に見て回るうかと思つていたのだが

まあ仕方ない

眠そうにしていたから、どこかで仮眠でもしているのだろう

仕方なく私は1人で回り始めた

おばけ屋敷か…まったく興味はないな

どうせ学生が作るモノだ、面白くもないだろう

スルーしようとしたが、ドラキュラ（吸血鬼）の格好をした奴が入口で客案内をしてために、何かの縁だ時間もあることだしな、と思ふることにした

入ってみると、思った以上に雰囲気がある

ドライアイスでも使って、霧と寒気をかもしだしているのだろうか

空気がひんやりとしていて、白い煙が足元をただよっている

先に進むと、仮装したお化けが飛び出してきたりとするが至って普通だ

メイクなども凝っているようだが、人が表現するには限界があるだ
う

暫く歩くと荒れた西洋墓地といつのだろつか、そんな場所へ出た

蝙蝠の作り物が羽ばたくように動き、それと共に羽を動かす音が流れてきた

暫く様子を見るが、これと黙って何が起こる様子もない

「進むか…」

その墓地を抜けた途端、ぽんやりとした灯だったのがブレーカーが落ちたよつに真っ暗になった

そして、蝙蝠が羽ばたく音が四方八方から聞こえる

うつすらと青い光りが前から近づいてくる

その光りが近づくスピードは徐々に早くなる

そして田の前にヴァンパイア姿の仮装した男子生徒が、突然現れる

女生徒を一人抱きしめるように掴んでいる

その男は女生徒の首辺りにあつた、自分の顔をじちらにむける

その男の口からは血が滴り、女生徒の顔は死んだと思わせる為か目を見開いた状態で一切動かない

男はニヤリと微笑み近づいてくる

「君の血がほしい……血が……ほしい！」

と女生徒をクッショングがあつたと思われる方へ突き飛ばし、じちらへ駆け出していく

このお化け屋敷のヴァンパイアへの力の入り方は異常だろ？

その男は私の目と鼻の先で止まる

男に太陽の光りを表現したのか、オレンジ系色の光りが当てられ、逃げるようになにどこかへ消えていった

それと同時に、周囲が明るくなり、出口を指示した看板が見えた

なるほどな、怖くて逃げ出してくれたならそのまま出口へ行けるだろ？

逃げ出さなかつたら、太陽が昇りヴァンパイアは逃げ去つたと思わせられるということか

想像以上に完成度が高かつたよ

それが素直な私の感想であつた

いくつかの店を見て周り、お茶もしたし早めの昼食も済ませたので、自分の教室に戻ることにした

「エヴァ Side END」

田を覚まし、時間を確認するとあと一時間ぐらい、俺のシフトまでに余裕があることを確認する

教室に戻つて、『ご飯でも食べるかな

「「おかえりなさいませ、『主人様』」

2人のメイドのお出迎え

「つて、ルルーシュ君か…」

「憑じね、佐藤さん」

「いえ、それより、戻つてくるの早かつたですね」

「うふ、他のどこの行ぐのもめんどうせこいし、一二ド飯食べよう
かと思つてね」

「あ、やうですか…席空いてますナビ、案内しまじゅうがへ…

「いやいや、このあとすぐここで働くのにそれはないわ…裏でいっつこで吉都君呼んで」

「はー」

佐藤さんに吉都君を呼ぶよつて頼み、キッチンへ回る

「ひよと厨房備つるよ。」

「ルルーシュか、使つのはいいが、何をするんだ?」

「昼飯作る」

利光が、お客様のオーダーを至つて冷静に、じくじくと作り続けていた

「そりゃ、つて料理できるのか？」

「たぶんね……ここ数年作ってないからわからないけど」

シンプルにチャーハンを作り始める

暫くすると、吉都君が顔を見せた

「どうした？」

「何か変わった事はあつたかなーと」

「今のところ特にはないけど、ちよくちよくナンパしようと/orする人も多いね」

「だろうな」

働いている子カワイイからね

俺は出来上がったチャーハンを食べつつ吉都君との会話を進める
「つていうか、それが目に見えてたから、全統括責任者なんて言って女子を保護するために、男を置いたんでしょ？」

「いなことは限らないからな、限度越えて変なことじょうとする奴
ひゅう祭り事とかの氣分が浮かれるような時は特に」

「特にこれと書いて悪い評判もなさやうだし、いい感じだよ」

「やうか」

清涼祭の出だしは、至って平穏

クラスの出し物も順調な出だしのようだな・・・

第9話～清涼祭～ 日田無駄にドラキュラに力を入れてお化け屋敷

K「『』覧いただきありがとうございます」

ルル「エヴァ回だね」

K「つて言つても、お化け屋敷に一人で入りましたーってだけの話だけどね~」

ルル「まあ頑張つてよ」

K「え・・・ええ・・・・・・・・そつそつお気に入り85件になりました！ありがとうございます」

ユニークアクセスの遊びを見ると、ビーチや公園キンギングからは外れてしまつたみたいですけど…また返り咲くことを願つて！頑張つていきたいと思います」

アンケート募集中

本作品の正式タイトル候補を募集しております
よろしくお願いします

第10話～一日目…常夏？否、ハゲカン！Bゾルルーシュ…ボク裏われぢゃつた

K「こんばんわん」

ルル「はい、こんばんは」

K「予定が変更となり、色々と予定が詰まっちゃいまして、投稿遅くなりました

すみません」

ルル「どんまい」

K「ストックが全然ないし、清涼祭編に苦戦しております
ぱつさぱつさと原作スルーの可能性がありますが、以後もよろしくお願ひします」

本編どうぞ

第10話／一日目…常夏？否、ハゲカン！B Yルルーシュ…ボク裏われちやつた

俺がシフトに入り暫く立つと、変な2人組みが現れた

「2年Fクラスの料理は、ホント食えたもんじゃねーよ…」

真ん中付近で大声で他の店の、悪評を話しだす

ハゲとモヒカンである

最初は翔子が、軽い注意をしたのだが聞く耳持たず

暫くして出て行き、また少しすると戻ってきてそれを繰り返す

「…ルルーシュ、あれどうしたらいい？」

翔子が横にきて、相談してきたが…

はあ……ハゲカンめ…

ハゲカンとはハゲとモヒカンの略である

とりあえず、もう一度見逃すよ!に指示
さすがに次はないな…

ハゲカンが出て行つて、少しするとFクラス連中が現れた

その後に続くよつこ今度はハゲカン

めんどくさいことにならうだ

俺はFクラス連中が座る席に、堂々と座る

「よハ、ハコハ」

「ハコハジヤねえー。」

坂本に声をかける

「ランペルージ君だつて? ビーフしたのそんな格好で?」

吉井がそんな質問をしてくるがスルー

「お兄ちゃんは、バカなお兄ちゃんのお友達なんですか?」

えーっと、美幼女・・・島田葉月だつたか?

「友達ではないが、島田さんの妹さんか?」

「はいー葉月ですっ」

「アンタよくすぐ気づいたわね?」

島田さんが首を軽くかしげて問つ

「だつて、結構似てると思つよ

2人とも姉妹そろつてカワイイし...

とそんな話はどうでもいい...あのハゲカンはお前らの所で発生し

た、「ヨキブリだらつちやんと処理しておけよ」

「ハゲカン？ ああ、専夏コンビか… あこつらなとで」」」」」」

「お前のクラスの悪評を店内で『わせ』『わせ』『わせ』わけです
よ」

「やつぱつあこつらが…」

「ひで処理してもいいけど…」

「何か考えがあるのか？」

俺の一言に坂本が食いつく

「ああ、ただしこのフライヤーを、Eクラスのテーブルに設置してもらおうか」

「フライヤー？ 何それ？」

坂井の質問は受け付けない！

「バカ久、お前にはチラシって書いた方がわかるか？」

「ああ、なるほど」

「まあEクラスに置いてても、こちらに客が流れてくるかわからない

「けどな

「やれべりこならこーこか」

交渉成立…

「愛子」

「何かな？」

「あのハゲカンのヒョウヒョウ、一言も言葉ったあと、悲鳴上げて倒れ

『や、やめてください…』 とでもなんとも、言つておけ

「うへ、うん、わかった」

トコトコと愛子がハゲカンの元へ行き、少しおしゃべりする

悲鳴と共にその場に倒れた

すぐさま俺はその場へいく

「ビ、ビッした？何があった？」

と愛子を心配するふりをしながら、愛子のあらメイド服の胸元を、
周りからみえないように破く

愛子が少々驚いた表情をしているが…

許せ

「！」この人達が、急に体を触りだして、服を引き剥がして…辱め
めうとしたんです…！」

「ちよ、ちよっと待てよー俺たちはなんにもしてない…！…そいつが
勝手にー！」

「お姉さん、困りますね…

小ちこお子様などもご利用になられてるのですよ？

それでなくとも、非道、鬼畜、外道の極みですね

これは警察に連絡せざる終えません

それに営業妨害ともとれる、大声で汚い言葉を発するなど…
法廷に立つていただきましょつか？

ええ、とりあえず、営業妨害、それと公然猥褻、強姦未遂といふ
ことで、大人しく捕まつていただきましょうか

「ふ、ふざけるなよ？俺達は何もしてないんだ！」

「ハゲとモヒカンつていうのもよろしくないですねぇ…」

「いや、髪形関係ねえだろ！」

シシコミは隙を生む……

居合い拳

ハゲ、カンの一気に居合い拳をお見舞いする

面白じぐらこに空中を回転し、床とキス

「ああ、お客様、そんな許して欲しいからといって、床を舐めるような真似は、逆に困ります！」

とオーバーなリアクションを俺はとりつつ、ハゲとカンを縄で拘束していく

「愛子、大丈夫ですか？」

「う、うん…」

「そ、怖かったでしょ？裏に行つて少し休んでください
優子、彼女に着いていてあげてください」

「は、はあ…」

「吉都君は、学園長もしくわ、西村先生にこの事を伝えて、とりあえずこの2人を引き取つてもらつように言つてください」

「はい」

「全統括責任者、ルルーシュ・T・ランペルージと申します
またりと穏やかな、楽しいお客様の一時を、大変お騒がせ致し

ました

お詫びにて、お客様全員にお好きなお飲みモノを、一杯サービスさせていただきます。

「どうぞ、『ゆきへりとお寛ぎください』…」

はあ・・・長いセリフだった…咄嗟に言い切った俺は、一礼して

レジを担当する女生徒と、キッチンに指示をし

愛子の元へ向かう

「さつあは悪かった」

「ううん、大丈夫だよ」

「やうか…優子、温かい紅茶でも入れてあげてくれ」

「はいはー、もうやつてるわよ」

愛子が平気そうなのを確認し、Fクラスの元へ戻る

「とりあえずあれでいいだろ、普通に考えてあの一人は停学、もし

くは退学だ

「…お前、案外酷い事平然とやつてのけるな

「ん？ 愛子のことか？」

「それもあるが…って工藤は大丈夫だったのか？」

坂本が心配することなんてあるのな

「ハゲカンに服を破かれたわけじゃないからな

「え？ それじゃあ誰がやったの？」

「俺だが？」

「ひどいですー」 「酷いわね

姫路さんと島田さん、睨みつけられるような目で見られた

「ボクなら平氣なんだけどなあ？」

「愛子ちやん…」

愛子がいつの間にか新しいメイド服に着替えて、ホールに出てきていた

「確かに服は破かれたけど、ルルーシュ君は周りに一切中をみえない程度にしか破いてないし、ルルーシュ君自信もボクの目を見ながらだから見られてないし」

それに驚くのか……

「まあ咄嗟の判断だつたからな……愛子を傷つけるわけにはいかないし、細心の注意を払つてあのハゲカンを潰したつもりなんだがまあ、あれだ、お詫びに一つ言つ事聞くから、許せ」

「ホント、気にしてないからいいのに……それでも言つ事聞いてくれるっていうなら、何か考えとくよ」

「そこへ、吉都君に連れられた西村先生現れる

ハゲカンとともに、俺と愛子は事情聴取の為、連行された……

第10話～一日四回…常夏？否、ハゲカン！Bソルルーシュ…ボク裏われひゅつた

K「何故か、愛子をいじめたくなっていました・・・」

ルル「俺、ヒドイ奴つて評価されかけやつじやん！」

K「まあドンマイ…えつと、寝不足で頭回つてないので・・・寝ます」

ルル「え？マジで！？今日雑すきないか？」

K「一日12時間～8時間寝ないとダメなんです・・・俺。」

ルル「お子ちやまwww」

K「うせーつーおやすみー！」

ルル「あ、消えてつた・・・といつことで、今回も今め清涼祭の荒さはホント簡便していただければと思ひます

Kが忙しいらしいので……では、ご覧いただきありがとうございました！」

第1-1話「幼女カワイイ、うふ。カワイイ...」Bソルルーシュ（前書き）

K 「...」

ルル「こんじょうな~」

K 「えつと、今回は少々短いですが、どうぞよろしくお願ひします

...」

早速ですが本編どうぞ

第1-1話「幼女カワイイ、うふ。カワイイ…ボルルーシュ」

「…」こつらは、しつかりと処分する

工藤、無理せず休ませてもらえ…それからルルーシュ、ホントに手を出したわけじゃないんだな?」

「もちろん、手や足が普通に届くような距離にいたわけじゃないんですよ?」

踏み込んで居ないし、それよりも俺が腕や足を伸ばした姿を見てる人なんていないはずですし
あの2人が、慌てて逃げようとして、勝手に転んだだけですから」

「そりか…わかつた、二人はもつ戻つていいぞ」

嘘で塗り固められる供述

所詮世の中こんなものさ、免罪が世の中にどれだけあると思つ?

表立つてないだけで、多数存在しているだろ?」な

さて、話を戻そう

俺と愛子が教室に戻ると、先ほどまでよりお客様の入りが増えていることに気づいた

「吉都君、どうした？」

「さつきの騒ぎでね、ルルーシュ君の対応を見て女の子達に好評だつたらしくね、メイド喫茶なのに、男子田舎で、女性客が少し増えたんだよ」

はあ…そんなもんですかい

「それで、利光にもスーツ着させてホールに出しているのか」

まあ利光は顔立ちは整っているし、紳士な雰囲気が漂っているがな
… B レ臭もまた事実…

「そうそう」

あれ?っていうか利光、朝からずっと働いているような?

「それで、何か女性向けにできる」とはないかなって思つたんだけど…」

確かに…メイド喫茶といつだけあって、元から客層は男性がターゲット

「わうだね……んー……」

「ルルーシュ君の何か得意なこととかないの?」

得意なこと?得意なことねえ

「魔法」

「魔法…?マジック?手品が得意なのかい?」

やつぱり解釈しますよねえ

「それをやってみたらどうかな?簡単なのでいいんだけど」

「気が向いたらね

出番は案外早かつた

家族で清涼祭に遊びにきいたらしご一いつのトラブル

小学生か小学生になるかなーぐりこの女の子とお母さんとお父さん

何か気に入らなかつたらしく女の子が泣き始めたのである

「……」

無言で女の子の手を止めて、「お母さんお母さんが

「すみません、いわゆるハグ…」

申し訳なわけついでここ

スッと手を女の子の前に差し出す

何事が気になつたのか、女の子はぐずつながらもその手を見つめる

「何がほしいのですか、お姫様？」

俺の顔と手を交互に見る

「…ケーキやあ…しゅーべりーむ…」

ケーキじゃなくてショートクリームが食べたかったのね

「ショートクリームですか…確か…」この手のひらの上…」

差し出した手ではなくもう片方の手に、小さなお皿があり二つのショートクリームが並ぶ

「はい、どうぞ。」

女の子は少しそのショートクリームを見つめると、笑顔になりショートクリームを食べ始める

よかつた……昨日エヴァが作ってくれたショートクリームを保管して

おいて

保管先は、影の倉庫である

ひっぱりだせばなんでも出てくるに違いない

影の倉庫 影魔法を駆使した基本中の基本。影を倉庫変わりにし
様々なものを保管しておける。また身に着けている衣服の袖と腕の
間の影などからも出し入れが出来る。

「あの……」

女の子のお母さんが何やらじらじらを見る

「ああ、大丈夫ですよ。」こちらで扱っているモノではありませんが、
うちのキッチングスタッフが作ったものです。娘さんが食べても安心
安全なモノです

「こちらからのサービスですので、お気になさりや。」

「あ、ありがとうございます。」

「ルルーシュ君、凄いね… いつの間にシュークリームなんて？」

「エヴァが昨日の夜作ってくれたモノだよ」

「いや、どうやって左手にお皿に乗せた状態のモノをもつてたか知りたいんだけど?」

「秘密」

吉都君、甘いな、手品は自分でトリックを見抜くのが面白いんだよ?

つて魔法だからトリックも何もないけどね

第1-1話／幼女カワいい、うふ。カワイイ…Bソルルーシュ（後書き）

ルル「…」覧頂ありがとうございます…。」

K「今回はキリがいいと思えるところが見当たらなくてですね…短くなつてしましましたが、次回は長めの予定です…」

ルル「あくまで予定なのね」

K「書ききれてないんだもん」

ルル「なるほど…・・・」

K「それよりも、お気に入りが93件にまで増えてて、1話アップする」と二人ぐらいはお気に入り登録してくれてるみたいで嬉しいよ」

ルル「ほつ…それはあり難いね」

K「年末で急がしいのですが、頑張ります！」

第1-2話～真の裏社会とは、非の通常であれまい世界はここから、他の世界

K 「ねむねひ」

ルル「おはよう」

K 「なんかしひへつこなこ出来なんだけだ……」

ルル「それでもアップするのね？」

K 「まあね…がんばるよ・・・」

本編ビューフィルム

第1-2話～真の裏社会とは、まあ通常であれやうの世界とはこなこなにか、他

優子、翔子、ヒツア、愛子は休憩で4人でビーチに行つたよつただ

ビーチで歩き回るのかねえ…

暇だからついて、主要メンバーを休憩に送り出すなくともいいじゃん

暇だよー

そうだ！

「古都殿」

「ど、どうしたんだい？ルルーシュ…？」

「働きたくなこないだるー。わがのドーナーー。」

「こや、堂々と言われてもね…んーまあ、ヤハまで言へんなこ…
ここみ休んでも」

吉都君は、優しいと思つよー。

「急げ明久！」

「わかつてゐる！」

廊下を走り抜けるバカ2人の姿が目に映る

つていうか、声でかいって…営業妨害だぞ？

「じゃあ、吉都君、後よろしくね

「あこよー」

吉都君が休んでいって言つたで、さうー。
休憩でーざるー！

長瀬楓風のしゃべりかた面白いな

長瀬楓 魔法先生ネギまー!に出てくる1人の少女のことである

そう言えば、なんか吉井と坂本が物凄い形相で走ってたけど…

またバカなことしているのか？

いや、ま、待てよ・・・?

清涼祭…教頭…Fクラス…チンピラ…誘拐…

まさか！

俺は走った、かなり全力で…

廊下？否、壁すらも走る

学園から出て行く、吉井と坂本、土屋の姿が見えた

吉井達は、一つの部屋の少し手前で塊になつて、何か機会に耳を傾

数分後、カラオケ屋に入つていく、吉井達が居た

間違いないな、教頭といつ子悪党が雇つたチンピラによる誘拐事件だ

俺も後に続けて入店する

『俺このちつちぢゅい子と、そっちの金髪幼女ね!』

『お前はホント、口り好きだな』

『じゃあ俺は、この巨乳ちぢゅんに相手をしてもらひつかなあ……』

けている

中の動きを盗聴しているのか…

『せ、やめへぐだれこー。』

『え、エヴァ、起きなさこよ。』

え？ エヴァまで攫われてんの？

『ムリムリ、そのナは薬で眠つたらから当分向しても起れなこよ～』

「うわ…何この顔みなくてもキモ男ですってわかる声の気持ち悪い…」
『せ、やめへぐだれこー。』

かいつてカツアでしょ、ソリド乗り込ま抜いてこいつ乗り込む…。

『いただきまーす』

「ンンン

「ランペルージ君？」

今頃気づくのか吉井…途中からその盗聴している声を聞いてたんだ
けどな？

ガチャ

「なんだ？俺達に差し入れか？」

誰が何を差し入れするんだよ？

バカか？

「死の差し入れに参りました」

居合い拳でドアを開けてくれた男を吹っ飛ばす

「な、なんだ！？」

「てめえ…」

「「ルルーシュ！？」」「ルルーシュ君？」

やたーぼく、せいぎのみかたのよつなとつじょうを、はたしたー

二つ名・正義の味方 をゲットしました ちゃんちやーん！

「君たち、とりあえず人質返してもらうよ？」

んとー姫路、島田、木下姉弟、翔子、愛子、エヴァ、チビっ子

これだけの人数攫われてて、学校が気づかないってまずいだろ

「ランペルージ君！？なんで、先に突入しちゃうのさ？」

吉井と坂本が入室してくる

「なんとなく？一番に入った方が、かつによくないか？」

「そんな事は、どうでもいいんだよ。姫路さんや美波達のほうが大事だろ？」「

「まあ、明久、そんなことより先に、やることがある」

騒いでいる吉井を坂本がなだめている

「あいつらが、吉井と坂本っていう奴か」

「一人知らないやつもいるが、邪魔するなら、大人しくしてもらおうしかねえよな？」

「いやー怖いです、母さん、このチキンピラ達、頭悪そうで怖いです！－！」

「俺達裏社会の人間にたてつべどどうなるか、わかつてもらわないとなあ？」

チキンピラ達の一人がそう言った

代表達と、休憩に入り、Fクラスのお店にお邪魔してたら

誘拐された・・・ってなんでこんなめに…

しかもなんか、絶対工口い事する気まんまんだし…

ありえない…ホント…

エヴァちゃんは寝たままだし

そんな時、ルルーシュとそれに続いて吉井君と坂本君が現れた

／ 優子 Side END／

／ 翔子 Side／

何故誘拐なんてするの？

何が目的？

吉井と雄一を足止めするのが目的だつて…

そんな事のために、美波の小さい妹まで連れてくるなんて…許さない

でも、手足は縛られて、どうしようも出来ないし…

そこにルルーシュが来てくれた…雄一と吉井も

その三人の姿を見て、安心して力が抜けてしまった

翔子 Side END

美波 Side

アキ…助けて…アキ…

そう思つていると、扉をノックする音が聞こえた

男達の1人が扉を開けて、外に立つ人に何かを言つていた

怖くて…何も言葉に入つてこなかつたけど

外から聞こえた一言は、耳に届いた

「死の差し入れに参りました」

ふざけた感じの言葉なのに、どこか真剣で

トーンも低く… Aクラスのランペルージの声…

扉を開けた男は、何故かふとんで、壁に激突していた

♪ 美波 Side END ♪

♪ 愛子 Side ♪

ルルーシュ君が乗り込んできたあと、吉井君と坂本君も入ってきた

何故かその場で言い争いを…あ、坂本君が止めた

ボク達を誘拐した男達は、ルルーシュ君達をボコボコにする気まん
まんらしい

1人の男が、たぶんルルーシュ君達に恐怖感を与えるために言った
一言

「俺達裏社会の人間にたてつくとどうなるか、わかつてもらわない
となあ？」

それをルルーシュ君が聞いた瞬間、表情を変えた

今までに見たことがない…普段の彼を知っている人なら、たぶん今
の彼には近づきたくないだろう

「貴様等、裏社会の水深何メートルについて、裏社会の人間だという

氣になつていいんだ?

死線をくぐりぬけたこともないようなガキが……」

ボクは息を呑んだ。ボクだけじゃない

代表や優子達もさうだ。

いつの間にかエヴァちゃんが田をわまして、ルルーシュ君を暫くみて言い放った

「ルル、そこいら辺にしておけ、翔子達も殺氣に耐えられなくなつている

「エヴァ、起きたのか?」

「ああ、氣を緩めすぎていたな……」

「さうか……お前はさうしていればいい、何があれば俺が片付ける

普通に動けるはずなのに、空気が張り詰めているような氣がして動けない……

「坂本、吉井、やれるか？」

「ああ」「もちろん！」

俺は居合い拳を放ち始める

坂本と吉井は、女の子達に近づけさせなつて、男達を相手にしている

「ムツツリーーー！女子を先につれて、学校へ走れ！」

坂本が土屋に指示を飛ばす

「 「 だああああああああああああーーー」 」

吉井と坂本のストレートが、最後の1人に直撃

終了だな

放課後、巻き込まれたとして、俺やエヴァ達は坂本の指示である教室にいた

「ねえ、俺帰つていいかな？」

「ダメだ、お前は…巻き込まれたといつよりは、突っ込んで行つた
といつほうが正しいが…
まあ、聞いておけ」

あれだろ、学園長の長々とした話だろ？

学園長は、この清涼祭中に行われる試合大会の景品に白金の腕輪と

「いつもの用意した

景品として用意したというより、新技術としてスポンサー達へ魅せるためとこ「う方が正しいか

だが、後になつて、バグが発見される

そのバグというのが、一定得点以上を持つ者が使用すると、暴走を引き起こしてしまつところの

そこで、坂本や吉井に、副賞として渡される遊園地の「プレミアムチケットによくない噂を聞くから回収してほしいと、話を持ちかけた

だが、教頭がこれを暴走させようと、色々と細工をほどこしたりチップラを送ったりとFクラスへ妨害策をこじじた

そして今に至ると

「・・・悪かったね

おやかここまで手段を選ばないとは思ひもしなかつたよ…」

学園長がもうもの説明をし、頭を下げる

「とりあえず今日は念のため、明久、姫路を家まで送つてやれ」

「うん、わかった」

坂本が用心のためにと、巻き込まれた女子を送つていぐようにそれぞれ指示を出していく

「ムツツリーーは工藤、秀吉は木下姉、俺が翔子で、ルルーシュはあと頼む」

エヴァはまあ俺と同居しているわけだし、島田姉妹か…小さい妹もいるからな

吉井に姫路さんと島田姉妹を任せるわけにもいかないか

第1-2話／真の裏社会とは、まあ通常であればこの世界にはいないけど、他世界

K「『』覧いただきありがとうございました！」

ルル「カラオケ内の描[写]が物足りないよね」

K「『』想像にオマカセシマス……」

ルル「それにしても結構見てくれてる人多いね」

K「うん。最新話アップすると200人前後の人気が2時間の間に見てくれてるみたいだね」

ルル「お気に入りも100件突破したしね……」

K「ねーっ……まあ清涼祭編はホント元のストーリーの流れが、記憶の中で曖昧すぎてうまく描[写]できていのが痛いんだよね……」

ルル「なるほどね」

K「そんなことよりも、表現力が足りなさ過ぎてる感じはしてるんだけど、どうにどういった描[写]をつけくわえればよこのやら……」

「

ルル「お前の頭じゃ限界あるよね」

K「酷い……ひどいよ……！」

本日はこの辺りで…明日まで頑張つて清涼祭編書き続けます！
あと出来たら特別編も（*、H、*）

第1-3話～ルルーシュ×美波が発生する確立は？～（前書き）

K 「おはよ／＼れこます」

ルル「おはよ／＼」

K 「年越しを皆様どうお過ごしでしょうか？」

家族でまつたり年越しスペシャル番組を見ながら、

アーティストの年越しライブに参加？

彼氏彼女と姫初め？

仕事終わりに仲間と飲み会？

仕事終わりの電車の中？

自分は、仕事終わりの帰りの電車の中で年越ししたことが一度だけありますね……さて、今日はとても寒いです。」

ルル「寒いねー」

K 「まつたりとコタツで呑みながら小説を書きたいところですが、買い物や料理をしなくてはいけないっていつ…

書けたらもう一話今日中にアップいたします」

では、本編どうぞ

第1-3話～ルルーシュ×美波が発生する確立は？～

坂本の指示により、エヴァと島田姉妹と家路につくこととなつた

「怖いお兄ちゃんが送つてくれるですか？」

島田妹がそんな呼び方で俺に聞いてくる
何故、怖いお兄ちゃんなんだ？

「クククッ…ルル、怖いって言われるぞ？」

そんなに笑えるのだろうか？
エヴァが少し笑いを堪えるようにしつつ、そんな発言…

「怖いかな？」

「助けてくれたんですけど、ちょっと怖かつたですぅ…」

「まあいいやなんでも…といふ島田さん顔色が優れないけど…？」

いつも元気そうにしてる彼女が、口数があまりにも少ない気がするのだが…？

「え、ええ。大丈夫、気にしないで……」

「今日、お父さんもお母さんもお出かけでいないです…だから今日

はお姉ちやんと一緒に寝るですー。」

なるほどね、家に妹と2人だけ……
誘拐された後にそれか……

「島田姉妹、それなりに泊まるか?」

「え? そんな、気を使わなくてもいいわよ……」

（美波 Side）

今日せ、お父さんもお母さんも帰つてこない……

すいじ不安だ……葉月もいる……何かあっても、ウチじや葉月を守りき
れないし……

自分自身を守れるかどうかもわからない……

とにかく戸締まりをちやんとして、葉月と一緒に寝るしかないよね。

・・・

全然それでも安心できないけど……

「島田姉妹、それなりに泊まるか?」

ルルーシュがそんなことを言った

心配してくれてるのかな?

確かにエヴァンジエリンさんもいるし、ただの男子の家に泊まつて行くわけじゃないから、その点でも安心だし
ルルーシュならたぶんウチや葉月を守れるだけの力はあると頼む…

「え? そんな、気を使わなくてもいいわよ…」

何故かこんな時に強がって、そんな言葉が出てしまった
ウチのバカーネツ!!

「あつそ… それならエヴァを島田さんの家に泊めるか?」

へ? 何? なんで?

「それでも私は構わないが…」

「金髪のお姉ちゃん、お泊まりするですか?」

「あー、どうする島田? こんな日に妹と2人では心もとないであります? 私はどうでも構わないが…」

ルルーシュやエヴァンジエリンさんとあんまりかかわりなかつたけど
いつもやつていると結構2人とも優しいじゃないのよ…

「じゃ、じゃあエヴァンジエリンさん泊まつてくれる? さすがに葉

月と2人だけだとちょっとね…

（美波 Side END）

（エヴァ Side）

島田家前

「じゃあルル、着替えとか頼むぞ」

「ああ」

ルルの意向により、島田の家に泊まることになった

「どうぞ」

「お邪魔する」

至つて普通の家だな…

「適当に座つて、ジュースでも入れてくる」

リビングに通されたのだが…何故、島田妹が私の手を握つて離さないんだ？

「金髪のお姉ちゃん、いらっしゃるのですー。」

「ああ…」

島田妹に引つ張られ、ソファードに座る

「金髪のお姉ちゃんは、怖いお兄ちゃんの彼女さんですか？」

「ん？まあ、そうだな…」

彼女じゃなくて妻なのだがな…

その後一時間ほど島田も交えてのおしゃべりが続き、ルルが着替えを届けてくれた

夜10時頃

お風呂も夕食も済ませて、エヴァンジエリンさんに勉強を教えてもらっていた

葉月はウトウトと本を読みながら寝てしまったみたい
よかつた、今日はあんなことがあつたけど、怖くて寝れないとかそ
うならずに済んで…

つていうウチは結構怖いんだけど…エヴァンジエリンさんもいるし…
でも彼女結構華奢で、何かあっても対処できないわよね…?

まあ誰か居てくれるだけでも全然違うか

「私じゃ頼りなくて不安か?」

ドキッとしてしまった、確かに安心感は言ひほどないけど…ウチと
葉月の2人よりマシだよね

「全然、そばに誰かいてくれるだけでもあり難いわよ

「まあ、大丈夫だ

安心して寝ていい、ほら…」

エヴァンジエリンさんが少しだけ窓のカーテンを開けて外を見るよ
うに促がしてきた

なんだかうへと覗いて見ると、田立たない暗闇の中に座った状態で

田を廻つたルルーシュが居た

「え？ 何してるので？」

「」の家と私達の護衛だよ

一応、必要ないとは思うが…念のためにだらう
島田姉妹だけじゃなく私もいるからな、守るべき対象が固まつて
いるんだ」

護衛つて…外で？ 寝ないで？

「もしかして、朝まであやつるつもりなの？」

「さあな…一応男が泊まつていくわけにもいかないと思つたんだろ
う？」

それに私にも安心して寝るよつて言つてたしな…

「と、とりあえず外に廻させるなんて…

「いや、あいつなら大丈夫だ
あのぐらうどとも思つてないし、とにかく私だけじゃないから
安心して寝る」

「へ、うん…」

なんだか凄く申し訳ないんだけど…

確かに近くに何かあっても守ってくれそうな人がいるのは心強いかな

ありがとう、ルルーシュ

美波

S i d e E N D

第1-3話「ルルーシュ×美波が発生する確立は?」(後書き)

K 「『』覧いただきありがとうございます」

ルル「意外と短かつたね」

K 「ええ、清涼祭『田田』が始まりますので区切り的に、短くなってしまいました」

ルル「ついに『田田』か」

K 「今日は美波と絡ませたのですが、葉月の出番が少ないかも知れませんね……」

ルル「ああ、というか葉月ちゃんって人懐っこいよね~」

K 「ええ、抱き枕にしたいです」

ルル「そうですかい」

K 「『』でお知らせです……1月1日よりこの小説のタイトルが変更となります！」

アンケートには全く候補はこなかったんですけどねwww

現在 僕と俺の嫁エヴァと召喚獣だと? (仮タイトル)

1月1日 僕と俺の嫁エヴァと召喚獣だと?

K 「仮タイトルを省いただけですけどねwww

ルル「正式タイトルおめでとーっ」

K「はい、とこり」とまた次回お会こしましよう」

感想・質問・ちょっととした一言・お気に入り登録・評価・アドバイス・各御指摘
隨時受け付けております!

お気軽に感想のコメ送信よりいただければと思います。

新年特別番外編／ただのラジオ風味なだけで物語がないなんて…（前書き）

娘^{エヴァ}「ぱぱー、お年玉ちょうつだい！」

パパ（ルル）「はいよ」

娘^{エヴァ}「やつたーつありがとうぱぱー！」

パパ（ルル）「何に使うんだい？」

娘^{エヴァ}「んとねー、魔法先生ネギまの原作コミックスと、バカとテストと召喚獣の原作ライトノベリティ本を買つのーつ」

パパ（ルル）「そつかそつか……買つたらパパにも見せてくれるかい？」

娘^{エヴァ}「いや、自分の分は自分で買つてよ」

パパ（ルル）「（なんか喋り方が突然普通になつた！？）あはっはははつ……そつか……そんなに独り占めしたいほど面白いのかい？」

娘^{エヴァ}「いや、独り占めとかじゃなくて、売り上げ貢献だらうへ。そのぐらいわからんとは……貴様今まで何を学んできたんだ？」

パパ（ルル）「（あれ？僕が娘に叱られてる……）そ、そうだね……パパがバカで『メンネ……』」

俺と俺の嫁と召喚獣だと？特別番外編、はじまります！

新年特別番外編』ただのラジオ風味なだけで物語がないなんて…」

ルル「はい、ということであつてまいりましたラジオ風味の特別回。Kは相変わらずね、『ぼっちの俺は1人さみしく酒をすすりながら、コタツでまつたりしてるんだ!』と言つて、出てくる気配がないのですが…まあ進めていきましょうか

では、改めまして『俺と俺の嫁と召喚獣だと?』特別番外編!
!俺と俺の嫁とラジオ風味だと?スタートです!!』

ルル「おはようございます、こんにちばんは、こんばんはー¹
そして明けましておめでとうございます!

俺と俺の嫁と召喚獣だと?のオリジナル主人公やらせていた
だいてあります、ルルーシュ・T・ランペルージです

では、さっそくゲストの方ですが、最初の茶番劇に挑んでくれた俺の嫁!」

エヴァ「エヴァンジェリン・A・K・ランペルージだ

なんでこんなとこに呼ばれたかは知らないが……

ルル「堅苦しいの苦手だもんねえ……」

エヴァ「うん……大人しく寝正月を過ごしたかったのだがな……」

ルル「まあ、仕方ないから諦めて、早速最初のコーナー！

視聴者の皆様からお便りが届かなかつたので（それ以前に募集していません）、Kからのお便りですね

『拝啓

愛しの美春……あやにゃんへ』

ルル「えと、根本的にまず、今回清水美春さんはゲストじゃありません
そしてあやにゃんって中の人ですかね！？」

エヴァ「バカといつ一言に限るな」

『貴方の事を思つと、M心が揺られます』

ルル「ええと、この作者は何を考えているのかわかりかねますね……」

Hヴァ「と、うか、Mだつたのか？」

ルル「Hヴァ、モジ食いつくといじやないから。。」

『罵つてくだせこ、もつとボクを虐めてー。』

Hヴァ「これ本当に全世界...つまりインターネットに流せるのか?」

ルル「編集でカットしていただきたいですね」

『と、いいたいといひですが』

ルル「おつ。」

Hヴァ「ん?」

『ボク、どうなんで、やっぱ無理ですか』

ルル「この作者何が言いたいんだよ…」

エヴァ「あつたぐだな…」

『美春の笑顔だけでボクは』『飯を一杯食べれます』

ルル「これいつまで続くのかな?」

エヴァ「とこつか、普通』では『』飯を二杯は食べれます』じゃ
ないのか?」

『やして、ネ』『』あすにやんには受け取るせびの可憐さありて、
いつも腰痛です
感謝しています!』

今後の『』活躍も楽しみにしておつます』

ルル「ネコ!!!あずこちゃんって、完全に中の人あてた手紙なの?
ねえ!?

つか、仰け反るほどの可愛さあって、いつも腰痛つて…バカ
なの?ねえ、バカなの!?

エヴァ「この手紙…いや、Kの存在が完全な事故だろ?…」

ルル「えっと、無駄なお便りのコーナーでした…

続いてのコーナーは…えっとその前に、もう一通お便りが入
つてます

エヴァ「次はまともなのがあってくれ…」

ルル「東京都23区内在住Kさんから頂きました…
つてまたこの人なのね」

『下野さん、いつも楽しく出演されている番組を拝見させていただ
いております』

ルル「・・・出すとこ間違ってるよね？」

エヴァ「吉井明久のCDだつたか？」

ルル「そうですね、バカとテストと召喚獣のアニメ版そしてドラマCD版で、吉井明久役を演じていらっしゃった下野紘さんですね」

エヴァ「また中の人あてた手紙か？」

『そういうば下野さん、2011年にあるアーティストさんのカッブプリング曲で歌つていらっしゃいますよね？』

最初PVで見たとき泣いてしまいました

とても、すばらしい楽曲でした。ノリも良く、元気ももらえる曲で、心が暖まる曲……ボクの中で2011年ベストソングTOP10入りは確定でした！』

ルル「あーヒヤulinさんの冬にだしたクリスマスソングのカッブリング曲ですね

確かにオススメではあります。その前にちゃんとこの企画に送る手紙を書け・・・」

エヴァ「全くだな…で、ちなみにタイトルは?」

ルル「『あの日のボクヘfeat・下野紘』ですね
是非気になつた方、ニコニ「動画をんで検索してみてください
い…つてただの宣伝じやねえか!…」

エヴァ「お正月らしさとともに手紙はこないのか…・・・・・

ルル「まったくねえ…では次のコーナーいきましょつか

次はえーっと…ジョスチャーゲーム!の…じーなー・・・・

エヴァ「物理的に考えて無理だろ??.」

ルル「気を取り直して次のコーナー！
クイズのコーナーです！」

『第1問：ハゲカン（常夏コンビ）は何年何クラスに所属している
？』

エヴァ「A・どうでもいい」

ルル「A・全くもって、興味もないし知りたくもない」

『答え…3年Aクラス』

エヴァ「本当にどうでもいい問題だな」

ルル「この問題が出題される価値を見出せない」

『第2問：特別番外編等を除く、本編のみで、ルルーシュが『お嬢様』と言った回数は？』

エヴァ「A・2回？」

ルル「A・1回」

『答え…確認してみてください』（たぶん優子との会話で書いた1回だけです）

ルル「まともな問題がきたかと思えば…確認してくださってねえ…

・・・

エヴァ「手抜きだな」

ルル「はあ…つてこのパートナーたつた一問で終わりなの？」

エヴァ「手抜きだな」

ルル「とこう」とド…次のパートナーは?

「これではまるで言葉を入れる…」

ルル「…という空欄になつていてる部分に相応しいと思いつか言葉を答えるゲームみたいだね」

エヴァ「まつ…とつあえずやつてみよう

ルルーシュとエヴァンジエリン…

寒い冬の日に で待ち合わせをしていた

ルル「どこで2人は待ち合わせをしていたのか、想像で答えるのね
…」

エヴァ「ベッドしかないな！」

ルル「あーんーそういう待ち合わせですか…それ片方がシャワーから出てくるの待つてただけだよね」

エヴァ「そうだな」

ルル「俺はね普通に駅前だと思つんだ」

エヴァ「ありえなくはないか…校門とかも考えられるな

ルル「選択肢が在りすぎて、困りますね~

えっと、このに当てはまる相応しい言葉に関しては、アンケートを実施いたします！

その中でピンときたモノをKが番外編に用いて話を作るかも知れません！どうぞお気軽にようしくお願ひしますね

問題2

坂本雄一という男が1人

夜の雨にうたれながら

暗い暗い空を

たつた一つの星を見つけるかのように見据えていた

まるで映画の一コマのようである……

彼が求めるのは なのか? それとも なのか?

彼の想いは今だ彼にしかわからない

ルル「彼が求めるのは愛情なのか? それとも翔子なのか?
でどうだろうか?」

エヴァ「そうだな……結構しつくつするような気もするが……

彼が求めるのは友人からの好意なのか？それとも彼女からの想いなのか？

つていうのはどうだ？」

ルル「あーそれもありかもね…その前後の転開によつて入れる言葉が変わるから、どの言葉を選択するかで想像が広がるね」

問題3

吉井明久は…である

ルル「みじかっ！突然問題が短くなつたな
んー吉井明久は…巨乳こそ我が人生なり！を掲げる人物である」

エヴァ「痛いな、吉井……」

ルル「まあ、そうゆう人もいるかも知れなわけですね…」

エヴァ「吉井明久は…主食を水・塩・砂糖とする生物である

ルル「おお、吉井の紹介になつていいと思つ…」

エヴァ「やつだらつ

ルル「ええ、エヴァが自分に当てはめで言つなりどんな？」

エヴァ「私は、ルルの嫁である」

ルル「ふ、普通すぎた……」

エヴァ「なつ、何故そこで落ち込む！？ルルなりどりなんだ？」

ルル「俺は、眠気には勝てないのである」

エヴァ「なるほどな……でも、それも充分普通だぞ？」

ルル「あ、そうだった？」

と、まあこの辺りでね区切つていかないと長々エヴァとの普段の会話になつちやうから～

エヴァ「ん、ああそうだな」

ルル「ではまずゲストのエヴァでしたー」

エヴァ「またな……」

ルル「そしてルルーシュ・ト・ランペルージでしたつ
ありがとうございました！」

新年特別番外編／ただのラジオ風味なだけで物語がないなんて…（後書き）

お気に入り登録件数が110を越え（31日現在）

PV・ユニーク共にかなり伸びていて感謝しております

皆様新年どうお過いじでしょうか？

自分は親戚がうちに集まって一堂にひらつて感じです

先月の半ばに始まつたこの作品ですが、今年もよろしくお願ひいたします

まだまだ頑張っていきますからね！

読者様への募集

に当てはまる言葉を答えなさい」という問題が、今回の中にでてきました

読者様もお気軽にお答えを書いて、感想よりお送りください

ピンと来たものがあれば特別番外編で、使用させていただきます！

第1-4話～悪魔！？え？電波神のジジイよつ神つぱこ～（前書き）

K 「 ジんばんわん・・・・」

ルル「ちよ、テンションひくいー」

K 「 親戚が帰つて、超特急で書いた…かぶ…」

ルル「ああそう〜〜」

K 「 頑張つたけど、ストックが完全になきからきつつい…」

ルル「まあ頑張れ！」

本編ひづれ

第14話～悪魔！？え？電波神のジジイより神っぽいよ～

さあ、やつてまいりました清涼祭一日目

ええ、相変わらずメイド喫茶での勤務の一 日です

試召大会？見に行く気はないですね…

昨日の評判がよかつたのか、朝から結構な人数が来店してくれていた

「利光！入口二名様、窓側奥から一番目のテーブルへご案内！」

「わかった！」

「エヴァ、ケーキの在庫大丈夫か？」

「ショートケーキがなくなりそうだ
そろそろ焼いた方がいい」

「わかった、材料とつて来る」

忙しいのに話しじゃない

なぜ繁忙期の居酒屋のように大忙しなんだらつか

唯一の救いとするなら、ホールは穏やかな雰囲気を維持できている
ということだ

吉都君の指示やフォローのおかげで、女の子達もひとつひとつじつ
かり、仕事をこなせている

「…実際に面白い」

「利光、福 雅治さんのモノマネなんかして、この忙しい時に何を

やつて……」

利光が、キッチンの端でそんなことをやっていたので、ツツコんでみた

「あ、いや、僕はそんなつもりはなかつたんだけどね……これを見てくれ

利光がやつて差し出したのは、試合大会の映像である

「何が面白いんだ？」

「Fクラスの坂本君と吉井君のペアが勝ち残っているんだよ」

「いや、そんなことより働けよ！」

「ほ、僕は！ 吉井君の勇姿がみたいんだ！…」

はあ……利光、お前はもつぞつちの世界に完全に逝つてしまわれたのか……

大丈夫だ元の利光の墓を立ててやるひ、安心してその世界へ旅立て……

さて、午前から昼過ぎまで働くと、客足もだいぶ緩やかになってきた

試合大会を見に行くお密さんが増え始めたのだろう

昨日は一般公開はされていなかったが、今日は3回戦からだったか
？一般公開するらしくてな

決勝が近づくにつれて、客足も少なくなっているのだろう

午前から働いていたメンバーは、休憩に入る

統括責任者がいないが…まあ大丈夫だろう

「ルル、私はまだ見てないとこりを回るが一緒に行くか?」

休憩に入るとエヴァがそう声をかけてきたが…

どうしようかな…

「どこに行くんだ?」

「とりあえず、試合大会の決勝でも見ようかと思つたんだが…

「興味ないからいいや…」

「そうなのか、じゃあ行つてくる

エヴァは試合大会の会場のほうへ向かつて歩いていった

俺は適当に散歩しつつ、学園内を見て歩くことにした

決勝戦を見に行く人が多くてあまり人がいないついで見よつと思つてね

Fクラスを覗いたが主要メンバーが居ないようだ…

そういうえば吉井と坂本ペアが勝ち残つてゐるつて言つてたか

仕方なくブラブラと歩きまわる

一般のお客さんは特に、試験大会を見に行つてゐるじつはほとんど見られないな

ぶらぶらと見て回るもの…これといったモノはない

あるとするなら吸血鬼に扮した男が入口に立つていて
お化け屋敷か…

お化け屋敷つていう名前じゃなくて、ホラーハウスにしたらよかつたのに

そういえば「すりとヒカアが言つてたな……このお化け屋敷か？」

入ってみよう

ところへ入場

数歩進むと、寒気が走る

ドライアイスか？

白い煙とちょっと冷たい空氣

いや、これはマズイ…

神のクソジジイ…普通にこれはイレギュラーだろ？

表立つてないだけで、この世界にそんなものがあるのか？

これは悪魔によるものだ

ちゃんとしっかり専門的に用意された建物なら別だが

こりは学校…ここまでの大容量な白い煙を維持し、かつ室温をひんやりとする程度に維持するなんて…
どうなのだろうか…俺はできない気がする

一日の日程ならまだしも一日だ
素材費にどれだけ時間がかかるか…

そんなことはどうでもいい

微力ながら魔力を感じる

気が緩んでいたエヴァには気づかれない？

とこうよつこちらにそんなモノがいるとは考えられないからな……

「あなたのような、存在がいるとは思いませんでしたよ……」

ふと田の前に吸血鬼に扮した男が現れる

「それはほじつけのセリフだ……」

「異世界の人だ……私にはわかる」

警戒度を引き上げる……

異世界人だとわかっている……一体どうしたことだ?

「あなたの世界で私達はどのような存在ですか？」

そんな質問が飛んできた

異世界人だと完全に確信している空気が漂っている

否定はできないだろ？…

「悪魔…人の寿命や魂を糧に召喚され、もらつた報酬だけ仕事をこなす…」

「それは人殺しであつても？」

「ああ」

静まり返る空気

「だからそんな殺氣を向けているのですか
大丈夫です。こちらの世界の私達は対価に… そうですね寿命はも
らうことが稀にあります…
殺しの依頼は受けませんし

今回はこここの生徒の1人が、この出し物を成功させたいと心から
願つたことでそれに協力しているだけです

いただいた報酬は… 僅かな魔力

この世界の住人全ては微々たる魔力を持つか、全く持たない人間
です」

なるほど… その使われない微々たる魔力をもらつて、願いを叶える
のか

確かにこの世界じゃ いらないよな、魔力なんて…

そんな微々たる魔力だからこそ、大きな仕事も請け負わなかつた……

そして、俺の魔力量から異世界人と判断せざる終えなかつたと……

「まあいい、それなら倒す必要はないな……
あんまり余計なことしだかすなよ」

「ええ、本物の吸血鬼さんが昨日いらっしゃったときはビックリしましたけどね……あなたのご友人で？」

「あー、俺の嫁だ」

この言葉に目を見開く男

「操られている様子もない・・・吸血鬼化している様子もない・・・
吸血鬼が嫁なんて、おもしろいですね。余程、あなたに信頼を置いているのですね

あれほどの真祖化している吸血鬼なら、あなたのように部屋に入つた途端にこちらに気づきますが、彼女は普通の女の子として居た気づいていなかつたところを見ると、何かあつてもあなたがいることでの安心感があるから気が緩んでいた・・・もしくは、気づいたがあなたが対処してくれると判断し、気づかない振りをしていました

か…」

んーどうなのかな?

単純に気が緩んでいた気も…

まあいいか

「とりあえず、人に害をなさないならいいよ」

「そうですか…受ける依頼は今後気をつけますね
またどこかでお会いしましょう」

そういう残して、吸血鬼に扮した悪魔が消えた途端、出口が前に見
えた

とても不思議な出来事だ

悪魔を見逃す日が来るとは…いや、悪魔というより、神頼みした少
年少女の願いを叶えるために協力しているだけか…

となると、どちらかと言つて

あの電波神のワシリイ、神っぽいと黙つよ、うん。

第1-4話～悪魔！？え？電波神のジジイよつ神つぱこ～（後書き）

K 「『』覧いただきありがとうございます～！」

ルル「ありがと＼＼やれこまゆ～」

K 「ええと、皆様改めまして

アケマシテオメデトウゴザイマス…

今後もよろしくお願ひ致します」

ルル「お願いします」

K 「さて、清涼祭はサクッとあと1～3話程度で終わらせる予定です」

ルル「ほー」

K 「とりあえず書き出してみないとわからないのですが…

それとですねーあの元旦にアップした特別番外編の後、お気に入り登録件数が伸びまして、132件かな？になりました…！」

「ありがとうございます～」

ルル「今後もよろしくねッ！」

K 「ではまた次回～」

第1-5話～Fクラスに属していなければ、文月学園でも結構平穏に過ごせるモノ

K「うんこひは

ルル「こんこひは

K「昨日はオンラインパチスロゲームでエヴァンゲリオンの真実の翼を打つてました……演出見るの楽しいですねえ……だからストックなくて困る」とになるんですけどね～～

ルル「笑い事か？」

K「まあまあ、今回は少々短いです……とこつか今回で清涼祭編終了です」

ルル「早くないか！？」

K「まあまあ、そして今回はですね感想で、エヴァの影が薄いと言われたのもあり、エヴァ×ルルの本当にこひはとした絡みを書きました」

本編どうぞ

第1-5話～Fクラスに属していなければ、文理学園でも結構平穏に過ぎるモノ

清涼祭……Fクラスじゃないだけで、だいぶ落ち着いて過(じ)せた気がするよ

でも何故かさつきから騒がしい

ほんの数秒前からだ…

あ、なんかとてつもなく、とても嫌な音を聞いた

爆発音である

俺は現在、清涼祭終了後

中庭に呆然と立っている

目の前には、爆発音と共に
校舎から咲いた花火と煙りが見える

これもまた一興とな・・・

「エヴァ、お茶ない？お茶……」

「ん？珍しいなルルがお茶なんて…残念だが、そんなもの持ち合わせてはいらないな」

ああ、そうだ…

俺はエヴァを肩車した状態で、今現在

夜空に咲く花火ではなく

校舎に咲く花火を楽しんでいる最中である

何故肩車をしているか？今の現状よりそちらが気になるか？

ならば時を遡るつ

數十 分 前

清涼祭終了～Aクラスの片づけをせつたと終わらせて

何やう花火があがるとのことで、エヴァが見たいと言つていた

麻帆良学園の時、茶道部に属していたためか、和を感じるもののが好きなのね

「どうあえず、何発あがるかわからぬけど…エイでみる？」

「適当に学園内の校舎外を歩いていれば見えるんじゃないかな？」

まあ、確かにエヴァの言つとおりで「おせえます

「じゃあ屋上？」

「屋上は…閉まっているか、人でいっぱいだと思ひ…」

「散歩しながら花火があがるの待つか」

つていうか、何の花火だけ？

清涼祭終了＆試合大会終了のお知らせ？

まああがるモノはあがるつてこいつことで、よしこよしきが

エヴァと並んで歩くコト、5分

「ルル…その、なんだ…」いつも時は手を繋いでやつてもいいぞ…
…」

普段、エヴァとは手を繋いで歩くことは、まずない…。
エヴァがそれこそ妹に間違われる上に、離れたら迷子にでもなつてしまつような子供扱いされているようで、『I・Y·A·D·A』

とのこと

「仕方ないな……」

スッヒエヴァに右手を差し出すと、エヴァは当たり前だと呟つかの
よつに、その手をガシッと掴んだ
まあ確かに、夫（俺）、妻エヴァですかから、そつなのですが……

ちよつとしたイタズラ心が作動し

そのままエヴァを軽く引き寄せ
左脇を左手で掴み、右手を右脇へ…

そしてヒョイと肩車してしまったのである

「なつ・・・・・る、ルルつ、お、降ろせ！恥ずかしいだろつ！？
子供扱いするなつ！…！」

そつジタバタと肩に乗りながら文句を言つエヴァは、

カワイイ！――――

「まあヒュア、たまにはいいじゃん？」

小さいヒュアだからこそその特権だよ？肩車なんて…それこそ体育祭なんかの競技でこんな態勢でなきゃいけない、ってことでもない限りね」

「それでもだな…ホント、不意打ちで強引なコトをするのが好きな奴だよルルは……」

「あえてそういうわけじゃなくて、自由気ままに生きてるから、そういうふうていう事なんだけどね」

何分か肩車の状態で歩き、冒頭に繋がるわけだが…

なにやら騒がしいなあ……って思つてたら爆発音と共に、花火と煙り

それはそれは珍しい

校舎に咲く花火だった

こんな珍しいモノが見れるなんて…

うむ、よきかなよきかな

あーお茶飲みたい！

という感じですね

「ルル、この世界での花火は、空に向けて放つものではないのか？」

「いや、他と同じで空に向けて放つものだよ……」

エヴァにこの世界の常識が、異常な形で伝わってしまうじゃないか！と若干の怒りを感じつつも、エヴァと二人花火が打ち込まれた校舎を見つめていた・・・

その後、肩車したまま散歩をしていると、携帯が鳴り打ち上げの誘いがきたが…
断つて帰宅することにした

帰宅すると、『飯を食べ、お風呂に入り、いつものようにエヴァを抱いて寝る…

特別な出来事があることより、そんな何事も変わった様子がない日常に

嫁がそばに居て、嫁の温もりを感じれる

それが俺にとっては幸せなのだ…何故か、そう改めて感じることが出来た一日であった

第1-5話～Fクラスに属していなければ、文月学園でも結構平穏に過ごせるモノ

K 「『』覧頂ありがとうございます」

ルル「平穏つていいと思つよ、うん。」

K 「平穏すぎるバカテス特有の『メティ』感が失われている気がするけどね～～」

ルル「そうだけど、何気ない幸せにたまにふと気づいて、実感できるって大切だよ」

K 「うんうん… ってルルの意見はまあ放つておいて…

お気に入り件数が141件で評価してくださった方が1人増えました

さらにPVアクセスは8万を越え、ユニークアクセスは9200越えですかね…ええ、あり難いですね

更に数日前から、バカテスの週間ユニークアクセス順で表示する1ページ目に来ており、大変嬉しい思いますよ～」

ルル「それだけたくさんの人を見てもらつてるって実感できるのは、嬉しい以外のなにものでもないよね」

K 「うんうん

では、本田はこの辺で…」

また次回も是非ご覧ください

第1-6話～ルルとエヴァのバカ？バカッフル？な日常～（前書き）

K「えーお待たせしました！」

ルル「お待たせされました」

K「ちよつと時間がとれなくて…遅くなりました。すみません」

ルル「それで、今回のお話は？」

K「今日は強化合宿編前の閑話といったところですかね」

ルル「ほー」

本編じづや

第1-6話～ルルとエヴァのバカ？バカッフル？な日常～

清涼祭終了から学力強化合宿までの間のくだらない話しである。.

「エヴァ ああああああああああああああああああああああああ

「ルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル

互いに名前を叫びあう、ルルとエヴァがいる

何故この様な状況になっているかと云つと、時は少し前に遡る

「ルル、面白い動画を見つけたぞ」

休日、ルルとエヴァは家でまつたりと過ごしていた

ルルはソファに横になり、まつたりDVD鑑賞をしていた
エヴァはテーブルの上にノートパソコンを起動し、ニニ動画を
こちらもまつたりと見ていた

そんなエヴァが面白いものを発見したらしくルルに声をかけた

「んー? どんなー?」

そう言ってルルはエヴァのパソコンの画面を覗き込む

そこには、ハイパーボイス世界選手権とかいうよくわからない大会
の映像が映し出されていた

専用の機械に繋いだマイクに向かって大声で好きな言葉を叫ぶモノ・

・・・

大きい声を出せた者が勝ちといつ至つてシンプルなモノである

「これ、やつてみたいぞ、ルルつ」

ヒューバが田を輝かせているのである

どうやら、面白がつたと思つたものはやつたくなる性質らしく

「機械取り寄せると?」

「いや、実は用意してあるんだ…」

どうやら彼女は、数日前に機材をネット注文し、既に準備万端であったようだ

ルルに話しを振るために、その動画を見せたと……

といつわけで、さくそくやつてみることにした2人

「あー————つ

ルルがマイクに軽めに声を出す

機材が指した数値は、そこまで高くない

「ルル、もつと大声で！」

「うああああああ——つー」

先ほどよりも大きい数値が出る

「てか、エヴァがやりたがつたんだから、エヴァがやれよ…」

その通りである

何故かルルにやらせたがるエヴァである

「ぬう？ そうか？ わかつた」

ルルからマイクを受け取り、大声をマイクに吹き込む

ମୁଦ୍ରଣ କାର୍ଯ୍ୟକ୍ରମ ପତ୍ର

「ねえ、エヴァ

ルルじゃなくて、ルールに聞こえるよ?」

「そ、うか…」

「どうより何故、名前を呼ぶ？」

近所に俺の名前が響き渡ってしまうだろうが……

苦笑いしつつルルがそう言つた。

その前に、近所迷惑だと云はれていく牠だ……

「愛する者の名を呼んだ方が、力が入る気がしたんだから、仕方ないだろ？」「

「ああ、そり…まあ確かにそうかもね」

そうなのだろうか…まあ人それぞれだろうが…

「ルルもやつてみたらどうだ？」

こうして、序盤に戻るのである

「エヴァ あああああああああああああああああああああああああああああ」

互いに大声で名前を呼び合う

もう一度詰める

ちなみに大きさを表す数値は、高めであることが見て取れる

「ルル、す、すうとやせにこねねねねねねねね」

突然、エヴァが少々顔を紅くしながらも、そんな言葉を口走る

一応おさらいしておこう
この2人、夫婦である

ルルーシュ・T・ランペルージ

エヴァンジエリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）

いい雰囲気の時など、甘い言葉を言い合いつなコトもあるだらうが
大声で言つのは、恥ずかしこものだと思つ

「わばこひひひひひひひひー。

つて、じつちかと呼ぶと、セコフが男女逆だらうが！…！」

Hヴァの言葉に返しつつも、ツツ「!!」を入れる

ああ、いつの間にかマイクが2本になつて、もつ既に声の大きさの
数値など見ていないとほ、そつとしておいつと思つ

「Hヴァ、大好きだあああああああああああああああああああ
あつつ！…！」

愛を表現する為のひとつ

そんな言葉をいつのはいいが

もう一度言つ

近所迷惑だ

数十分後、お隣さんからの苦情により、止めざるを終えなくなった
お2人

「とこりで、エヴァ……」

「な、なんだ？」

お隣さんからの軽い説教を喰らった2人は、一息ついて紅茶を飲んでいた

そんな時、ルルからエヴァに言葉が投げられる

「何が狙いで、これをやり始めた?」

「えーっと……」

実は、ハイパー・ボイス世界選手権で、彼の皆田の言葉を叫んでいた
男があり
何を思ったか、ルルにせりせてみよつと、思に立つたエガアなので
ある

「ああ、やつ……やつぱつやつぱつとか

たまに変な」とをルルにやらせるエガアである
だが、ルルもそんなエガアの要望になんだかんだ言いながらも、答
えてしまうのである

「エガア と週！」やうな口々が幸せなどあああああああああああ
ああああああつ……」

突然叫ぶルルであるが……本当に騒音として近所迷惑だからや
めていただきたいものである

「ま、まあその、なんだ…突然大声で言わると、ちょっとその…
て、照れるというか、う、嬉しいというか…／＼う…わ、私もルル
と一緒に居れるのが幸せだよ…／＼／＼」

「エヴァ、おいで…」

ルルはエヴァが焦つているような感じが可愛すぎてたまらないらしい、そんな言葉を放ちつつ両手を広げる
ルルの言葉にすんなりと従い、エヴァはソファの上のルルに抱きつく
この2人の日常は、砂糖まみれである
そんな砂糖まみれな日常を、糖分少なめで提供していきたいと思う
今日この頃である

そして……些細な事で、コトを最後までしてしまつのは、まだまだ
2人が若いのが原因だらつか・・・・

この先は糖分控えめ＆自主規制により、どうなつたかは皆様で「」想
像いただきたい

第1-6話「ルルとエヴァのバカ?バカッフル?な日常」（後書き）

K 「『』覧いただきありがとうございます！」

ルル「ありがとうー！」

それにもしても、新話あげてなくとも、一日辺りのニークアクセス3桁はあるみたいだね」

K 「ええ、そんなんですよ…なんと1万ニークアクセス突破いたしました！」

PVアクセスももつすぐ10万というところまできてまして」

ルル「かなりの人人がこの小説を見てくれたってことなのか

K 「そうそう

それにお気に入りも145件になってるし、感想を定期的に送ってくれる七夜和様とゼロ様もいらっしゃるし…

続きを読む書いてアップしてさ、それに対する感想とかもらえるって、凄く続きを読みたいって気持ちになるわ～あり難い話しです。」

ルル「うんうん」

K 「では、この辺りで～また次回も是非『』覧ください！」

第1-7話～17話としてカウントすべきか、16・5話とするべきかマジ熱など

K「こんばんは～」

ルル「こんばんは」

K「何故か、明け方アップした第1-6話がうまく検索の新着順に反映されていないようで…ヨニーグが伸びなかつたよおおおーー！」

ルル「どんまい」

K「ちょっとショック・・・でもしつかりと見ててくれた方も何十人かいるようでよかったです」

本編どうぞ

第17話～17話としてカウントすべきか、16・5話とすべきかマジ懶んだ。

ある休日の午後・・・・とある豪邸のとある部屋・・・・

ティーセットをテーブルに並べ

優雅にティータイムを楽しんでいたとある女性

彼女は100人見れば、99人はカワイイ、綺麗、などと褒め称え
るだろう美少女である

綺麗にお手入れされた長いまつすぐな黒髪
小顔であるうえに大人しそうな雰囲気

座る姿勢は、それだけで美しく…

そんな少女の名前は霧島翔子

現在文月学園に通つ高校2年生である

所属クラスはA

しかも学力は学年主席

容姿端麗成績優秀

大和撫子とは彼女のような人を指す言葉である

そんな彼女には、小学校からの幼馴染である坂本雄一という人物がいる

雄一は翔子と同じく文月学園に通う高校2年生である
所属クラスはF

そして、翔子は幼馴染の雄一に恋心を抱く

それはつい最近まで、まったくブレることのない
一途な想いであった

だが、高校2年の春
とある少年が転入してくる

ルルーシュ・T・ランペルージ

彼はアイドルにいてもおかしくないほどの美形であり、モデル並と思われるスマートとした体型であった

そして頭脳明晰、運動神経抜群と…惹かれる女性は多いだろう

だが、彼は自由人である

悪くいえば自己中心的思考の持ち主である

そんな彼には、妻が居て

その妻は西洋人形のように整った顔立ちをしており、体は小さく華奢である

彼と接しているなかで、彼のコトが気になることに気づいた翔子は彼の妻、エヴァンジェリンと接触し、彼の情報を得る

そして翔子はふとティーカップを片手に考えるのであった

ルルーシュ……複数のお嫁さん……浮氣?
でもエヴァは許してたみたいだし……

…一夫多妻制の国から来た?
…18歳未満で結婚しているから、考えられる?

彼の何が知りたい?

彼の秘密?

彼を知つたら、『気になる』という感情が、友人としてか異性としてかわかる？

それは、わからない… ただ、今は彼を知るコトが、自分の心を知る近道かもしれないから…

翔子は、考えるひたすら、ルルーシュとその周囲の人物のコト
そして、雄一のコト
自身の気持ち

いつまでこの不安定な状態が続くのか…

近い未来、翔子の目に映る人物は誰なのか…

それを知るにはもう少し時間がかかりそうである

翔子は思考するのを止め、自室に行き勉強をする

その日の夜

夕食を済ませ、入浴も済ませて
髪を整えていた

そんな時、携帯にメールが届く

送信者はエヴァであった

『ルルの寝顔を特別にわけてやろう

いらなかつたら消せ』

たつた二行の文章と、添付された画像ファイル

保存する前に確認するためファイルを開く

そこには、大きい猫のぬいぐるみを抱き枕にして寝る、ルルーシュの姿があった

意外である

ルルーシュとネコぬいぐるみ……

ふふつと軽く翔子は笑い

画像を保存する

『ありがとう
保存させてもらつた

またルルーシュの学校では見られない姿を撮つて送つてくれる
嬉しい』

エヴァ宛にメールが送られた

数分後

『気が向いたらな』

短い返答ではあつたが、ルルーシュが言つて…エヴァはツンデレといふ奴らしいので、これは訳すと…『わかった、また送るね』といふ感じになるとと思つ

そう翔子は理解し、ベッドに倒れこむ

そして部屋は静まり返つていき静寂に包まる

明け方の鳥の鳴き声が聞こえるまでこの静寂の中に響くは、翔子の微かな寝息と、たまに寝返りをうつときの音だけである…………

第17話～17話とじてカウントすべきか、16・5話ひずべきかマジ凶など

K「『』覧いただきありがとうございました」

ルル「ありがと……」

K「ええと、今回は何故かこんな話しになりました
誰も『』を使ってコメントしていくっていう…」

ルル「ウケタ…」

K「打ち込んでいたら勝手にこんな流れになつたけど… よかたのか
なあ？」

ルル「たまにはいいんじゃない？」

大半が『メントで埋め尽くされてこの回もあるんだから

K「確かに…」

「こんな回だつたけど、いかがでしたでしょうか？」

また次回も是非『』覧べださいねっ

第1~8話～強化合宿編スタート～…まだ前回じゅんこ～（前書き）

K 「いんばんは～すみません少々遅くなりました
睡魔に勝てず、書きながら寝落ちしてました」

ルル「おはよ～」

K 「ま～、とこ～」とで、強化合宿編まつたり開始です～。」

本編ビュ～

第18話～強化合宿編スタート！…まだ前日じゅん～

「事前に報告していた通り、明日から学力強化合宿です
Aクラスは学校からリムジンバスにて向かいます
遅刻しないようにきてくださいね

では、朝のホームルームは以上です」

高橋女史はそう告げて教室をあとにする

「なあ、利光」

「なんだい？」

「学力強化合宿つて全員強制参加？」

「そうだよ、授業の一環だからね」

めんどくさいなあ……
どうにかサボりたい
いや、欠席を希望する

男女別室なのは当たり前つていうことはだよ
エヴァと別室…行く必要なんてないつ

「…ルルーシュ」

「ん? どうした翔子」

いつの間にか翔子が目の前にたつている
よくある光景である
むづこの隠密性にはなれたよ……

「…サボっちゃダメ」

「、心の中を読まれただと?」

読心術まで覚えたのか・・・恐ろしい娘め!

「嫌だ、サボるー!」

「…ルルーシュわがまま…子供っぽい…」

翔子の発言に思わずきょとんとしました
子供っぽいって…そんなことない!

クスクスと横でエヴァが笑っているが…まあ今は氣にしてられない

「翔子さん、それでどんな御用があつて？」

「…ただサボりそつた雰囲気を感じたから忠告」

それだけ言い残し自分の席へと戻つていく翔子

そんなにサボりたいオーラが出でているのかね……？

「ルル、だいぶ翔子に気に入られてるな
よくお前の癖や表情を観察しているから気づいたんだよ翔子は」

「そうなのですか…気に入られてるのね
ところでエヴァよ・・・・」

「なんだ?」

「学力強化合宿も楽しみなのか?」

エヴァは若干そわそわしているといつか、テンションが高いといつか

「や、そんな」とまじめじりじりしか思つてないぞ!」

少し思つてゐるのね…

何が楽しみなんだか知らんが……

「・・・そういうえば次の満月は強化合宿中じゃないか?」

「...ツービ、ビーフしたらいい!?ま、まずいよな?」

知らぬ人に補足しておこう

エヴァは真祖の吸血鬼である

満月の晩には普段よりも、魔力が高まる

「いや、まあ魔力が高まるだけだろ?」

「うーーーーん... そういうえばそうだな
その魔力が周囲に影響を及ぼさなければいいってことじるか...
ルル、魔力を抑えるアイテムないか?」

「あるよ、帰つたら渡すわ」

帰宅後しつかりそのアイテムは渡しました

「ルルーシュ、ちょっといい?」

何故か真剣な眼差しで優子が声をかけてくる

「ほー? 今回せびのよつない用件で「じやこますか? お嬢様」

「お、お嬢様じやないつーー

まあいいわ、とりあえず「じやちきなさいー!」

腕を引っ張られ、人気の少ない場所へ連れて行かれる

「なんでしょう?」

「秀吉と私、どっちが可愛く見える…?」

ほわい?
何故そのような質問に…?

「えつと?」

「んーどっちのほうが、女性としての魅力があるかつてことー。」

女性としての魅力ねえ

「根本的に、秀吉は男なわけで…」

「あーじゃあ、秀吉がもし女だったら?」

「どうだらうね、秀吉が女性であれば、おじとやかそうでカワイイ
かもしけないけどね

優子は優子でカワイイといふはあるし

「……顔や体格は似ていても、まったく中身の違う双子だからな……」

「…………私のカワイイところって？」

それ聞いたやうのー？」

「シンデレ属性」

「私、シンデレなの？っていうか、シンでもない…シンはあるかも
しれないけど
デレたことはないと思つんだけど、なんでルルーシュの中で私は
シンデレ属性になつてるのよ？」

「安心しろ、お前がシンデレじゃなかつたら、ただの性悪女だ」

「…………言つてくれるわね」

「暴力的、猫かぶり、上から目線
それだけなら誰も魅力を感じないだろ？、すぐそこには外見は瓜
一いつの秀吉がいるんだから」

「はあ…………それで私の魅力は他にないの？」

あれ？カワイイところを聞いてたのに魅力に変化してる……？

「バカなどいる？」

「はてな付いている意味もわからないし
それ以前に、私がバカだつていうの？」

「学力的バカつて意味じゃなくてさ
まあなんでもいいけど…とりあえず俺が言いたいのは

秀吉の方が男子に告白される回数多いのは、単純に見た田カワイイし、親しみ易い雰囲気があることがあげられる
中には、顔だけで告白するから、秀吉に振られたあと優子に告白する奴もいるだろう

そんなことは気にするな、お前の魅力や良さをわかつていな奴にすぎない

そんな奴はサクッと切り捨てろ

優子なりの魅力がわかつてる奴だけ相手にしてりゃーいい

「そうね…なんかもつと不真面目な答えを出されるかと思ったけど意外と真面目な回答してくれてありがと」

「ひとつアドバイスするなら、別に猫がぶりやめていいと思つよ

「ま、まあ、考慮しておくれ…じゃあね、ありがとう」

走りさつていく優子であるが…なんで俺に相談してきたんだ?
男子の意見を聞きたかった?

それなら利光とか…ってあいつは無理か世界が少し違う
吉都君…そこまで親しくないか
他は…無理だな

で俺か……って言つても、優子とそんなに深い関わり持つていたつ

け？

学校外で遭遇したことないしな・・・

よひわからん

第1-8話～強化宿編スタート～…まだ前口じゅるー～（後書き）

K「『』覧いただきありがとうございます！」

ルル「いやー、はじまるかと思いまや、まだ前口なのね」

K「あはははは・・・・まあちよつと、優子とかAクラス面々と絡ませたくてね

愛子は絡ませられなかつたけど・・・」

ルル「頑張れ！」

K「では、次回更新も頑張りますので、どうぞよろしくお願ひします！」

第19話「だから、まだ合宿始まってないのよ？前回なの前田…（Fクラス側）」

K 「こんばんは」

ルル「こんばんは」

K 「いやー、なんかさ今日お腹痛くて調子悪いわ…」

ルル「わっわと薬飲んで寝る」

K 「頑張起きたばかりなんですね…」

ルル「頑張つて寝ろ」

K 「…」

本編:じいづや

第1-9話「だから、まだ合宿始まつてないのよ？前日なの前日…（Fクラス側）」

吉井明久はいつものように登校してきて、いつものように下駄箱を開けた

すると上履きの上に一通の封筒を発見した

手に取つてみると、差出人は不明

これを誰かに見られたら、ラブレターだと勘違いされてFFF団に追われるはめになつてしまふ！

と明久は考へ、すぐさま鞄の中へ放り込んだ

明久は屋上に逃げ込み、そこでゆっくりと封筒を開ける

その手紙には以下記されていた

『あなたの秘密を握っています』

明久の悲鳴が、一瞬青く澄んだ空へ響いたのは言つまでもない

一方、坂本雄一氏

友人で幼馴染の霧島翔子と共にお話中である

「翔子…その手に持つているMP3プレイヤーはなんだ?」

「…音楽」

雄一が不信がつて聞いたのは理由がある

翔子は極度の機械音痴である

よつて、そんなMP3プレイヤーなんて持ち合わせているはずがない

何やら危険を察知した雄一は翔子の手から、MP3プレイヤーを奪い取り

再生ボタンを押した

『翔子、愛してる。俺と結婚しよう。』

間違いなく坂本雄一の声だ

そしてそんな言葉一言も言つた記憶はない

合成か…瞬時に雄一の脳裏にその言葉が浮かぶ

『翔子、俺の嫁になつて生涯共に過ごう』

続けてルルーシュの声で聞こえてくる言葉

「…2人の男性から求愛される…ちょっとした夢」

「ちょっとした夢じやねえ！
これはどうあえず消去しておく…」

「…待って、まだお父様に聞かせてない」

「聞かすな、アホ！」

まるで俺とルルーシュで翔子をとりあつてるみたいじゃねえか
って何故、ルルーシュ？

翔子が気になる奴つてルルーシュなのか？

いや、待てよ、その前に、俺がそんなこと気にする必要があるのか？

雄一の頭は素直になれず、ぐるぐると混乱していく一方である

「…消しちゃダメ、ルルーシュのほほえみ高いから」

高いってなんだ？誰かから買つたのか…まあ翔子にこんな器用な口
トができるとも思えないしな

「翔子…ところでなんでこんなモノを聞いていたんだ？」

「…妄想用道具」

「わかった、翔子に妄想癖があるのは理解できたが、これでどんな
妄想をする気だ？」

「…雄一とルルーシュが……裸で私を奪い合つ」

「・・・・まあ何故裸かは置いておこう

「こんな危険なモノがあつてたまるか！消去して明日返す」

「こんなものは、コピーにすぎない
オリジナルを消さなければ……」

今は翔子の気がたぶんルルーシュの方に向いていはいるが
もしこちらに戻つてきたらどうなるか、わかつたもんじゃない
危険すぎる

その一言に呑める。

教室へ雄一が出向くと、何やら問題があつたようで明久が嘆いていた

「助けてムツツリーー！僕の名誉の危機なんだ！」

「後にしろ、俺が先だ……」

明久とちょっとした言い争いにもなつたが

雄一と明久はそれぞれ事情説明を終わらせる

「……とにかく調べておく」

2人はムツツリニーに調査を依頼したようである

果たして、この事件にルルーシュは絡む気があるのか？
それとも巻き込まれてしまうのか？

そして、翔子はいつたいどんな妄想劇を繰り広げながら、2人の言葉を聞いていたのか？

全てが明らかになる日は来るのか？

行く末は、作者も想像がつかなかつたりする……

第1-9話へだから、まだ合宿始まつてないのよ？前田な（Fクラス側）

K「『』覧いただきありがとうございます」

ルル「ありがと『』やります」

K「合宿の前田…第1-8話の雄一や明久の話しあり『』だけ書いてみました

まあ雄一と翔子の関係が少々変わっただけで、ほぼ原作と変わらないのですけどね」

ルル「まあ仕方ないわー

ところでお気に入り件数が160超えたみたいだね」

K「ええ、1話アップすると数人ずつお気に入り登録が増えています

あり難いですねえ…数日前にPVは10万を越え、ユニーグは1万を越え…ホントはユニーグ1万突破で番外編書こうかと思つたけど

俺笑いのセンスないじゃん？だから止めておいたんだ（・・・

、＊）

ルル「そうですかい、笑いのセンスないやつが、コメディー系の二
次小説書いてるなよ……」

K「言えてるwww

ルル「まあいいや、今日はこの辺で？」

く「はい、とこり」とで、また次回もよろしくお願ひします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4598z/>

俺と俺の嫁（エヴァ）と召喚獣だと？

2012年1月13日18時56分発行